

---

# わる子ちゃん

藤村香穂里

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

わる子ちゃん

### 【Nコード】

N2197H

### 【作者名】

藤村香穂里

### 【あらすじ】

ピンクの豚のぬいぐるみのわる子ちゃん。そしてその仲間たちの日常。

「わる子ちゃん」は、お子様向け？ の短い作品集。

「焼豚戦隊！わる子レンジャー」は、戦隊ものの連載です。そして「わる子ちゃん2」は、一話完結短編。大人向けのイメージです。

『わる子ちゃん』 1・わる子ちゃん

あるところにわる子ちゃんという、女の子がいた。  
わる子ちゃんは、ピンクの豚のぬいぐるみだよ。  
名前のとおり、とっても悪い子なんだ。

人間で言えば、小学校5年生くらいかな。  
なのに隠れてこっそりお酒を飲んでいるんだ。  
注意するけど、余計面白がって飲んでるみたい。

そして、悪い子だから、夜遊びもする。  
夜遊びのお友達は、フクロウのホーちゃん。  
夜更かしだから、ホーちゃんくらいしか遊べないんだよね。  
で、朝方まで遊んで帰ってくる。

で、翌朝は9時とか、10時くらいに起きる。  
とりあえず、学校には間に合っている。

わる子ちゃんの通ってる学校は、アバウトではじまる時間も結構  
適当だから助かっている！

これからわる子ちゃんの日常を書いていくよ。

『わる子ちゃん』 1・わる子ちゃん（後書き）

もしかしたら更新停止の文字を出すかもしれませんが、ゆるーくや  
っていきますのでよろしくお願いします。

## 2・大トロ

豚さん族は、後ろにピグって言う、名称がつくんだ。

天才ピグとか、食いしん坊ピグとか、おしゃれピグとか。豚さん族にはいろんな子がいる。

インディアンピグは、なかなか賢い子だ。

何でも発明してしまうんだ。

そして、へんてこな薬も作るし。

本業は、発明！

会うたびにいろんな商売をしているのが不思議なところだ。

これから、ちよくちよく登場するよ！

それから、だめちゃん。

なんでも、だめって言うんだ。

でも、本人にいじわるしてるつもりはない。

だめちゃんは、学級委員もしている賢い子。

わる子が夜更かしてゲームをしていると、やってきて、

「そんなにゲームばかりしたら、だめだよ！」  
って言う。

そして

「夜は寝ないとだめさ。あゝあ。だめだねえ〜。」って。  
他にも、

「歯はていねいにみがかないとダメさ。」とか、

「頭洗うのいやなの？ だめだねえ！」

とか、とにかく、厳しいんだよねえ〜。

わる子は、小さな時からママに「夜、遅くまで起きていると大ト口に連れていかれますよ！」と注意されていた。でも、大ト口ってどんなものだから、誰も見たことがない。現にわる子は、最近はいいい子だけど、夜カラオケに行ったりしていた時も大ト口なんて、見たことない。作り話だろうとわる子は思っている。

ところが！

わる子の双子の兄のわる夫が見たつていうじゃないか！

真つ黒で大きくてつるつるしていて、おまけに何か変な匂いもするみたい！

そりゃ、怖いよ！

わる夫は慌てて、寝たフリをしたらしいよ。

しばらく、学校ではその話題で持ちきりになったよ。

わる子は、人間の子供で言うと、小学5年生くらい。

最近、クラスの仲間の背が急に伸びてきた。

わる子は、聞いてみた。

「夜遊びをやめたら、伸びるよ。」

「そっか。」

わる子は、夜遊びはやめて、早寝することにした。

そしたら学校にも遅刻しなくなった。

先生が、

「最近、わる子ちゃんは、朝早いですね。」ってほめてくれた。そんなわけで、いい子になりつつあるわる子ちゃんだった。

### 3・インチキ堂のおやじ

インチキ堂のおやじ

インチキ堂は、インチキピグがやってるお店。  
わる子は、買い物に入ってみた。

「いらっしやい！」

店主のインチキピグが言った。

「最近入った高級時計だよ！」

宝石がちりばめられてキラキラしてる！

「いくら？」

しばらくの沈黙を置いて、インチキピグ。

「200万円です」

「にひゃくまんえん〜!？」

「だって、こんなに宝石が入っているんですよ」

「そんな高いのいらないよ」

わる子がぐるりと店を見渡すと、素敵な小物入れがあった。  
わる子の好きな色。

水色なんだ。

真中に赤い宝石が一個、埋まっている。

「これは、いくら？」

「あつ。それはお安いですよ。10万円です」

「そんな高いの買えないよ」

「うん。仕方ないですねえ。じゃあ、特別に5000円にしましょ」

「10万円が5000円だって！？ インチキ臭いなあ」

でも、どうやらその赤い宝石は、プラスチックみたい。

「これ、プラスチックみたいじゃない？ やめた」

ほかに見てみると、宇宙ステーションの模型があった。

「あつ。かっこいいなあ。これ、欲しかったんだ！ ねえ。いくら？」

「10万円です」

「そんなのわる子のお小遣いじゃ買えないよ！ もっと安くしないと」

「仕方ないですねえ。1万円ですでしょ」



「それだって、高いよ」

「うん。わかりました。100円です」

「買った!」

わる子が、宇宙ステーションの模型を受け取ると、へちゃつ……と壊れた。

「あつ。壊れているじゃないか! インチキ!」

「インチキじゃない! それを返しなさい。インチキなんて言うやつは、出て行け」

「100円返せ」

インチキピグは、わる子に100円を返した。

わる子は、ぷりぷり、怒りながら出て行った!

こつそり、地下でその会話を聞いていた泥棒がいたよ。もぐらのラットさんだ。

(盗む価値なし。)

退散していったよ。

そして、インチキ堂には今日もお客が訪れる。

「このコロッケいくら?」

「ひとつ、1800円です」

「たっかゝい！」

「何言ってるんですか。そのコロツケは安いんですよ。こちらのものとお味の良い最高級コロツケ！ 10万円ですよ」

インチキ堂は、なぜだかつぶれずに生き残っていて、毎日こんな会話が繰り返されているんだ！

あたしのピグ

わる子がマンガを読んでいると、あたしのピグがやってきた。

「それ、あたしの本！」

彼女はなんでも自分のものだって主張する。  
わる子が洋服を選んでいるときも

「それ。あたしの服じゃ〜ん」

違うよ！ って言っても、

「まあ。いいわ。貸してあげる！ フッフ」ってこんな調子だ。

あたしのピグのママがやってきた。

彼女はママに叱られてそして連れて行かれちゃった。

でもね〜。  
なんか、憎めない子なんだよね。

いねむりピグ

いねむりピグは、いつも眠くって仕方がない。  
今日も、学校でこっくりこっくり。

「授業が始まるよ！ 起きなきゃ！」と、友達が注意してくれた。

「ウン」

いねむりピグはつとめて、起きていようと思った。

でも、いつの間にか、船を漕いでいるんだ。

そのたびに友達が起こしてくれる。

でも、いねむりピグなんだから仕方ないよね。

隣の席の子が、

「これがいいぜ」と貸してくれたのが、めがね。

めがねのレンズに目が描いてあった。

「これで、思う存分寝てもいいよ！」

「ありがとう！」

いねむりピグは、早速めがねをかけて眠ったよ。

先生が、

「まあ。いねむりピグさん。今日はめがねですね。しかも！ぱっちりお眼目を開けていますね。勉強熱心でよろしい」

ほめてくれた。

そしてさらに先生は言った。

「じゃ。いねむりピグさん。教科書のこのページから読んでください」

近くの席のピグが、鼻をつまんで、読み始めた。

「はい。そこまでで、よろしい」

「先生。ぼく。風邪ひいちゃってへんな声なんですよねー」

本を読み終えて、友達ピグは言った。

そして、まるつきりばれなかったんだ。

授業が終わって、先生が出て行くと、いねむりピグの周りのピグ達は、

「くすくす」

と顔を見合わせて笑ったよ。

いねむりピグは、目が覚めて、不思議そうにしていたけどね！

#### 4・旅ハム

旅ハム

旅ハムは、旅をしながら珍しいじゅうたんなどのものを売っているハムスターだ。年に2回くらいしか来ないからとっても貴重な。もともと、旅ハムは、一人じゃない。いろんな旅ハムがいるから、合わせれば、月に一回くらいは、誰かに遭遇できるけれど。ピグたちが遊んでいると、旅ハムの行商が通りかかった。

「あつ。旅ハムさんだ！」

「旅ハムさん。今日は何を売っているの？」

子供たちは集まってきたよ。旅ハムは、商品を並べて見せた。

「今回から、ウンドさんのブランドのお洋服を扱っているんですよ。」  
値段は、なんと！ 1円〜3円くらいなんだ。子供たちは喜んでお小遣いで、買い始めたよ。そして、旅ハムは、また来てね〜の聲に送られて去っていった。

旅ハムの次の行き先は、インチキ堂。

「待っていたよ！」

インチキ堂の店主は大喜び。ここで、ほり出し物を見つけて、高く転売するんだからね。店主は、ブランドの服やじゅうたんをしっかりとま買い占めたんだ。

旅ハムは、すっかり荷物が軽くなって、「まいど〜」と去っていったよ。

温泉！

ある日、わる子が地面を掘ってみると、なんと！ お湯が噴出した！

「うわ〜！ す、すごい」

わる子はびっくりだ。

「わる子さん。そりゃ、温泉が出ますよ」

インディアンピグが言った。

「温泉？」

「そうですね。ここを銭湯にしましょう。とりあえず、建物を作りましょ」

わる子は、インディアンピグの言うとおり、大工さん呼んだ。

大工さんは、インディアンピグの知り合いのハムスターだった。

「ダンナ。どうするんでえ？」

「こんな銭湯がいいな」

ささつと、インディアンピグが、図面を出した。わる子は目をぱちくりさ。

「わる子さん。あなたが、この主ですよ」

「へえ〜？」

「わかんないことがあったら、アドバイスしますよ」

なんだかわかんないけど、インディアンピグは、企画から設計までなんでもやってくれるんだ。彼のアドバイスを受けて、お得な値段で24時間営業したよ。銭湯は、すごく繁盛した。

「夜中に入りに来て帰るのもね〜。泊まる場所もあつたらいいかも」

わる子はつぶやいた。

「じゃ、隣にホテルを作りましょ」

そうして、短期間でわる子は、どんどん手を広げた。いつの間にか、わる子は社長になっていたよ。わる子は、温泉のとなりホテルを建てた。

インディアンピグの紹介で、ハムスターたちを沢山雇った。温泉もホテルも繁盛した。だってすっごく安いんだもの。いつも満員！

となりに建っていた、インチキ堂ホテルは、お客さんもなくながらくんとしていた。そのうちなくなってしまったよ。わる子は隣のホテルを買い取ることにした。そして、隣のホテルとの間に流れていた川の上に橋をかけて、簡単に行き来できるようにしたんだ。それまでは、わる子のホテルは、名前もなく、ただ「わる子ホテル」って呼ばれていた。

でも、従業員のハムのアイディアで、「天の川ホテル」っていう名前になった。川の周りに鳥を飼ったり、橋に星をデザインしたりした。

ハムたちは、みんな、わる子のことを社長と呼んだ。それでも、わる子は一応学校にも通っていたし、何故だか新聞配達までしてるんだよね。

## 5・風の強い日

### 風の強い日

今日は、ものすごく風が強かった。わる子たちは、学校へ向かっていたよ。途中、だめちゃんやばかピグもやってきた。わる子たちは、吹き飛ばされそうになりながら、ときどき立ち止まっては、やとやと歩いていったよ。学校の近くで、体に米袋をしょって歩いている天才ピグに会った。

「吹き飛ばされないようにする、おもりだよ」

「どうしてお米なの？」

「重さがちょうどいいのさ」

学校が見えてくると、先生が向こうからやってきた。

「先生だ！おはようございまーす！」

「おはよう。今日の学校は中止にしますよ。風が強くて危ないですからね」

「え〜。先生。連絡網回してよ」

「はいはい、実は今、回っている途中なんです」

そこに、ころころと、風に吹き飛ばされて転がっていくハムスタ―がいたよ。まもなく、ハムちゃんのレスキュー隊が来て、ハムを救出し、重りをつけて、去っていったよ。

「この風はいつ、止むのかなあ？」

「今日いっぱい吹いてるんだって」

風が強いから、油断するとなんでも飛んでくる。なんと、先生のかばんが、ぱかっと開いて、テスト用紙が風に舞って行ったよ。

「アラ〜こんなにならばつちゃ、拾えないわ！ みなさん。許してね〜」

舞っていくテスト用紙がちらりと見えて、わる子ちゃんは、98点。だめちゃんは90点だったよ。



ばかピグは45点。

「やめてよ〜はずかしいよ〜」

どこで、誰が拾って、見るのか、高く高くテスト用紙は舞い上がっていった。ばかピグのテスト用紙は、隣の町の家の中庭に引っかかって止まった。

「何？これ。テストじゃん！」

その家の子供で、ばかピグと同じ学校に通ってる子が発見した。国語のテストで、

「いかにも」を使って文章を作りなさい」とあった。

(答え)「里芋は油揚げと煮たらおいしいけど、いかにも合うよ」となり町の子供はげらげらと笑っていた。

「狙ってるのかなあ！ ばかピグ君」

おならピグ

わる子が寝ようとしていると、おならピグがやってきた。布団を見つけると大喜び！ 早速、もぐりこんできて、プーツとおならをした。

「うわ〜！ くさい！〜！」

わる子はおならピグをつまみ出した。おならピグは、布団にもぐりこんでおならをするのが大好き！

「自分のおならは、かわいいものさ。だって自分の子供だもの！」  
とってはばからないんだ。

そこへもう一匹のおならピグがやってきた。

「やあ。君もおならピグ？」

「うん」

「気があうね」

「布団を探しに行こう」

「デパートならたくさんあるぜ」

二人は（二匹は？）インディアンピグのデパートに出かけた。寝具売り場で、大喜び。早速、布団の間にもぐりこんで、プープーしている。布団じゃ飽き足らず、座布団にまで、プーツとしている。

店員のハム（ハムスター）が、それを見付けた！

「こらあゝ！ 売り物になんてことをするんだ！」

おならピグは叱られた。警察につまみ出されたよ。警察でこつてりと絞られて、そして……

「あのねえ。おならピグなんて迷惑なもんじゃなく、名前を変更して、別のピグになったらどうです？」

なんと、ピグ族は困ったことがある場合は名前を変えることができるんだ！

「えゝ。でも何になつたらいいんでしょう？」

「それを見付けるための学校があります。適性を探す訓練校ですよ。そこへ入りなさい」

二人はそこに入学することにした。学校に入った、おならピグ。まずは天才クラスに行ってみた。早速、テストだ。テストで二人ははじかれた。

「やっぱり、いきなり天才に転職？ は無理だね。」

「もつと、訓練して出来るようなものはないかなあ」

学校の人は、言った。

「何か、おなら以外に興味のあることは、ないの？」

「お料理なんかしてみたいかも」

二人はお料理ピグになろうと思った。早速、お料理を習い始めた。なかなか、上達が早くていい感じだった。まずは、フランス料理をマスターしてしまった。学校の人は言った。

「頑張れば、お店が出せますよ。学校としても協力します」

「わあ！ お店？ 出したいゝ！」

でも、元がおならピグ。おならの出るのが止まらない。

「お料理しても、おならが出るんじゃ、お客さんが来てくれないよ」

「大丈夫。あなたがたは、おなら病なんですよ。インディアンピグの病院に行きなさい」

二人は、病院に行った。お尻におならを出なくする薬を入れた。

「気持ち悪いよう」

「我慢してください」

そのあと、長い時間お風呂につかった。しばらくしたら、むやみにおならが出なくなったんだ。おならが出なくなると、二人は、ピグ名前事務所に出かけた。そこでお料理ピグに名前を変えたんだ。名前を変えると、しばらくは、名前を変えた人々としてピグテレビジョンで放送される。それで、ピグたちは知り合いの名前が変わったことを知ることが出来るんだ！

勿論、自分たちでありさつ状を書くことも忘れない！そして二人は改名（転職？）に成功したよ。

## 6・金持ちピグ

汚ギヤルピグ

ピグたちの中にも不潔な子がいる。その名も汚ギヤルピグだ。彼女たちは、お風呂が大嫌い。いつも、同じ下着で、泥んこになって遊んでいる。だから、他の子たちに嫌がられて、汚ギヤルピグは汚ギヤルピグ同士で遊ぶしかないんだ。汚ギヤルピグが現れただけで、あたりの空気が臭くなる。不潔なのはいいことじゃないし、社会の迷惑。と言うことで、汚ギヤルピグが出没すると、誰かが、レスキュー隊に出動を要請するようになった！ 今日、汚ギヤルピグは、ピグたちと一緒に遊ぼうよとやってきた。

でも、みんな、

「汚い！」

「くさい」

「来ないで！しっしっ！」

汚ギヤルピグ。

「ひどい。仲良くしたいのに」

「君、いつお風呂に入ったの？」

「ええと、3週間前かなあ？」

みんなは、きゃーっと言って、逃げて行ったよ。逃げしなに一人が、レスキュー隊に連絡を入れた。早速、レスキュー隊が、ピーポーピーポー言いながら出動してきた！ 車の後ろにはクレーン車が搭載されている！ 汚ギヤルピグは直接接触すると汚いので、クレーンでつかむんだ。そして、お風呂にサバン！と落とす。クレーンで上手に洋服を剥いで、着ていた洋服は焼却処分さ。レスキュー隊のこのクレーン操作の技術は、超一流だ。あらあら汚れを落とすと、普通のお風呂でしっし。これも、専用のロボットがするんだ。

綺麗になると、専属の美容師がやってきて、痛んだ髪をカット。

着付け師や、メイク師がやってきて、すっかり汚ギヤルピグを別人に仕立て上げた。

汚ギヤルピグは、

「折角、体をコートしていた垢が全部なくなって寒いよう！」とわめきたてた。

しかし、それから、新しい友達が増えて、汚ギヤルの友達は去った。もとの生活にまた戻ろうとするか、これをきっかけに変わるうとするかは、本人次第。レスキュー隊は、今日も通報を受けて、活動しつづけているよ。

### 金持ちピグ

金持ちピグは、職業不明？ だが、とつてもお金持ち。いっつもパーティーを開いている。わる子や、ばかピグ、果ては汚ギヤルピグまでが、呼ばれている。そんな金持ちピグが旅行にやってきた。向かい合わせにホテルが2軒 片方は、インチキホテルチエーン。もうひとつはわる子ホテル。さて、わるいのと、インチキなのとどっちがいいのか、旅先のことなので、金持ちピグ、とんと分からなかった。そこへインチキおやじがやってきた。

「どうぞ、お泊まりください。うちのホテルは高級なんですよ」

迷っていたので、誘われるままそこに泊まることにしたよ。でも、一泊目が2万円。2泊目からは1万円なんだつて。まー。人間の世界じゃそんな値段はあるだろうね。金持ちピグだったから、ふぐんと支払ったよ。しかし、なんの設備もないんだ。金持ちピグは聞いてみた。

「そりゃー。高級ですからシンプルにしてるんですよね。ゆっくりしていただけますよ！」

「他にお客さんがいないようだが？」

「一日一組しか、予約とらないんですよ。うち。ゆっくりしていた

「だきたいですからね。」

「がら空きの客室がたくさんあるのに？ 金持ちピグはなんか変だな〜と思いつつ、ところで周りになにか観光できるところがないか聞いてみたよ。」

「お化け屋敷があります！ この券を100円で買ってください」

金持ちピグは、お化け屋敷の入場券を買った。100円なら安いなと思ったよ。金持ちピグが散歩していると、向こうからハムがやってきた。わる子ホテルの従業員だった。

「お客さん、となりに騙されましたね。」

「でも、高級だつていったぞ。なんにもないホテルだけど、家具は確かに立派だった」

金持ちピグは言った。

「そんなのこつちにもありますよ」

ハムは言った。金持ちピグは、インチキホテルに一晩泊まって、次はわる子ホテルに泊まることにした。わる子ホテルは、満室だった。おとなりの紫わる子ホテルに泊まった。インチキホテルと同じ、お化け屋敷の入場券がここでは1円だった。金持ちピグは、騙されたく〜と思ったよ。でも、もともとが金持ちなので、まあ、いいかとか気を取り直したよ。ハムが、案内してくれて、おまけのわる子まんじゅう？ もプレゼントしてくれた。そう言えば、インチキホテルには、ほんつとになにもなかった。

金持ちピグはすっかり、ここが気に入ってしまった。金持ちピグは、しばらく泊まったあと、社長のわる子のところを訪ねたよ。そうして、言ったんだ。このホテルを売ってくれって。

わる子ホテル。どうなるんだろう。

さすが、金持ちピグ！！ わる子は、う〜〜んと悩んだ後、お泊りいただいた、紫わる子ホテルならいいですよと言った。紫わる子ホテルは10万円らしい。でも、ほかにあれこれ、設備がついて、それでもプラス1万円。

「そんなんで、いいの？」と金持ちピグ。

そうして、金持ちピグとわる子の話はまとまった。金持ちピグは、即金でお金を払ったよ。さあ。これからは、金持ちピグが、このホテルの社長だ。金持ちピグは、自宅を引き上げて、このホテルの最上階に住むことにしたよ。金持ちピグがくつろいでいると、ホテルの前に車が停まった。ワラワラとハムスターたちが出てきた。

「私たち、お手伝いです」

ハムが言った。

ホテルを買っていただくと、従業員がついてきます。わる子と、手紙が付いていた。

金持ちピグに経営が変わっても、紫わる子ホテルは大盛況。旅行者だけじゃなく、ご近所さんも泊まりにやってきた。インチキおやじがそれを見て、ウチのホテルも買ってくれと金持ちピグに言いに来た。金持ちピグ。値段を聞いてみた。

「1000万円です」

おやじは言った。

金持ちピグは、用意できないお金じゃなかったが、あっさり却下したよ。

一方、わる子は、金持ちピグにホテルを売ったお金で、まずはホテルの近くにやしの木を植えた。他にもいろいろ構想中らしいよ。くいしんぼうピグといじめピグがやってきた。くいしんぼうピグは、椰子の実ジュースが飲みたくて仕方がない。そんな、二人？の前をハムスターが通りかかった。ハムは、椰子の木をゆっさゆっさとゆすっている。

「どろぼう！」と、いじめピグは言った。

「これは、わる子ホテルの椰子の木だぜ！」

「違うよ」

ハムは言った。

「僕は配達ハム」

「配達ハムだつてえ〜?」

いじめピグは言った。

「僕はねえ。わる子さんのところで働いているんですよ」

「へえ?」

「椰子の実をわる子ホテルに運ぶのが仕事なんです!」

「え〜。それだけ? つまんない仕事だなあ」

「失礼な!」

ハムは、ぷんぷん怒った。

「こつ見えても、僕はいろんな物を配達しているんですよ!」

「へー」

いじめピグは、馬鹿にしたように言った。

「ブランドの服だつて、配達してるんですよ! だつて、わる子ホテルに売っているから。たとえば、一流ブランドのウインドさんの服とかですな〜」

「じゃあ、君は、わる子ホテルにあるものみんな配達しているんだね?」

くいしんぼうピグは言った。

「そうですよ!」

「じゃ、椰子の実ジュースは、わる子ホテルに行けば、飲める?」

「勿論ですよ!」

「わあい! 行きたい、行きたい!」

くいしんぼうピグは大喜び。

「5階のカフェで飲めますよ!」

「早速、行こう!」

くいしんぼうピグといじめピグは、わる子ホテルに行くことにした。そして、行きがかり上? 配達ピグの車の荷物の空いたところに乗って出かけたよ。いじめピグとくいしんぼうピグは、わる子ホテルで椰子の実ジュースを飲むことが出来た。グラスにフルーツが突き刺してあつて、見た目もきれいで、それはもうおいしかったんだつて。しかも、配達を手伝ったからってハムのおごりだったらし



61

## 7・おやじその後

おやじその後

かなり前に登場したインチキ堂のおやじ。相変わらず、商売をやっている。

例によって、コロッケ一個1800円！とか。でも、全然売れないんだ。（当たり前だ）

そんな高い商売をしていないで、どこかに働きに行ったほうがいいよと誰かが言った。おやじは、その言葉を思い出して、働きに行こう！と思った。隣のインディアンピグのスーパーに行ってみた。募集の張り紙が出ていたよ。

「あの〜。働きたいんですけど」

おやじは言ってみた。

「おや？ あなたは、インチキ堂のおやじさん。いいんですか？

お店は

「いいんです〜。もう店はやめようと思います〜」

インピグスーパーは、おやじをすぐ採用したよ。おやじは、早速、スーパーで働くことになった。おやじの仕事は、お店の掃除をしたり、カート of 整理をしたりすること。商品を仕入れて並べたりとすることはたくさんあった。いままでの商売よりもずっと忙しいので、張り合いがあったよ。そのうち商売をしている時より、ずっと貯金が溜まったよ。

「おやじさん。まじめですね〜」

「はい」

おやじは嬉しくなった。

そのうち、一緒に働いているハムのお世話で、やはり一緒のスーパーで働いている娘さんと結婚することになった。そして、子供にも恵まれたよ。

(幸せだなあ。あの店をやっていたら、ずっとあのままだったに違いない)

おやじは、しみじみ思った。そんな中、おやじが抜けた代わりにひそかに新たなインチキ堂チェーン店が、オープンしていたよ……。

旅ハムさんといじめピグ

いじめピグはいじめっこ。いつも、クラスの子をいじめているんだ。だから、みんないじめピグをいやがっている。でも、誰かが遊んでいると、いじめピグは自分から近づいて行って、ちょっかいを出すんだ。

あるとき、公園に旅ハムがやってきた。

「あつ。旅ハムさんだ」

旅ハムは、公園でお店を開き始めたよ。いじめピグは、近づいていった。

「いらっしやい」

「旅ハムっていつも旅してるのか？」

いじめピグは聞いた。

「そうだよ」

「お家に帰らないのか？」

「お家はないんだよ」

「お家がない？ 旅ハムって貧乏なんだ。やーい」

いじめピグは、言った。

「あのね。君。僕たちは旅ハムなの。旅をして歩く習性があるの」  
「だって、お家も建てられない貧乏なんだ！」

「君ね。そんなことばかり言っていると、友達に嫌われるよ」

その一言は、いじめピグの心にぐさつときたんだ。

「ふーんだ！ いいもんね！」

いじめピグは、走り去っていった。そう言えば、いじめピグが公

園にいても、みんな目をそらすだけで、誰も遊ぼうって言ってくれないよ。いじめピグが近づいていくと、子供たちはそそくさと別のところに移動して行くし。たまに、いじめピグから話しかけても、楽しいお話なんかしたことはなかったなあ。たいてい、相手は怒り出すか、泣き出すかのどっちかだったよ。

（そう。旅ハムに言われたとおり、友達に嫌われているんだ。僕）  
いじめピグはふさぎこんでしまった。

夜。いじめピグは、公園に行ってみた。旅ハムたちがテントを張っていた。

「やあ」

昼間の旅ハムはいじめピグを見かけて、声を掛けてくれた。

「昼間の旅ハムさんだ！」

「どうしたんだい。こんなに夜遅く！」

テントから、もう2匹のハムが出てきた。ちよつと大きなハムと、ちよつと小さなハム。

「僕たちは三兄弟なんだ」

「僕がお兄ちゃんハム」

「僕は弟ハム」

ハムたちは自己紹介したよ。

「三匹で旅をしているのか。やっぱり、貧乏なのか」  
いじめピグは言った。

「違うよ！ 旅ハムは、旅するのが習性なの。一つところにいられないの！」

「へえ〜！？ そうなの」

「そうだよ！ 品物も沢山売れているしね！ 貧乏なんかじゃないの」

「じゃあ、お金持ちなんだね！」

「でも、旅をして歩くから余計なお金は要らないの！」

「ふ〜ん。」

いじめピグは、目を丸くした。

「君は、いい目をしているね。親切ピグの目だよ」  
旅ハムは、言った。

「うそだい！ 僕はいじめピグって言われているんだよ！」  
「だって、ホラ、君たちの世界では……」  
「逆に名前をつけるってことだろ。でも、僕のことをみんないやがってる」

「そんなことはないよ。優しい目をしているんだからさ。きっかけが欲しかったら、ホラ、あの名前タワーに行けばいいじゃん。明日、さ」

「そうかな。親切ピグになれるかな？」

「なれるとも。だって僕たちは旅ハムだから、いろんなピグに会っているからねえ」

翌日、いじめピグはハムたちと一緒に名前タワーに上ったよ。そして、親切ピグの名前を分けてもらった。帰り道。ハムが言った。

「ねえ、あのおばあちゃん。荷物が重そうだよね？」

いじめピグの体は走り出していたよ。

「僕。持ってあげるよ。どこまで？」

いじめピグは、おばあちゃんの家まで荷物を持って走ったよ。そして、戻ってくると今度はおばあちゃんをおんぶして、おばあちゃんの家まで連れて行ったよ。おばあちゃんは感動して、何度も頭を下げていたよ。

「いじめピグ君。すごいすごい！ やっぱり君は親切なのさ」

旅ハムたちは、大喜び。そして、一年後にまた来るよと言って、去っていった。

いじめピグのママ。

「なんだかあなたは変わったわね」と言った。

「だって、ママはいじめないようにいじめピグって名前をつけたんでしょう？」

「そりゃーそうだけどね」

それからというもの、すっかり変わったいじめピグは学校でも人

気者になったよ。

## 8・だめちゃん

ウンドさん

ある日、ファッションデザイナーのウンドさんのところへ、ピグ自動車の社長がやってきた。

「実は、ウンドさんに車をデザインして欲しいんですよ」

「いいわよ。どんな車なの？」

「子供をターゲットにしたソーラーカーなんですけどね」

社長は、どんな車か、熱心に説明してくれたよ。

「ポップな感じをお願いします」

「ええ。わかったわ」

ウンドさんは、社長の考えを気に入って、早速、車のデザインをはじめたよ。

一週間後、車のデザインが出来上がった。ピンクに塗装した車。

下の方には、少し、お花がちりばめてあった。中のシートは、水玉模様だった。

「いいですね」

「他に、赤と、青と、白と、水色があるのよ」

「黄色いのは、ないんですか？」

「黄色はダメよ」

ウンドさんは言った。

「黄色は、蜂が友達と間違えて寄ってくる色なのよ。子供のソーラーカーにはダメね」

「なるほど」

社長は、言った。

ウンドさんは、車のデザインで、多額の報酬を手に入れたよ。

## ペット

ある日、わる子たちのクラスでペットの話題が出た。みんな何を飼っているか、話し始めたよ。

おしゃれピグは、「私はトカゲよ」と言った。周りの子は、げっつ！ てびつくりしている。

「あら??? トカゲって目が可愛いのよ」

おしゃれピグは、言い返した。わる子のペットは、巻き毛のカナリヤ。

「いいわね〜」

うらやましそうなあたしのピグ。

「あたしも、ママに買ってもらおう!」

そこへやってきた汚ギヤルピグ。

「あたしは、ハエを飼っているわよ」

「やめて〜っ!」

クラスの子が言った。

「そうだよ。汚いなあ」

でも、汚ギヤルピグ。

「そうそう。このとっておきのペット! ほらっ。ミミズよ」

「あつ。君。それいいねえ!」

声をかけたのは、釣りピグだった。早速、汚ギヤルピグから、ミズの入ったケースを取って去っていった。

「あつ! あたしのペット〜」

汚ギヤルピグは慌てて追いかけたが、遅かったよ。

## 眠れない日

今日は、ピグたちの町は、年に一度の眠れない日。大人も子供も、み〜んな起きたまま次の日の朝を迎えるんだ。うっかり、ばかピグ



は、ベッドにもぐろうとした。

「お兄ちゃん。今日は、眠れない日よ」

ばかこが言った。

「そっか」

カレンダーにもしつかりと“眠れない日”と印刷してあった。この祭日を忘れるなんて！ 眠れない日だから、お店も一晩中やっている。ばかピグはデパートに出かけたよ。デパートは、こうこうと明かりがついて、セールをやっている。今日ばかりは、子供が夜更かししても怒られないんだ。みんな起きてるだけでは退屈だから、デパートなどは大盛況だ。眠れない日当日は、学校や会社はやっているけれど、眠れない日の翌日は、公休になる。

みんな寝不足になってしまつから、代わりに半日〜一日眠り続けるんだね。

ソーラーカー

あたしのピグの姉のあたいのピグ。わる子の家にやってきた。わる子は、いなくて車庫にソーラーカーが停まっていた。わる子たちは、ソーラーカーに乗っている。ソーラーカーは一人乗り。宙に30センチほど浮かんで移動する。人間の世界で言えば、小学生が自転車に乗っているようなもの。

あたいのピグは、「やったあ〜これ、あたいの！」とばかりに、ソーラーカーに乗り込んだ。

ソーラーカーの運転席の中央に液晶のデジタル表示の部分があって、「ワルコサンデスカ？」と出てきた。

あたいのピグは、わる子じゃないと乗れないのかしら？と違って、ハイのボタンを押した。

「ホントニ ワルコサンデスカ？」

ソーラーカーはもう一回聞いてきた。

（私がる子じゃないのが、わかるのかしら〜？）と思いながら、

ハイのボタンを押したよ。

「ソウデスカ。ホナ！」

ソーラーカーは、何故か関西弁になつて、ゆっくりと滑り出した。あたいのピグは大喜び！ 町内を一回りしてから満足して車庫に戻り、おうちに帰っていったよ。

## 温泉カー

最近、温泉カーが大はやり！ ばかピグは、ばか先輩にすすめられて、乗ってみることにしたよ。温泉カーは、温泉の付いてる車なんだ。勿論、天然温泉のわけはない……。で、登別の湯だとか、下呂の湯だとか、温泉ごとに一台一台、用意されている。ばかピグたちは、早速、一台を選んで、乗ってみた。後部座席は、浴槽だ！

「この温泉カーは、貸切ですよ。3時間かけて運行するので、ゆっくり温泉に入ってくつろいでください」

ガイドのハムスターが言った。

早速、ピグたちは、お湯につかった。

「窓から、外の景色が見えますが、外からは中の様子が見えないので、安心してくださいね」

ガイドさんが続けて言った。

温泉カーは、装備もばっちり！のぼせそうになったら、クーラーを効かせることが出来る。勿論、快適な温度を自分で選べるんだ。それから、喉が渴いたら、ガイドさんに言うと、お盆に乗ったジュースが流れてくる。メニユー表を見たら、なんと！飲み物ばかりでなく、プリンアラモードや、デザートまであった。お風呂から上がると、自転車こぎやら、スポーツ器具が備えてあって、簡単なゲーム機もあったよ。それで、飽きるとまたお風呂に入りなおすことも

出来る。

3時間近くなると、ハムスターがやってきて、  
「そろそろ終点です。お湯からあがってね」と言いに来てくれる。

お土産は、特製タオルにスタンプラリーのカード。車を降りて、見渡すとあちこちにいろんな温泉カーが走ってる！全部、制覇して、全国のスタンプラリーのカードを埋め尽くしたい！と、まんまと？温泉カーのとりこになってしまったばかりピグとばか先輩だったよ。

だめ！

だめちゃんの友達にだめハムスターっていうのがある。やたら、だめだめ言いたがるんだ。というか、だめってことばに反応してやってくるんだよ。今日、わる子が持ってたおやつを落として、

「あら〜っ、だめだ〜っ。食べられなくなっちゃった！」って言葉をもたらしたもののさ。

そしたら、だめハムがやってきた。

「あらら〜。おやつ落としたの？だめだねえ〜」

「食べられないねえ。だめだね〜っ」仲間のハムもやってきた。

5人くらいのハムがやってきて、だめだめ言うんだ。

「もう〜。だめだめ言うなよ〜」

わる子は怒った。でも、だめハム隊だから仕方ないんだよねえ…  
…だめが口癖なんだ。なんでも、だめハム隊の住む町には、だめシヨッピングセンターがあるらしい。オープンの時なんていうって思っ？

「さあ！お店のオープンですよ！お客様は何か買わないとだめ

です」

閉まるときは？

「さあ。これでお店が閉まります。これからのお買い物はだめですよ」

とんでもないね」。

ちなみにここには、だめポイントカードがあるんだ。カードの裏には使い方が書いてある。

「だめポイントがいっぱいになると50円分のお買い物が出来ます。ただし、現金との交換はだめです」  
うん。こりゃ、普通だね。

## ティータイム

わる子ちゃんの親友は、だめ子。あるとき、ばかピグは、わる子の家に遊びに行った。そうしたら、わる子とだめ子がお茶していた。ばかピグもお茶をいただいた。ばかピグは、はじめて飲むお茶に

「このお茶、なあに？」と聞いてみた。

「だめティーだよ」

だめ子は言った。

「だめティー？ 聞いたことないよ」

「だめティーはねえ、ハーブティーなんだよ。だめ草から取れるんだ」

だめ子は言った。

「ふん。だめ草ってどんなの？」

ばかピグは聞いてみたよ。

「実は、私の家で栽培してるんだ」  
わる子は言った。

「ほらっ」

わる子の指差す方を見ると、沢山の葉っぱが密集して生えていたよ。

「へえ〜。あれかあ」

だめ草は、風に吹かれて、葉っぱをこすり合わせ、それが、だめだめだめ……って言ってるように聞こえるので、だめ草って名前がついたんだって。

ブランド

ある日、自慢ピグは、ファッションデザイナーのウンドさんと道で会ったよ。

「ああ。暇ねえ。あなた何かいい暇つぶし知らない？」

ウンドさんは、自慢ピグに話しかけてきた。

「じゃあ、僕この本を貸してあげるよ」

自慢ピグは、お笑いマンガを貸してあげた。ウンドさんは、お礼に自慢ピグに服をくれた。

(やったあ！ ウンドさんのブランドの服だよ！)

自慢ピグは大喜び。

ウンドさんが走り去る自慢ピグに「それは、私がデザインした服じゃないのよ」と、言っているのも聞こえていなかったよ。

翌日、早速自慢ピグは、学校にその服を着て行った。そして、友達に自慢をしたよ。

「どうだい？ ウンドさんのブランドの服だぜ」

「へえ〜。すごいねえ。」

みんなは、知らずにその服をうらやましがったよ。

「ちよいと失礼！」

ばかピグが、自慢ピグの首根っこのタグをひっくり返した。

「あっ！ これ、違うよ。ウンドさんの服じゃないよ。タグに「ブランド」って書いてあるー！」

「なんだってえ〜？」

自慢ピグはびっくり。

「あら、ほんとブランドだわ」

「バンドって、フツの服の会社の名前よねー」

みんなは、言ったよ。

「うそだあ！ だって、直接、ウンドさんにもらったんだぜい」

「君、どうしてウンドさんにその服もらえたの？」

「大爆笑マンガを貸してあげたのさ」

自慢ピグは言った。

「なんだ、そんなことくらいで、ウンドさんブランドの服がもらえるはず、ないじゃん」

ばかピグが言つと、みんなは、なあんだって感じで去って行ったよ。

「それなら！」

自慢ピグは、全速力で、ウンドさんの所に走って行ったよ。

「あら。なあに？」

「ウンドさん。この間、もらったこの服にウンドさんのサインをしてよ」

「あら。いやよ。私は、自分がデザインもしていない服にサインなんかしたくないわ」

ウンドさんは、冷たく言った。自慢ピグは、トホホな気分だったよ。

おやつ

ばかピグは、バナナチップスが大好き！ 今日、こっそり学校にバナナチップスを持ってきた。休憩時間に食べよう！ と思っていた。でも、それを見つけただめ子。

「だめじゃん！ 学校にお菓子を持つてくるのは禁止だよ」

大きな声で、指摘した。先生が聞きつけてやってきた。

「ばかピグさん。学校にお菓子を持ってきてはいけません。これは、取り上げますよ」

ばかピグは、バナナチップスを取り上げられてしまったよ。

「え〜ん。いつも持ってきているわけじゃないのに。今日、はじめて持ってきたのに！」

だめ子は、「そんなの関係ないよ」  
先生。

「そんなことをしたら、みんな学校にお菓子を持ってきたくなるでしょう！」

先生は、給食の時間になんと、ばかピグのバナナチップスを全員に配ってしまった。それが、お菓子を持ってきた子への罰なんだ。みんなは、思いがけないおやつに大喜びしたよ。

微妙

ピグたちのクラスに微妙ピグって言う子がいる。とにかく、微妙なんだ。

「明日は、テストをしますよ」

先生が言った。

みんなは、え〜っ！ と叫んだ。

だめ子は、

「そろそろ、実力テストくらいないと、だめじゃん！」

なんて、言ってくらい、復習に励んでいたから、平気な顔をしていた。微妙ピグは、困ったような、うれしいような微妙な顔をしていた。

「微妙ピグ君。キミはテストに自信があるの？ それとも困ってるの？ どっちなの？」

ばかピグが聞いた。

「うん。まあ、勉強はしてるからいいんだけど……でもなあ、勉強したところが出るか心配だし……微妙なんだよねえ」

「さすが、微妙ピグ君」

その他にも、給食の時間。微妙ピグ。なんとも言えない顔で、給食を食べていた。

となりの席の子に、



「そのおかず、好きなのか？ 嫌いなのか？ どっちなの？」  
って聞かれた。

口元はほころんでいるのに、眉が八の字なんだよねえ。

「まあ、栄養になると思えば、食べられるし。かと言って、好きってわけじゃないし。うん。微妙なところだね」

そんなピグたちのクラスに、転校してきた子がいたよ。

「今日から、このクラスの仲間になる、謎ピグさんです。みなさん、仲良くしましょう」

「はい！」

謎ピグは、微妙ピグの隣になった。謎ピグは、謎の多い子だった。質問しても、微笑を浮かべて、はぐらかすんだよ。本当に微妙に、微妙ピグとキャラがかぶっていた。微妙ピグと、謎ピグの二人の目が合うと、火花が散っているのが、他のピグたちにもはっきりと見てとれたよ。

## 10・格付け

### ばかピグとばか先輩

ばかピグは、ばか先輩のことをとても尊敬している。ばかピグが  
わる子達と遊んでいると、向こうからばか先輩がやってきた。

「あつ。先輩おはようございます!」

「おはよう!」

「ばか先輩。今日もいろいろ教えてください!」

「よし。わかったぞ。じゃあ、問題だ! 1+1は何だ?」

「先輩。それは、普通に答えてもいいのですか?」

「いいよ」

「2です!」

「正解だ! よく出来た!」

わる子は、内心、ばかな……と思っていた。

「しかし、答えは2だけではない。場合によっては、11になるか  
もしれないし、10になるかもしれない!」

「さすが、ばか先輩!」

「テストの時は、先生にこれはひっかけ問題ですか? と聞いてか  
ら答えなさい」

「うーん。なるほど!」

「今度は、料理を教えよう」

「はっ。はいっ!」

「味噌汁かけ御飯は食べるかね?」

「はい。よく食べます」

「今度は、ご飯に味噌汁でなく、コーンクリームスープをかけるん  
だ。それから牛乳を一滴たらすのだ。その上にさらに肉を乗せなさ  
い」

「はい。わかりました! グラタンみたい」

「それから、もうひとつ料理を教えよう。まず、トマトの種をとるんだ！」

「はい！」

「それから、にんじんを細かく切って、炒めるのだ。油はオリーブ油を使いなさい。そして、それをそのトマトの中に詰めるのだ」

「味付けはどうするのですか？」

「いらん！」

「更にかぼちゃをくりぬいて、そこにさっきのトマトを詰めるのだ」

「はっ。かぼちゃ……。それは、ハロウインを考えた料理なのですか？」

「そうだー！ 君は頭がいい！」

「トマトの甘味とにんじんの甘味とかぼちゃの甘味で甘そうですね」

「そうだー！」

「おまけにトマトもにんじんも赤いし……。あゝにんじんは、オレンジでかぼちゃはオレンジですけどね」

「そうだー。よくわかった！ 君は頭がいい！」

「ばか先輩はのりのりになって燃えていた。わる子が言った。」

「ねえ！ ちよつと焼き豚くさいよ？」

「あつ。いかんいかん」

「ばか先輩は、ちよつと熱血を自粛したよ。」

## ゲーム

わる子は、あたしのピグと遊ぶ約束をしたよ。放課後、わる子たちが広場に集まった。メンバーは、わる子にあたしのピグ、ばかピグ、だめちゃん（だめ子）だ。

「何してあそぼうか？」

「ゲームがいい！」

と誰かが言った。

わる子たちはゲームをすることにした。

あたしのピグが、

「ゲームするなら、あたしの！ あたしの！ あたしの家にいらっ  
しやいよ！」

と言った。

みんな、カセットを持ってあたしのピグの家に来てきた。

ゲームは新発売の「冒険レース」というもの。競争相手を倒しな  
がら、車に乗って、ゴールを目指すんだ。まずは、プレイするのに  
自分がどのキャラクターになるか選ばなくちゃ。

わる子は、「レッドわる子」ばかピグは「水色わる子」だめ子は  
「だめちゃん」あたしのピグは「あたしのピグ」それぞれ、キャラ  
クターを決めたよ。

プレイ開始！ いきなり、レッドわる子があたしのピグめがけて、  
手裏剣を投げてきた。あたしのピグは、ボタンを動かしてよけなが  
ら、きゃーきゃー言っている。レッドわる子リード！ ところが、  
後ろから来ただめちゃんは、強かった。だめ子ポエム（だめ子の叫  
び）と言う技を使ってきたよ。

「だめ~~~~っ！！だめえ~~~~っ！！」と叫びながら、後  
ろからすごい勢いで爆進してくる。

だめーの声の直撃を受けたものは、車が路肩にはまったり、追突  
したり、大変だ！ そのうちばかピグが直角拳の技を使った。十字  
型に攻撃するのだ。車体が真つ二つになったり、さあ、大変！ ち  
なみに、攻撃を受けてダメージをこうむると、レスキュー隊を呼ぶ  
ことで、再生できる。そのうちに敵ははるか先に行ってしまうけど。  
あたしのピグは、あたしの攻撃だ。

「あたしの！」

「あたしの！」

と叫んで、相手の攻撃を自分のものにしてしまう。相手の技をコ  
ピーして返しちゃうんだ。これは、なかなか強い！

結果、1位 わる子。 2位 だめ子 3位あたしのピグ 4位 ばかピグだったよ。

#### 格付け

青いしましまの服を着た、一人のピグがあるときインディアンピグのレストランにやってきた。とっても上品な感じの紳士だった。ピグは、シチューを注文したよ。早速、シチューが運ばれてきた。「お客さん。お待たせしました。さあ、どうぞ」

ピグは、シチューを一匙食べた。

「うん。おいしいね！」

近くにいたハム。

「ありがとうございます」

「シェフを呼んでくれたまえ」

ピグが言った。

「かしこまりました」

しばらくして、コックのハムが来たよ。

「このシチューはとってもおいしいよ。ここは、サービスもいいし、きれいだし、いいレストランだね」

「それは、それは、ありがとうございます」

「実は、私はこういうものです」

ピグは名刺を出した。

「あっ！ あなたは。」

なんと、そのピグは、星付けピグだったんだ！

「あなたのところは、5つ星に認定しマース」

星付けピグは、早速金の星を取り出すと、ぺたぺたぐつと看板に張っていったよ！ シェフは大喜び。それから、ますます、インデ

イアン・ピグのレストランが繁盛したことは、言ってもない。

## 11・肩こり

### お休みの日

わる子たちの仲間にはかピグっていうのがいる。どうも、わる子たちの世界では、そうなって欲しいのと反対の名前をつけることが多い。わる子もわるくならないようにってつけられた名前なんだから。

ばかピグの妹には、ばかこがいる。この子は、小学校2年生なんだけども、ちや賢い。分数の計算まで出来たりと、5年生レベルの学力はあるんだ。

ばかピグの友達には、ばか先輩がいて、いつも二人で集って遊んでいる。

そして、ばかピグはバナナチップスが大好き。いつも、小遣いを持って買いに行くんだ。そんなばかピグとばかこは先輩、わる子、わる夫がプールに出かけたよ。

みんなプールが大好き！ 広いプールには爆流スライダーと言う、急でしかも曲がりくねっている滑り台があった。今日みんなの目的はこの爆流スライダー。この大きなプールに来なければ、爆流スライダーはないんだからね。プールの監視をしているハムが言った。「あまり、何回も立て続けに滑らないでね。ふらふらするから」

ばかピグは、見事言われたことを無視して、立て続けに3回爆流スライダーですべったんだ。もう、ふらふらさ！

「ばかじゃないの。お兄ちゃん！」

ばかこが言った。それでも、まだ滑るんだ」と言ってみんなに取り押さえられたよ。

わる子とわる夫は、上級コースに行った。上級コースには、マッチョな男たちばかり。

「子供じゃないか」とみんな無理だよ」とって言う。

でも、二人は、鍛えているし、体も身軽だから、すすいと滝登りをこなして、あっという間にいなくなった。ほかのお客さんはびつくり。帰りにはかピグはバナナチップスを買って、ご満悦。そんなこんなで、お休みの日は終わっていったよ。

## フルーツ

わる子ちゃんたちのクラスには、フルーツピグって言う子がいる。家でフルーツをいっぱい育てているんだ。そして、朝食にもフルーツを食べてくるから、フルーツピグからはいつも甘い香りが漂っているよ。食いしん坊ピグは、フルーツピグと同じクラスになって大喜び。いつも、後ろからフルーツピグにタックルするんだ。そして、くんくんくん……と匂いを嗅いで、よだれをたらしてる。フルーツピグ。

「やめてよあ〜」って言うてるけど、仕方ないね……。

## 肩こり

ばかピグが学校の廊下を歩いていると、肩こりピグがやってきた。肩こりピグは、ばかピグの肩を叩いたよ。ばかピグは、なんだろう？と思ったよ。

肩こりピグは、去って行った。でもね〜。なんだか、肩が重いんだ。肩こりピグの肩こりがうつったのかな？ ばかピグは、クラスに戻って、だめちゃんの肩をぽん！と叩いてみた。途端にだめちゃんは、肩が重くなったよ。ばかピグの肩の重いのは、すうっと消えたけど、だめちゃんの肩こりは治まらないんだ。

「あなた、なんてことするのよ！ だめじゃん！」



だめ子は、ばかピグをにらみつけたよ。

だめちゃんは、わる子に

「ねえ。ばかピグに肩を叩かれてから、すごい肩が重いんだよ。どうしてかなあ？」

「それは、カタコリ星人の仕業さ」

近くで、聞いていた天才ピグが言ったよ。

「カタコリ星人??？」

「そうだよ。肩こりピグなんて子、うちの生徒にいやしないよ。あれは、カタコリ星人が化けたのさ」

ばかピグは、

「どうして、僕の肩こりは治ったの？」

って、天才ピグに聞いてみたよ。

「カタコリ星人に肩を叩かれたら、10分以内に他の人の肩を叩かないと、しばらく肩こりが治まらないんだよ」

天才ピグは、教えてくれた。

「君は、本当になんでもよく知っているんだね」

ばかピグは、感動していたよ。

だめ子は、

「ばかピグ……だめじゃん！」

って、言ったよ。

「ねえ。どうしたら、この肩こりがとれるの？」

と、だめ子。

「インディアンピグの病院に行ってみることだよ！」

だめ子は、わる子とばかピグと天才ピグと一緒に病院に行くことにしたよ。だめ子は病院で、お医者さんに診察してもらったよ。普通の肩こりじゃなくて、カタコリ星人に移された肩こりだから、時間が経てば、治るんだって。そして、今日は、マッサージをしましように言われたよ。

マッサージピグがやってきて、

「だめ子さん。そのベッドにうつぶせに寝てください」

と言った。

マッサージピグのマッサージは、絶妙だったよ。

「ここが、カタコリ星人の引き起こす肩こりの元凶なのです」

マッサージピグは、肩の真ん中の背骨の方をぎゅうつと押したよ。そして、20分くらいマッサージをうけたよ。

「だめ子さん。どうですか？」

「すごく、楽になったわ。飛んでいきそう」

だめ子は、手をすいすいして空中を泳いでいるみたいにしたよ。

そして、みんなは、病院を出て、帰りにわる子ちゃんの家に寄ったんだ。そしたら、なんと！ わる子ちゃんの家の草花が、カタコリ星人にやられていたんだ。

正確には、草花が、くたつとしていて、天才ピグが、

「これは、カタコリ星人の仕業だ！」

って言ったんだ！

天才ピグは、その草花の一つから汁を絞りとったよ。

「これは、肩こりの素だから、扱いに気をつけるんだよ」

天才ピグは、肩こりを治す方法を研究するため、その汁をピーカーに入れて持ち帰ったよ。そしたら、あることに気づいた。なんと、フルーツが効くらしいんだ。へえ〜と、わる子とだめちゃんとはかピグは感心したよ。

「ことわっておくけど、カタコリ星人の肩こりに効くんだよ」

天才ピグは、言った。

ところで、自慢ピグは、大のフルーツ好き。朝も、昼もおやつにフルーツを食べるんだ。だから、カタコリ星人にいくらタッチされても平気だったよ。

「自慢ピグ君が、肩こりにならないのはそういうわけだったんだね」

天才ピグは、言った。

「やった〜。自慢できるぞ」

自慢ピグは、大喜びだったよ。

ちなみにだめちゃんの肩こりは、マッサージピグにマッサージを

受けたおかげで、ほんとうは、一ヶ月くらい凝るはずなのにわずかな  
数日で治ったんだって。

## 12・つまみ食い

### つまみ食い

わる子とお洒落。ピグは、わる子ちゃんの家でお菓子作りをしていたよ。二人で、クッキーの種をつくって型抜きをしようとしたところに食いしん坊。ピグがやってきた。

「わる子ちゃん、遊びにきたよ。ばか。ピグ君も一緒だよ。」

わる子は、ちよつと困ったなと思つたけど、食いしん坊。ピグとばか。ピグをお台所に入れてあげたよ。

「これ、あげるよ。」

ばか。ピグは、バナナチップスをくれた。

「あら。ありがとう。」

食いしん坊。ピグは、クッキーの種を見て言つたよ。

「これ、なあに？」

「私たち、これからクッキーを焼くところだったのよ。」

わる子は言つた。

「クッキー！ 大好き。僕も焼きたいよ！」

食いしん坊。ピグは大喜び。

「わかつたわ。じゃあ、このクッキーの種を4等分しましょう。それぞれ、型抜きをして、鉄板の上に並べるのよ。」

わる子ちゃんたちは一生懸命型抜きをしたよ。食いしん坊。ピグの方と、ばか。ピグがちゃんと出来ているかしらと思つて、二人の方をみたよ。

そしたら……。

「ぎゃ〜っ！ 何してるのあんたーっ！」

食いしん坊。ピグは、クッキーの種を少しずつちぎって食べていたよ。

「おいしいね。これ。焼いたらもつとおいしいかも。」

「そつ、そりゃあ、そうよ！」

わる子は引きつっていたよ。

わる子ちゃんたちは、クッキーの型の型抜きを続けたよ。つまみ食いしながら、型抜きしていた食いしん坊ピグ。

「ねえ。わる子ちゃん。僕、なんだかお腹が痛くなってきたよ」

「そりゃあ、そうでしょうよ！」

わる子は言った。

「クッキーの種を食べるなんて！」

食いしん坊ピグが、お水を飲んで休んでいる間に、わる子ちゃんたちは手際よく、クッキーを鉄板に並べたよ。

いい匂いが漂ってきた！そして、クッキーは焼きあがったんだ。みんなで、4等分したクッキー。つまみ食いした食いしん坊ピグの分は少なかったよ。みんなは、お茶を淹れて、クッキーを食べ始めた。

食いしん坊ピグ。

「ねつ、ねえ。みんなのクッキーの方が量、多くない？」

「あなたが、つまみ食いしてるからでしょっ！」

わる子は、にらんだよ。

でも、みんなは、クッキーを1〜2枚ずつ食いしん坊ピグに分けてあげた。食いしん坊ピグは、大満足だった。

みんながクッキーを食べてお話しているところにわる夫が帰ってきたよ。

わる夫は、フルーツを沢山持っていた。

「アイスもあるんだ。これで、フルーツパフェを作ろうと思って」

「わあ。今日は、おやつが沢山ね！」

わる子をはじめ、お洒落ピグもばかピグも大喜びだったよ。

「いいね！ それ、すごくいいね！」

食いしん坊ピグの目はハートマークだった。食いしん坊ピグは、フルーツにそのまま手を出しそうな勢いだった。わる子は、きつ！と食いしん坊ピグのほうを振り向くと、どかっ！とわる夫が入

ってきたドアから食いしん坊ピグを追い出したよ。

「ひどいよ！わる子ちゃん、入れてよ〜」

「食いしん坊ピグちゃん。しばらく、外にいてね」

わる子は言った。わる子とわる夫はフルーツの皮を剥き始めたよ。お洒落ピグが器を探してくると、ばかピグはコーンフレークを下に敷き詰めたよ。食いしん坊ピグは、ドアをドンドン叩いていたけど、やがておさまった。

しばらくして……

わる子がドアのほうを見ていると、横にある、窓の隙間から、糸みたいなのが出てきたよ。紙をこよりにしたものだつたよ。食いしん坊ピグが、手の代わりに、窓の隙間からこより出して、フリフリしているよ。わる子は、セロテープでこよりを窓枠にぺたっと貼り付けてしまった。食いしん坊ピグ。

貼り付けられたこよりを窓の向こうから、ウンウンと引っ張っていた。

細かったから、すぽんと抜けた。そして別の位置からこよりを出してフリフリしている。わる子は、今度は無視。お洒落ピグが、アイスクリームを盛り付けて、わる子とわる夫が切ったフルーツで飾ると、フルーツパフェの完成。ばかピグが、パフェをテーブルに並べた。

「さあ。入れてあげるわよ」

わる子は、食いしん坊ピグを部屋に入れてあげた。そして、みんなで仲良くフルーツパフェをいただいたよ。

ウンドさん

多額の報酬を手に入れた、ウンドさんに社長は言ったよ。

「ところで、ウンドさんは、自分のビルを持たないんですか？」

「ええ。持たないわ。仕事をするのは、家でいいのよ」

「有名なのに、どうしてですか？」

「お店を持っても、買いに来られない人がいっぱいいるでしょう？ この近くにいる人ばかりが買えたら不公平でしょ。だから、旅ハムさんに売ってもらっているのよ。だから、住んでいるところに関係なく、運良く旅ハムさんに会えた人が買えるのよ」

「なあるほど！」

社長は、いたく感銘したよ。

「ところで、提案があるのですが」

社長は言った。

「なあに？」

「今度、ウンドさんデザインの車の発表会をします。そこで、ウンドさんのファッションショーも同時に行いたいんですよ」

「あなた、それは、いい考えだわ」

ウンドさんは、大喜び。期待に燃えてきて、少しちりちりと焼き豚臭くなってきた。慌てて自粛したよ。

ある日、だめ子と自慢ピグが、ウンドさんのところに遊びにやってきました。

ウンドさんのところには、ウンドさんの弟子のデザインピグがいたよ。

「私がいなくなったら、私のブランドをデザインしてくれる人がいなくなるでしょう？ だから、弟子をとったのよ」

デザインピグは、せっせとデザイン画を描いていたよ。デザインピグは、自分と同じくらい歳のだった。だめ子は、その様子を見て、自分もデザインを試してみたくなくなった。

「いいわよ。デザイン画を持ってきて。見てあげるわ」  
ウンドさんは言った。

だめ子は、あくる日、ウンドさんの所にデザイン画を持って行ったよ。しかし、だめ子のデザインは、どれも、だめ柄の服ばかりだったよ。

「ちよっと、何これ、あなた、だめな服ばかりじゃないの？」

「ええ。だって、私、だめ子だから」

「これじゃーウケないわよ」

「でも、欲しがる人はいると思います。だめ族の人なら絶対欲しがると思う」

「それは、私のブランドでは、扱えないわ」

だめ子ばかりだったよ。デザイン画をめぐっていたウンドさんの手が止まったよ。

「ちよつと、何、これ？ あなた。いいじゃないの？」

「えっ？」

それは、だめ子が失敗したつもりの、デザイン画だったよ。捨てようと思つて、一番後ろに折りたたんでおいたものだった。

「これ、いいわ、すごくキュートよ」

それは、4つのカキ氷がデザインされた、ワンピースだったよ。4つのカキ氷がデザインされたワンピースをウンドさんはいたく、気に入ったようだった。ウンドさんは、言つたよ。

「これを今度のショーのモチーフにしたいかしら？」

だめ子は、大喜び。自分のデザインがショーに使われるんだからね。

ショーの日がやってきた。わる子とだめ子はショーを見に行つたよ。最初は、デザインピグのデザインした、ウエディングドレスだったよ。うっすらピンクで、ふちにハートがあしらつてあるんだ。

「さすが、ウンドさん。」

わる子は、感激していた。ウンドさんのデザインは、ソーラーカーに併せて、ポップでキュートな感じの服が多かつたよ。だめちゃんの4つのカキ氷の服も紹介されて、ファッションショーは、大成功に終つたよ。ショーが終つてから、だめちゃんは、お休みの日にウンドさんのところに通うようになったよ。

「でもさー」

自慢ピグは言つた。

「友達が、ウンドさんのショーのデザインをするのは、自慢になんだけど、だめちゃんは、バレーボールの選手になるのかと思つたよ」



「私、デザインがしてみたくなつたのよね」  
それから、だめちゃんは、あんまり、だめだめって言わなくなっ  
ていったよ。

### 13・鳳凰様

鳳凰様

わる子ちゃんたちの街で鳳凰祭りが始まったよ。鳳凰様は、100年に一度現れる伝説の鳥なんだ。鳳凰様が現れたらお願い事をすると、かなうと言われている。しかも、今日はその100年に一度の日なんだ。ばかピグが、外を歩いていると、突然、周りがキラキラし始めた。あれ？ って思っていると、光の中に包まれた大きな孔雀のようなものが見えたんだ。それは、はらりと羽を一枚落としましたよ。ばかピグは、見とれていたけど、もしかして、鳳凰様？ って、思った。お願い事をしなきゃ！ って思ったけど、あせってしまった。早く、何か言わなきゃ鳳凰様が行ってしまうよ。

ばかピグは大声で叫んだ。

「バナナチップス一年分ちようだい！」

鳳凰様は消えていった。

……しよぼいな……と思いつながら。

ばかピグは、夢かしら？ と思ったけど、そこには羽が落ちていたから、今のことは本当の事だったんだって確信したよ。そして、羽を大事に持って帰ったよ。伝説では、この羽を大切に持っているのと、病気や怪我をしなくて、幸せに暮らせるらしいよ。鳳凰様は、ネットさんの前にも現れた。でも、ネットさんからはかなり遠くの方にいた。全体の形が見えるくらいだったよ。

それでも、ネットさんは、

「ネットで世界征服！」と叫んだ。

(悪い願いは叶わないよ)

ネットさんの心の中に？ 鳳凰様のテレパシーの言葉が聞こえた。えっ？ それじゃ……。

鳳凰様は、輪郭が薄れ消える直前だった。えっ？ えっ？ 何か

言わなきゃ……！ ネットさんは、あせった。

消え消えの鳳凰様に

「新しいパソコン、ちょうだい！」って叫んだ。

鳳凰様は、みんななんてしょぼいんだ……。と内心思ったよ。

わる子パパが、ホテルの部屋で仕事をしていたよ。気分転換に窓の外を眺めていた。そしたら、なんと鳳凰様が！ わる子パパはびっくりしたよ。

そして、叫んだんだ。

「このホテルをもっと拡大して、街の人が喜ぶホテルにしたいんだよ！」

その鳳凰様をわる子ちゃんが、自分のお部屋から見ていた。

「パパがわる子ホテルをもっと素敵なホテルにしてくださいように！」

同時に金持ちピグも窓の外を見ていた。

「このホテルを大きくして、仕事に困っている人を雇ってあげたいよ！」

鳳凰様は、うなずいて去っていった。

ばかピグがママに頼まれて買い物したら、商店街の福引をもらったよ。ばかピグが福引をすると、3等当選！ バナナチップス1年分だったよ。

(やった~~~~~)

ばかピグは大喜び！

一方、ネットさん。知人のラットさんがやってきて、

「新しいパソコン買ったから、今使ってるのあげるよ」と、言った。

「え〜。古いパソコンかい？」

「古くないよ。一年くらいしか経っていないけど、調子が悪いんだよね。君なら直して使えるだろ」

「壊れてるのやだよ〜」

「あっ、この使ってないパソコン、もう一台あげるよ」

「これ、キーボードが溶けてるじゃん！」

「そうだよ。ほら、この2台のパソコンの大丈夫なパーツを組み合わせて、作れるだろ、君なら新しいパソコンが」

消え消えの鳳凰様をお願いした願いは、叶い方も中途半端だったよ。

わる子パパはひらめいたよ。街の人たちがただで泊まれる日を作ろう。わる子パパは、そのことをわる子ちゃんに話したよ。

「じゃあ、パパ、街の人にただでレストランの新しいメニューを食べてもらって感想を聞いたらいいわね」

わる子パパとわる子ちゃんが話していると、次々に新しいアイデアが湧いてきたよ。

金持ちピグ。

（今のホテルは流行っているし、もっといろんな施設を作ろう）と思ったよ。

お部屋の数を増やして、ホテルの中に歯医者さんとかエステのお店をオープンしようと思ったんだ。そのためには、そこで働く人が必要だな。金持ちピグは、旅ハムちゃんに相談したよ。旅ハムは、とても顔が広い。途端にハムちゃんたちが集まったよ。隣の街で、大規模なリストラがあつたんだって。それで、仕事を探しているハムちゃんが沢山いたんだ。早速、金持ちピグは、仕事をしたいハムちゃんたちは、自分のプロフィールとやってみたいことを書いた紙を用意して欲しいと、旅ハムに言ったんだ。旅ハムは、隣のハムたちにそのことを伝えたよ。隣街だけじゃなくて、買い物にくるみんなに金持ちピグのホテルのチラシを配ったんだ。金持ちピグのところには、沢山のハムが集まった。

「ええと。ここにエステや、歯医者さんを作りたいんだよね。それから部屋の数を増やすので、受付も人を増やしたいんだ」

金持ちピグは、説明したよ。

「まず、エステで働くハムちゃんが必要なんだ。マッサージとか、ネイルが出来る子はいないかな」

ハムちゃんのうちの一人が手を挙げたよ。

「ネイルができましたしゅ。マッサージも少し。知ってるハムちゃん、マッサージが得意な子がいますしゅ。連れてきましようか？」

「結構なことだね。ぜひその友達を連れてきてちょうだい」

金持ちピグが言った。

「それから、カフェで働くハムちゃんが必要なんだ。簡単な食事を作れる人とお運びしてくれる人はいないかな？」

「はい」

ハムちゃんが何人か手を挙げた。

「食事を作るのなら得意でしゅ」

あつと言う間に働いてくれるハムちゃんたちが揃ったよ。

100年に一度しか現れない鳳凰様。で、残りの99年はどうしているのかって？ どうも、その辺にいるらしい。このことを教えてくれたのは、田舎ピグなんだ。わる子ちゃんは、半信半疑。

「だって、鳳凰様は伝説なのよ。そんな普段からいるわけないでしょ」

「いえ、いえ。普段からどこかに潜んでいるんです」

「潜んでいるって、冬眠しているみたいなもの？」

「まあ。そうですね」

たとえば……と田舎ピグは言った。

「この洞穴も鳳凰様の隠れ家の一つです！」

「うっそ〜！」

田舎ピグは、

「入ってみる？」って、言った。

一緒にいたためちゃん。

「だめじゃん！ 入ったら、ばちが当たるよ！」

「いえ。鳳凰様に会いたって人、結構いてね〜。大丈夫。大抵はいないから」

「いることもあるんでしょ？」

「いる時は大抵、寝てます。」

わる子ちゃんは、あつげにとられたよ。

洞穴はすごく、狭くて、不気味で、いきなりこうもりが出てきたよ。普通は、そこでくじけるんだ。でも、田舎ピグの先導でわる子ちゃんたちは、果敢に洞穴に入って行ったよ。

「どころで、田舎ピグちゃんは、ここに入ったことあるの？」

田舎ピグは、入ったことがないんだって。

「じゃあ、どうしてそんなこと知ってるの。でたらめ言っちゃだめじゃん！」

だめ子は、怒ったよ。

「あ。僕も聞いたの」と、田舎ピグ。

「誰に？」と、わる子。

なんと、田舎ピグは、ラットさんに、鳳凰様のことを聞いたんだって。

「うそくさ〜い！」とだめちゃん。

「本当だって！ この間、ラットさんは鳳凰様とお茶したんだって」

「お茶？」

「うん、うん。偶然、起きてた時でね〜」

ふくろつうのホーちゃんがやってきて、首をぐるりと回した。

「あなたは、知っているの？」とわる子は、ホーちゃんに聞いてみた。

ホーちゃんはうなずいて、また首を回したよ。

「鳳凰様がいたら、それはそれは目立つと思うんだけど。あたりが光り輝いて」

わる子は言った。

「あ。変装するんだって。ピグに」

「変装！」

「そうだよ。退屈するといつもその辺に出てきて、旅行してるんだよ。各地に隠れ家があつてね。でも、鳳凰様祭りがあつたから、今はここにきているはず」

洞穴の突き当りまで行くと、なんとそこにはラットさんがいたよ。

ラットさんは、わる子ちゃんたちを見つけると、「やあ、やあ」と言って近づいてきたよ。

「鳳凰様はいないの？」

「うん。他の隠れ家に出掛けて行ったよ」

わる子ちゃんたちは、ラットさんに鳳凰様の話を聞くことにした。ラットさんは、もぐらでいつも地面の下に潜っているから、ある時、洞穴を掘っていたら、鳳凰様の眠ってる壁をぶち抜いたんだって。それで、びっくりして鳳凰様を起こしてしまったらしいよ。そんなわけで、おわびにお茶をご馳走したらしい。鳳凰様と一緒にお茶をするほどなら、何か願いは叶えてもらわなかったのって、聞いたんだ。でも、ラットさん。

「お願いごとねえ……思いつかなかったよ」

鳳凰様は、ピグに化けて出掛けていったんだって。隠れ家じゃなくて旅行をしているかも……。

「あゝ。でも、へんてこりんな変装だからね。羽の尻尾がついていたり。ちよっとお間抜けかも……」

わる子ちゃんとだめちゃんは興味深く、聞いていたよ。もしかしたら、わる子ちゃんたちの住んでる町の近くに鳳凰様の変装したピグが出没するかもね。

ゴール！

わる子ちゃんも自慢ピグもみんな運動神経のいい子ばかり。でも食いしん坊ピグは、体育が苦手なんだ。そんな食いしん坊ピグでもパン食い競争だけは、実力を発揮できるんだ。今日は運動会の予行練習だ。パン食い競争の練習で食いしん坊ピグは大喜び。でも、パンはぶら下がってなかったよ。

「当たり前じゃん！」

だめ子が言った。

「練習にまでパンを出したら、だめだよ！ お金がかかるでしょ」

だめ子は、食いしん坊ピグに言っただけで聞かせたよ。

ピストルの音が鳴って、一斉に走り出した。食いしん坊ピグは、力が出なくてビリ。他にも体育の苦手なピグがいる。なぞピグだ。でも、なぞピグのそっくりさんの微妙ピグは、結構いい線行っているんだ。でも、勝ち方が微妙なんだよね。同率2位とか、微妙に運動神経がいいんだ。

夜

超わる子は、わる子のいとこ。今日は、夜、遊びに行こうと思った。早速、ふくろうのホーちゃんのところに出かけた。超わる子が訪ねていくと、ホーちゃんはお目覚めのころだった。

「どこか、飲みに行こうよ」

ホーちゃんは、喜んで出てきた。

「君、どこかい店知らない？」



超わる子は、聞いてみた。ホーちゃんは、ホーと言うと先を飛んで行ったよ。着いたのは、屋台ピグの店だった。何も言わなくても、ホーちゃんの前にお酒が置かれたよ。そして、おでんも。屋台ピグのおやじは、超わる子を見ると、ひょいとウーロン茶を置いた。

「ねえ、どうしてあたしだけウーロン茶なの？」  
すると屋台ピグ

「だって、まだ未成年でしょ？」

超わる子は、

「えーだって、ホーちゃんにはお酒をあげてるじゃん！」

「ホーちゃんは、お酒が飲める歳だからね。」

「え〜。そうなの〜？」

超わる子は仕方なく、ウーロン茶におでんをつついたよ。ホーちゃんは、くいくいといい飲みっぷりでお酒を飲み干し、おでんを食べると、去って行ったよ。

「あれっ！ ねえ、もっとゆっくりしていこうよ」

超わる子は言った。すると、屋台ピグ。

「だめだよ。ホーちゃんは、これから働きに行くんだから  
って言ったんだ。」

「ホーちゃん、働いてるの？」

「そうだよ。昼寝てるでしょ。夜働いてるの」

屋台ピグはホーちゃんの事に詳しくかったよ。

「おじさん、ホーちゃんって仕事、何してるの？」

「そうさね。新聞を配っているよ」

「へえ〜」

「一緒に牛乳配達もね」

「それって、朝じゃない？」

「うんうん。その前は、夜中の2時ごろからパンの仕込みをしているんだ」

「ええっ？」

「おかげで、あの、駅前のパン屋のおやじは朝の6時に起きてきて、

お店を開くのに合わせてパンを焼くだけなのさ」  
「そう言えば駅前のパン屋の名前は、「ふくろつ」って言う名前だったよ。」

### 占い師

ある日、ばかピグは、前世占いをしているところを見つけたよ。ピグたちの町では、今、前世占いが大はやり！ さっそく、ばかピグは占ってもらったよ。占いピグは、水晶の玉をじっと見つめていた。

「見えてきた……」

ばかピグは、占いピグの背景にゴオオオ……ッと炎のようなものが現れた気がしたよ。

「あなたの前世は……」

ばかピグはごくりとつばを飲み込んだ。

「なあに？」

「亀です」

「はあ？」

ばかピグは意外な答えにびっくり。

「あなた、走るのは……？」

「普通だよ。でも陸上をやっているから早くなったよ」

「ふむふむ……泳ぎは？」

「普通だよ」

「好きな色は？」

「うーんとね……緑！」

「そら、やっぱり亀じゃ」

ばかピグはなんかうそ臭いなあと思ったよ。そこへわる子ちゃんがやってきた。

「ねえ、何してるの？」

「前世を占ってもらったんだ」

「面白そう！ 私も占って！」

わる子ちゃんは、鑑定料を払ったよ。占いピグは、また水晶玉を見つめ始めたよ。

「わかりました」

「何？」

「あなたの前世は……」

わる子ちゃんは「ぐり」とつばを飲み込んだ。

「牛です」

「はぁ？」

わる子ちゃんは、意外な答えにびっくりしたよ。そして、シヨックを受けていたけど、ばかピグを見て、  
「なんて言われたの？」って聞いたよ。

「亀」

わる子ちゃんは、ぷつと吹き出した。そして、だめちゃんを呼びに行ったんだ。

## お受験

わる子ちゃんは、自分の部屋で勉強をしていたよ。隣の窓からばかピグが声をかけた。

「わる子ちゃん、勉強してるの？」

「そうよ」

「へへえ。わる子ちゃんって賢いから、勉強しなくてもわかるんだと思っていたよ」

「そんなことは、ないのよ」

単純なばかピグはその姿を見て、勉強しようと思いついたよ。でも、勉強って、どこから取り掛かったらいいのかわからない。早速、わる子ちゃんに聞いてみたよ。

「ああ。私は、塾の宿題をやっているのよ」  
「ふ〜ん。わる子ちゃん、塾に行ってるの」  
「そうよ」

なんでもわる子ちゃんの行っている塾はインディアンピグ学習塾  
って言うんだって。でも、そこは入るのも実力テストがあって、難  
しいらしい。どうして、そこへ行ってるのって聞くと、インディ  
アン中学校に入りたかららしいよ。ばかピグはとりあえず、フツ  
ーのピグ学習塾に行くことにしたよ。

さっそく、通い始めたんだ。そこへ、超わる子がやって来た。

「ばかピグくん、どこへ行くの？」

「最近、塾に通っているんだ」

「ばかピグは、塾で使ってる問題集やテストを超わる子に見せたん  
だ。」

「そんなの、行かなくてもいいのに〜」

超わる子は言ったよ。

「だって、行かなきゃ中学に入れないじゃないか」

「そうか〜」

(ピグ族は、すぐ、納得する習性があるらしい)

超わる子も塾に行きたいと言うと、超わる子ママは大喜び。早速、  
ピグ学習塾に行かせようと思ったよ。ところが、超わる子は遊びす  
ぎで、ピグ学習塾もついていけないって言われたんだ。

「どうしたら、いいのよ〜」

超わる子は、ピグ学習塾から紹介された、バード塾と言うところ  
に行くことになったよ。バード塾には、鳥と一緒に机を並べていた  
よ。鳥頭でも理解できるくらいの、噛み砕いた授業が好評らしい。

超わる子は内心(いやあああ〜!)と思った。バード塾から脱  
却したくて、少し真剣に学習するようになったんだって。

バード塾は、ちっとも授業が進まないんだ。一桁の四則計算ばっ  
かりだし。

先生が言うには、

「何回も練習して忘れないことが大事なのです」

超わる子は、すっかりいやになって、塾をやめてしまった。

ある日、超わる子が家に帰ると、家庭教師らしきピグがいたよ。なんと、ママが頼んだ生活指導ピグらしい。わる子の学習メニューから、おりこうになるお食事のメニュー、寝る時間まで決めてくれるらしい。

超わる子は、「いやああ〜」と思ったよ。

でも、バード塾よりはいいかなあと思って、しぶしぶ従っているよ。超わる子が帰宅すると、すでに家に生活指導ピグが来ていたよ。

「超わる子さん、お帰りなさい」

「ただいま」

「今日の宿題は、なんですか？」

超わる子は、連絡帳を見せたよ。

「では、夕ご飯の前にこの宿題をやっつけてしまいましょう」

超わる子は、机に向かって、宿題をやり始めたよ。生活指導ピグは、後ろで本を読んでいるよ。超わる子が宿題をやると、生活指導ピグが添削してくれる。

「あ〜。終わったって言うてるけど、問題、全部飛ばしていない？」

生活指導ピグは、辞書の引き方から、教えてくれたよ。ご飯は、生活指導ピグの考えた献立。ご飯が終わると、小学校の復習をわかないところから。まだ、今のところを勉強するレベルじゃないんだって。生活指導ピグが来るのは、今は毎日だけど、そのうち、2日に一回になり、週に2回くらいまでになるんだって。小学校を卒業するまでに、そうなるかなあ……と不安な超わる子だったよ。

## 15・風邪大流行！

風邪大流行！

ピグたちの周りで風邪が大流行！とうとうわる子ちゃんのクラスが学級閉鎖になってしまった。そんな中、学級閉鎖になったのに、自慢ピグが登校してきたよ。

「先生、おはよーございます」

「あら、自慢ピグさん。今日はね、学級閉鎖になったのよ。連絡が行ってなかったかしら？」

先生は言ったよ。

「いいえ。知ってまーす！」

「あら？ じゃ、どうして学校に来たの？」

「僕が健康なことを自慢するためでえ〜す」

「だっ、誰に自慢するの？」

「先生と、それから学級閉鎖だから他の学年の人がいるので、他の学年の人に元気なことをアピールします！」

「自慢ピグさんが風邪を引いていないことは、わかったわ。でも、今日はそんなわけで、うちのクラスは、授業が出来ませんからね。

お帰りなさい」

「えー。先生はどうして来てるの？」

「先生は、いろいろお仕事があるのですよ。間違えて学校に来た子がいいたら教えてあげなきゃいけないし」

「先生、僕元気だから、宿題も出来るよ！ 宿題だしてえ〜」

「はいはい、わかりましたよ。先生が作ったプリントをあげます。

次回の宿題だったんだけど」

自慢ピグは帰って行ったよ。

自慢ピグは、クラスの子のお見舞いに行くことにしたよ。まずは、ばかピグのところへ行ってみた。

「ばかピグ君、風邪をひいているかい？」

「ばかピグはやってきた。」

「もう、鼻がずるずるさ。」

「ばかピグは、ティツシユを手放せなかったよ。」

「熱はないんだけどね。ヘエークション！」

「ばかピグはまたティツシユを取り出すと、ちーん！と鼻をかんだよ。」

「お大事に」

「自慢ピグは出て行った。次はわる子ちゃんのところへ行ってみたよ。」

「あら、自慢ピグ君、元気そうね。私は、ふらふらよ。熱があるの」

「大変だね、お大事に」

「自慢ピグが去ろうとすると、わる夫が家の手伝いをしていたよ。」

「わる夫くん！君は風邪をひいていないのかい？」

「うん。そうだよ。でも、家族が風邪ひいてるからさあ、看病しなくちゃいけないだよねえ」

「ふ〜ん。大変だね。じゃあね〜」

「自慢ピグは、駄菓子屋さんに行つて、お菓子を買って帰宅したよ。それから2日後。わる子ちゃんたちのクラスは、授業を開始したよ。でも、今度は自慢ピグとわる夫は風邪をひいて欠席だったんだつて。わる子ちゃんは、流行おくれで、ちよっとお間抜けなつて言つて笑つたけど、仕方ないよねえ。」

「おやじ」

「わる子ちゃんは、塾から帰る途中、向こうからおやじピグがやってきた。」

「やあ。わる子ちゃん」

おやじピグは、こんな名前だけど、わる子ちゃんのクラスメートなんだ。

わる子ちゃんは、おやじピグが袋を下げているのを見て、

「それなあに？」と聞いたよ。

そしたら、おやじピグ、袋の中を見せてくれた。

「今ねえ。コンビニで買ってきたんだ！」

週間お笑いマンガと、焼き鳥の缶詰と、お茶だったよ。

「おやじくさ〜い！」

わる子ちゃんは、眉をひそめたよ。

「ぼく、まだ子供だから、お茶にしてるんだ！ 大人になったら、

お酒と焼き鳥にするんだよ」

おやじピグは得意げだった。

「このマンガは、ギャグを研究するためさ。学校で使えるからね」

おやじピグは去って行ったよ。

ある日、おやじピグ、風邪をひいて近所の医者に行ったよ。そしたら、その血液検査で……なんと！ 引っかかったんだ！

ハムちゃんの看護師さんが、

「大きな病院で検査を受けてください〜い」

そして、インディアンピグ病院に紹介状を書かれてしまったんだ

！ おやじピグはショック！ だった。仕方なく、紹介状を持って

インディアンピグ病院に出かけた。

そしたら、

「くわ〜っ！ 重症ですな。入院してください」

おやじピグは、頭をハンマーで殴られたくらいのショックだった

よ。おやじピグは、おやじ病だった。身も心もおやじになりすぎて、

血液検査の数字までおやじ並になってしまっんだ！

「大丈夫ですよ。1週間で退院できます」

入院したおかげで数字は正常になったよ。

「どれかひとつ、おやじ趣味をやめてください」って先生に言われて、おやじピグは、おやじギャグをやめることにしたよ。成人式ま



ては、おれは、おれは、おれは。

## 16・合宿

### 合宿

わる子ちゃんたちの学年が合宿に行くことになった。初日には、きもだめしがあるよ。怖がりピグは、スケジュールを見ながらぶるぶる震えていたよ。

「きもだめし……怖いよぉ」

「あら、一人じゃないのよ。小グループで回るから平気よ」

わる子ちゃんは、言った。怖がりピグは、それでも怖くてたまらない。先生が、どうしても怖くてだめな人は、言ってくださいと言われたよ。怖がりピグは、早速手を挙げたよ。隣のクラスの怖がりピグちゃんも手を挙げていた。

「参加しなくていいんですね」

と、怖がりピグは先生に聞いたよ。

「そうですよ。でも何もしないのはいけませんから、先生方のお手伝いをして欲しいのよ」

怖がりピグは、目をぱちくりしたよ。

「だって、一人で合宿所で待っているのも怖いでしょう?」

怖がりピグは、

「キャーッ!」と甲高い叫び声をあげた。

みんながびつくりしたよ。怖がりピグの叫び声の方がよっぽどビクン! とするんだ。

「あのね。そんなに怖がらなくていいのよ。先生と一緒にきもだめしのお世話をするだけですからね」

「はい。それで何をするんですか?」

あらためて、怖がりピグは先生に聞いたよ。先生は、言った。

「きもだめしを終えて、ゴールしてくる子たちを先生と一緒に迎えるのですよ」

「なんだ、それならできます。」

「帰って来ない子とかいないか、チェックをするのよ」  
怖がりピグは、それをきいた途端！

「キヤア~~~~ッ！」と叫んだ。

クラスみんながビクン！ としたよ。怖がりピグは、震える声で聞いたよ。

「どうして、帰って来ないの？」

「いえ、去年は来ないと思って見てみたら、話し込んだりね。列からはぐれることもあるだろうし」

そこで、怖がりピグはまた、

「キヤア~~~~ッ！」と叫んだよ。

みんなは、またビクン！ とした。

「列からはぐれて帰って来ないの？」

「ええ。見に行ったりね」

「見に行くって？ キヤ~~~~ッ！」

「大丈夫ですよ。見に行くのは先生たちの仕事ですから。怖がりピグさんは、ゴールで到着した人のチェックだけでいいのよ」

怖がりピグは、ほっとしたよ。

そして、きもだめし大会がはじまった。みんながぞくぞくと帰ってきたけど、わる子ちゃんたちのグループがまだだった。他のグループはみんな帰ってきている。先生たちが見に行くことにしたよ。

怖がりピグは、ゴールでなみだ目で震えていたよ。先生たちが、わる子ちゃんたちのグループを探しに行こうとしたら、丁度、わる子ちゃんのグループが戻って来たよ。

「わる子さん、どうしたんですか？」

「この子が足をくじいちゃって、ゆっくりしか歩けなかったんです」  
わる子ちゃんは、言ったよ。

「そうですか……」

「それと、知り合いにも会ったし」

わる子ちゃんは、近くの木をのぼるを見上げたよ。そうしたら、ふ

くろろのホーちゃんがいたよ。

ホーちゃんは、

「ホー」

と、言って首を180度回したよ。

「キャ~~~~ッ！」

怖がりピグが大声で叫んだ。

「怖がりピグちゃん、この子は怖くないのよ」

わる子ちゃんは、言った。ホーちゃんは、いきなり木を飛び立っ  
たかと思うと、ザッ！ つと何かをつかんだよ。

ねずみだった。

ホーちゃんは、怖がりピグにねずみを差し出したよ。

「キャ~~~~ッ！」

怖がりピグは、またまた叫んだ。

「あら、ホーちゃんはやさしいから、おいしいものをくれようとし  
てるのに」

怖がりピグは泣きながら、先生のあとをついて、合宿所に戻った  
よ。わる子ちゃんたちもホーちゃんと別れて、帰って行った。

きもだめしの夜が終わって、今日は帰る日。合宿所の朝は、バイ  
キングだったよ。食いしん坊ピグは大喜び。さっそく、山盛りにお  
かずを取ったよ。

バイキングで食べていると、先生が各テーブルをまわってきたよ。  
なんと！ このバイキングも授業の一つだったんだ！ 先生が、一  
人のピグの隣で立ち止まったよ。

「あらあら……あなたはフライドポテトばかりね。他のおかずも  
食べないとバランスが悪いわよ」

「えへっ。だって、僕、ポテト大好きなんだもの！」

あなたには、野菜やカルシウムが必要です！ 先生は、だんっ！  
と、テーブルに温野菜と牛乳を置いていった。

「そのポテトの量には、これだけの野菜がないとバランスが悪いで  
す」

先生は、わる子ちゃんに言った。

「あら、わる子さんは、トーストにしたのね」

「はい。うちでも朝はパンなんです」

「サラダに玉子焼きに牛乳ですね。いいですね。できれば野菜はもっと多めにしたらいいですよ」

「はい」

なんと、先生は栄養のアドバイスをしているんだ。そして、あまりにも食事の偏った子のところには、強引におかずを追加していたよ。

### 鼻高ピグ

鼻高ピグは、ちょっとおませで、おしゃれで、わがままな子。人にちやほやされるのが好きなんだ。そしていつも取り巻きを連れてくるよ。鼻高ピグは、ママとデパートに出かけた。そしたら、とても素敵な服を見つけたよ。

「ねえ、ママ。この服買って」

「これは、大人向けのブランドの服じゃないの。お値段もすごく高いし。まだ鼻高ピグちゃんの着るような服じゃないわ。だめよ」

「え〜。いいじゃないの。買ってよ」

「それより、あなたには、これがいいわよ」

ママは、ジュニア用の服の中から、洋服を勧めたよ

「え〜。そんな子供っぽいのいやよ」

「じゃあ、これでどうかしら?」

「う〜ん、仕方ないなあ。じゃあ、これで我慢してあげる」

それでも鼻高ピグは、新しい服が嬉しくて、翌日、張り切って学校へ行ったよ。

「どう? この服、昨日、ママに買ってもらったのよ!」

「鼻高ピグさん、いいですね」

「さすが、センスいいですね」

取り巻きは、しきりに鼻高ピグのご機嫌を取っているよ。そこへわる子がやってきたよ。

「あれ〜。見ない服だね。それ鼻高ピグちゃんに似合ってるじゃない!」

わる子は何気なく鼻高ピグの服をほめたよ。鼻高ピグは、大喜びして、ますます得意になったよ。

(ご機嫌をとったつもりじゃなかったんだけどな……)

わる子は、ちよつと後悔したよ。

教室の一番後ろの机で、鼻高ピグたちを眺めながら、地味ピグが言った。

「あんなそうぞうしいタイプの人たちには付いていけないなあ」

地味ピグは、地味〜な女の子なんだ。地味ピグは、隣の席に座っている無口ピグに話しかけた。

「ねえ?」

無口ピグは、うなずいた。

「そうだった。無口ピグちゃんは無口なんだっけ」

「無口」

「それなら、交換日記する?」

無口ピグはにっこりとうなずいたよ。地味ピグと無口ピグは、交換日記をはじめたよ。それを見つけた鼻高ピグ。

「なあに、この人たち! 女の子同士で日記を交換しているわ。キモ……!」

「別にいいじゃないの」

近くにいたわる子が言ったよ。

「そっだよ。人の日記見ちゃだめじゃん」

だめ子も言った。

「私は、交換日記するなら男の子とするわ」

鼻高ピグは得意そうに言った。

「実は、私、ピグ中学の先輩と交換日記してるのよ〜」

「あの子、彼氏とかいそいだよね」

わる子は、だめちゃんに言ったよ。

「そっだね」

でも、その数日後、鼻高ピグは先輩に言われたんだ。

「勉強とか忙しいし、交換日記はやめよう」

鼻高ピグは、がぐん！ だったよ。

## 17・自慢ピグの部活選び

### 自慢ピグの部活選び

4月になった。自慢ピグは、部活をえらぶことにしたよ。

「自慢できるような部がいいなあ」

自慢ピグは、目立つには何がいいかなと考えたよ。そして運動部がいいと思った。活躍して目立てば、自慢できるもんね。自慢ピグは、サッカー部に行ってみた。わる夫がいたよ。

「わる夫がいるんじゃ、目立てないかも」

自慢ピグは、思った。やっぱり、わる夫は得点をいくつも決めていたよ。

わる夫より、活躍はできそうもないので、自慢ピグは他の部をのぞきにいった。

テニス部だ。テニス部には、お洒落ピグがいた。結構、うまかった。

「君？ テニス部希望？」

コーチがやってきて、聞いた。

「お試ししてみたいんです」

自慢ピグは言った。

「いいとも。テニスはやったことあるかい？」

「ないです」

「じゃあ、教えるから、ちょっと球を打ってごらん」

やってみると、結構難しかったよ。ラケットに当たるようになって、ボールがラインを越えて遠くに飛んでいくんだ。

「自慢ピグ君。ラケットの面が上を向いているからだよ」

自慢ピグは、とてもテニスで目立つなんて無理だな……と思った。サッカー部とテニス部は、どうもしっくりこないんだ。自慢ピグは、他の部を見に行くことにした。そこで、弓道部をのぞきにいったよ。



そこには、わる子ちゃんがいた。

「わる子ちゃんは、上手なんだろうなあ」

自慢ピグは思った。見学していると、やっぱり上手だった。やめておこう……と自慢ピグは思った。自慢ピグは、今度は陸上部に行ってみた。ばかピグがいたよ。ばかピグは、自慢ピグのところへやってきた。

「自慢ピグ君。陸上部に入るのかい？」

「どこがいいか、いろいろ、見て回っているんだ」

「ばか先輩がやってきた。」

「君！ 見ているだけじゃ判らないだろう。まずは走ってみるんだよ」

見ていると、自分にも出来そうだった。

「タイムを測ってみよう」

自慢ピグは、まずまずのスピードだったよ。

「いいじゃないか。練習すれば、タイムは短くなるぞ」

自慢ピグは、ちょっと褒められていい気分になった。でも、運動部を全部見ていないから、ちょっと保留にしようと思ったよ。

「うん。他も見て回ってきたらいいよ。陸上部にはいろいろと知ら、また来てね」

自慢ピグは、体育館に行ってみることにした。バレー部が、練習をしていたよ。バレー部のエースアタッカーは、なんとだめちゃんだった！ 練習試合をしているみたいだよ。だめちゃんが、スパイクを決めていた。それがすごいんだ。だめちゃんのパワーは。だめ~~~~と叫ぶ勢いで、ビシッ！とスパイクを決めているんだ。相手チームは、立ちつくしたままだよ。だめちゃんは、後衛にまわってもすごかった。なんと、だめちゃんの体がぐるぐる回転していたよ。回転レシーブだ。レシーブしたと思ったら、すぐに後ろからだめちゃんのバックアタックだ。相手チームが拾いに行くよりはるかに速く、すごい角度で決まったよ。コーチが、見学している自慢ピグに気づいたよ。

「君！バレー部希望？」

「いいえ。いろいろ見て回っているんです」

「お試し。どうだい？ だめ子君に球出ししてもらおう」

「とっ、とんでもないです！」

自慢ピグは、ふるえがきた。

「うちのバレー部は、優勝候補なんだ。やりがいがあると思うよ」

「バレーは、体育の時間しかやったことないから、無理だと思いました」

「だめだめ！ 見ているだけじゃ判らないのよ~~~~」

後ろから、ボールを脇に抱えただめちゃんがやってきて叫んだ。

「だめ子スパイクを受けなきゃだめ~~~~」

「きゃ〜っ！」

自慢ピグは、飛んでくるボールの間を縫うように逃げた。何か運動部がいいなと思いつつながら、バレー部の激しさには、ついていけないと思つたよ。

他にも、野球やバスケ、卓球があったけど、お試しで走ってみた陸上部が一番しっくりくるみたい。陸上は、団体競技じゃないから、自分で頑張つていい成績を出せば、自慢できるしね！ 自慢ピグは、ばか先輩のところを訪ねたよ。

「おお！ やる気になったか〜」

ばか先輩は大喜び。早速、翌日から練習だ。陸上部には、長距離がとくいなマラソンピグがいた。

「やあ。新顔だね。よろしく」

マラソンピグは気さくに話しかけてきたよ。陸上部のとなりでは、応援部の女の子たちが、チャリーディングの練習をしていた。

「いいね！女の子たちがいると、張り切っちゃうね！」

マラソンピグは、張り切っていたよ。

女の子たちは、応援練習が一段落すると、

「さあ！ 今度は、サッカー部の近くで練習をしましょう。サッカー部を応援するのよ！」

と、移動して行った。  
そして、グランドの遠くのほうで、またチアリーディングをして  
いたよ。

いろんな部の近くで、応援しながら、練習しているんだね。

### 連絡通路

わる子ちゃんの家とばかピグの家はお隣さん。2階にあるわる子  
ちゃんの部屋とバカピグの部屋は、つり橋がかかって、行き来で  
きるんだ。

これはばかピグの父が、行き来できたら便利だろうと思って、わ  
る子家に断りなく、勝手に取り付けたもの。でも誰も文句を言うも  
のはなく、わる子ちゃんも便利だねえ！って、フツーに使っている。  
それを見たわる子の子の後ろに住むだめちゃんの家も真似て、わる  
子ちゃんの家とばかピグの家につりばしを取り付けた。そして、3  
人は部屋から部屋へつり橋で移動している。

### ロボット

テレビや雑誌では家庭用のロボットが話題になっていたよ。でも、  
とつても値段が高くて、持っている人はなかなかいないよ。わる子  
ちゃんは、もつと安かったら、わる子ホテルで働いてもらえるのに  
……と考えていた。

そんなある日、わる子ちゃんのところインディアンピグが遊び  
にやってきたよ。自分でロボットを作ったんだって。ピンクのロボ  
ットがインディアンピグの後ろをついてきていたよ。わる子ちゃん  
は、面白くて早速だめちゃんやばかピグを家に呼んだ。みんなが見  
守る中、ロボットは首を左右にくるくる回したよ。カメラがあつて  
みんなの顔を覚えているんだってインディアンピグが言ったよ。イ

ンディアンピグは、みんなを紹介したよ。ロボットがしばらくとま  
ったよ。みんなの顔と名前を一致させているんだって。インディア  
ンピグは、すでに次のロボットの製作にとりかかっているんだって。  
それは、お腹のところには扉があって、電子レンジになってるらし  
い。

## 18・誰だっけ

誰だっけ

わる子ちゃんの学校には誤解ピグがいる。誤解ばっかりしているからとっても迷惑なんだ。ある時、わる子ちゃんが廊下を歩いていると、誤解ピグがやってきた。

「やあ！ ばかピグ君！」

早速、誤解しているみたいだよ。

「違うよ。私はわる子」

「え〜？ そうだっけ？」

そこにインディアンピグもやってきた。

「君は、ハムちゃんだね！」

「誤解ピグ君。どうしたら、僕がハムに見えるんだい！」

インディアンピグは、憤慨している。

「ハムちゃんって名前のピグなんだろう？」

誤解ピグは、そのまま1組に入ってしまったよ。

「僕の席がないよ。どうしてかなあ」

「誤解ピグちゃん。あなたは2組でしょう？」

クラスの子に言われて、誤解ピグはそうかなあ？ と思いながら、1組に行ったよ。1組も2組も新学期がはじまって席替えをしているんだ。

「僕の席は、え〜と、わる子ちゃんの隣だっけ……」

誤解ピグは、だめ子の隣に座ったよ。

「私は、だめ子だけど、誤解ピグちゃん。その席で合っているわよ。だめちゃんはそう言って、まあるくおさまったんだよ。」

血液検査

わる子ちゃんの学校で健康診断があったよ。

「血液検査は、受けたい人だけでいいですよ」

と、先生が言ったよ。

おやじピグは、おやじ病が再発しないか心配だったから、血液検査を受けることにしたんだ。ハムちゃんの看護師さんがおやじピグの腕から血を抜いた。

「結果は、明日出ますよ。学校に報告しマース」

おやじピグは、どきどきしながら結果を待っていたんだ。

次の日。おやじピグは、先生に呼び出された。

「検査の結果が出ました」

「どうでしたか？ 先生」

「おやじピグさんは、また病院を受診してくださいと書いてありますよ」

おやじピグは、ガーン！ となった。おやじピグは、またまたインディアンピグの病院に出かけたよ。

「おやじピグさんは、おやじウイルスに感染しているね」

おやじピグは、びっくりして言ったよ。

「だって、ぼく。先生に言われておやじギャグをやめたのに！」

「これは、体質なんだよ。仕方がないね」

でもね。ウイルスだから死滅させればすぐ治るらしいんだ。翌日から、3週間、おやじピグは、隔離されたんだって。

## ナビゲーション

ピグたちは、よくソーラーカーに乗っている。怖がりピグは、ソーラーカーで道を間違えたら怖いので、カーナビを買おうと思ったよ。そこで、インチキ堂に行ったんだ。ナビが沢山並んでいたよ。インチキ堂はお値段は高いんだけど、たまに変わったものや中古品の

掘り出し物があるんだ。怖がりピグが見ていると、安いナビがあったよ。ピカピカの素敵なナビだった。

「ああ。お客さん、それはアウトレットなんですよ。だから安いのも、いいナビだね。僕、これ買っよ」

「現品限りなの。箱がないから、袋でいい？」

「ウン。すぐに使うからいいよ」

「まいど！」

ナビは優れものだったよ。ナビをつけると、勝手にハンドルが引っ張られるように動いて、最短距離で目的地に連れて行ってくれるんだ。おかげで怖がりピグが道を間違えることもなくなったよ。ある日、怖がりピグは、遠出をすることにしたよ。ちゃんと、目的地をナビに入れたんだ。そしたら、ナビはハンドルを引っ張って、どんどん細い道に入っていくんだ。でも、怖がりピグは、近道をしてくれているんだと思って、ナビに任せていたよ。やがてナビは細いトンネルに入ってしまった。とっても暗くて不気味で誰もいないトンネル！ 今にも幽霊が出そうなんだ！

怖がりピグは、怖くて怖くて……「キヤーツ！」と叫んだよ。

トンネルを出ると、今度はナビは、お墓の中に入ってしまったよ。

「コノ道ヲトオレバハイデス！」

ナビはしゃべってどんどん進んでいくよ。真っ暗な山道も突っ切って進んでいく。怖がりピグは、怖くて怖くて、顔を上げることが出来なくなつた。

それでもナビに引っ張られて、なんとか目的地にすごく早く着くことが出来たんだ。

インチキ堂の倉庫には、“心霊ナビ”と印刷された空箱が転がっていたよ。

## 19・みどりハムちゃんのゆめ

みどりハムちゃんのゆめ

みどりハムちゃんは、看護師学校の一年生。看護師さんにあこがれて入学してきたんだよ。夢は、立派な看護師さんになって、インディアンピグ病院におつとめすることなんだ。みどりハムちゃんは、一生懸命授業を受けたよ。熱心に勉強をしたから、成績もとってもよかったんだ。

ある日、学校で実習があった。実習の途中で……。

「キヤーツ！」

みどりハムちゃんは、ひっくり返ってしまった。どうしたの！とみんなが駆け寄ってきたよ。

「血……血！」

みどりハムちゃんは、血が苦手だったんだ！みどりハムちゃんは、無事、インディアンピグ病院にお勤めすることができるのかなあ？

みどりハムちゃんは、血を克服しようと頑張ったよ。どうやって、頑張ったかって？学校の先生の奨めで、スプラッターな映画を沢山見たんだ。

そのうち、なんだか慣れてきたよ。

「どう？大丈夫でしょう？」先生が言った。

「はい。頑張ります」

みどりハムちゃんは、早速、採血の実習に参加したよ。

「キヤーツ！」

みどりハムちゃんは、気持ちが悪くなって倒れてしまった。イン



ディアンピグ病院にお勤めするのが夢なのに！

「本物の血を見るとだめなのね」

「はい。映画は平気になったんですけど……」

「じゃあ、催眠ピグさんをお願いしましょう」

「はい」

みどりハムちゃんは、催眠ピグのところに行つて、血はへいき

つて、暗示をかけてもらったよ。でもね。血を見たショックで、

暗示が解けてしまうんだ。みどりハムちゃんは、悲しくなった。仕

方なく、退学届けを書いていたよ。赤十字ハムちゃんがやってきて、

みどりハムちゃんに言ったものさ。

「ねえ？ あなた薬剤師さんになればいいわよ？そしたら、インデ

ィアンピグ病院にお勤めできるかもしれないわよ」

みどりハムちゃんは、「そうか」と納得した。早速、勉強して、

お薬科に編入したんだ。それから、みどりハムちゃんは、一生懸命

勉強して、お薬の免許を取ったんだって。それでも解剖の実習のと

きは、倒れたりしてたんけどね！

みどりハムちゃんは、お薬の免許を取つて、インディアンピグ病

院にお勤めできたよ。一緒に働く看護師さんたちを見て、ちよっぴ

りうらやましかつたよ。でもあこがれのインディアンピグ病院に勤

めることが出来てとっても嬉しかったんだ。インディアンピグ病

院の先生は、名医だから患者さんがたくさん来る。みどりハムちゃ

んは、毎日が忙しくて一日がすぐに過ぎていったよ。みどりハムち

やんの仕事は、先生の処方箋を見てお薬を調剤するんだよ。おもに

入院患者さんのお薬を作るんだ。お薬を調剤したら、あとで患者さ

んのところに行つて、お薬の説明をするんだ。それから患者さんの

お話を聞くんだ。今日もみどりハムちゃんは、患者さんのところに

出かけたよ。

「おやじピグさん。お薬の効き目はどうですか？」

「僕、自覚症状がないから、お薬が効いているのかいないのかわからないよ！」

「なるほど」

そこに赤十字ハムちゃんがやってきた。赤十字ハムちゃんもインディアンピグ病院にお勤めできたんだね。

「さあ。おやじピグさん。採血をしますよ。検査の数字を見れば、お薬が効いているかどうかわかります」

「キヤーツ！」

みどりハムちゃんは、おやじピグの血を見てしまって、倒れてしまった。

「ごめんなさいね」

赤十字ハムちゃんは、みどりハムちゃんをかついで、部屋を出て行ったよ。

ばかピグの恋

ばかピグが、学校に行く途中、なんともいい香りが漂ってきたよ。すると、一人のお姉さんが歩いてきたんだ。

ばかピグは、

「おはようございます」

と言ってみたんだ。

そしたら、お姉さんも

「おはようございます」

と言って返してくれたよ。

ばかピグは、嬉しくなって、

「いい匂いですね」

と言ってみたよ。

「私は、香りピグ。お化粧品を作る会社で働いているのよ」

お姉さんは言ったよ。お姉さんは、これから仕事に行くらしい。

ばかピグは、次の日も同じ道を通って学校に行ったよ。やっぱり

お姉さんも向こうから歩いてきて、仕事に行く途中みたい。

ばかピグは、お姉さんに

「香水を作っているんですか？」

と、聞いてみたよ。

「私は、お化粧品につける香りを調合して作っているのよ」

お姉さんは言ったよ。

そんなふうにして、お姉さんとばかピグは、朝、会っては、お話するようになったよ。ある日、お姉さんがとても悲しそうだったんだ。

「香りピグさん。どうしたの？」

「鼻が悪くなって、匂いを感じなくなっちゃったの」

お姉さんは、病院に入院してしまった。

ばかピグは、お姉さんのお見舞いに病院に行ったよ。

「鼻の具合はどうですか？」

「ええ。治療して治ったけど、もうお化粧品の微妙な匂いは嗅ぎ分けられないのよ」

お姉さんは、しくしく泣いていた。

「もうお仕事ができなくなってしまった」

ばかピグは、次の日もお姉さんをお見舞いしたよ。

「他のお仕事を探さない」と

それでもお姉さんは少しずつ前向きになっていったよ。

ある時、お姉さんは、ばかピグに言ったよ。

「ばかピグちゃん。私、結婚することにしたの」

ばかピグは、がくんとなったよ。お姉さんは、自分を診察してくれたお医者さんと結婚してしまったんだ。そしてばかピグは失恋してしまった……。

## 座薬

みどりハムちゃんは、今日もせっせと調剤をしていたよ。今日の処方箋は、おならを出なくする薬だった。出なくするといっても全く出ないわけじゃない。おならピグのおならがひどすぎるので、せめて普通のレベルにする薬なんだ。おならを治す薬だけあって、お尻に入れる座薬なんだよ。みどりハムちゃんは、処方箋のとおり薬を作って、受付のかごに入れたよ。そして、他のお薬を取りに奥に引っ込んでいったんだ。

そこにおやしピグがやってきた。

「やあ。僕の薬がもう出来てる！」

大変！ おやしピグちゃんは、かごに入った薬を勝手に持って行ったんだ！ みどりハムちゃんが戻ってくると、かごから薬が消え

ていたよ。さあ、大変！ みんなで、薬が落ちていないか、薬局を探して回ったんだ。

そこにトイレから出てきたおやじピグ。

「どうしたの？」

「ここのかごに入れた薬がないのです」

「それは、僕の薬だね！ もう使っちゃった」

「ええっ！」

おやじピグは、痔だったんだ。

「だって、ここに座薬があっただもん。僕は、痔だって言われたからね。僕の薬だよ」

「違いますよ！ それはおならピグさんに処方されたおなら止めだったんですよ！」

「え〜！」

おやじピグは、途端に気分が悪くなって、そのまま倒れてしまった。おやじピグは、ウンウン言っただけで寝込んでいたよ。おなら止めはおならピグには効くけど、何ともない人が飲むと副作用があるんだね。

「駄目ですね〜。おやじピグさん。勝手に薬を持って行っちゃ……」

「ごめんなさい〜」

おやじピグは、おならが出なくなって、お腹がパンパンに膨らんでいたよ。

「このままほっておくと、明日にはお腹が爆発します。手術をしましょう」

「ひええええ〜」

おやじピグは、ストレッチャーに寄せられて運ばれていったよ。そして、腹腔鏡手術でおならを抜かれて……なんとか復活したんだ。おなら止めの薬の気がなくなるまで、おやじピグ。ずっと点滴だったんだって。

コタツ

最近、朝がとっても寒いんだ。ばかピグは起きるのがだんだん億劫になってきたよ。でも起きなくちゃ。ばかママが、コタツを出してくれたよ。ばかピグは、早速、こたつにもぐりこんだんだ。コタツはとっても暖かくて、ばかピグは幸せだったよ。

「ばかピグちゃん。ご飯が出来たわよ」

ばかピグに声をかけたけど、ばかピグがいるはずのところにはいないんだ！

「キヤーツ！」

ばかママが、慌ててばかピグを探しに行くと、ばかピグはコタツを引きずりながら、タンスの前に行って、コタツから手だけを出して着替えをしていたよ。ばかピグは、コタツのまま学校に行けたらいいなって思ったんだ。

早速インディアンピグのデパートに行ってみたよ。入ったまま、お出かけできるコタツを探したんだ。インディアンピグデパートは、いろんな発明品を売っている。そのコタツの箱には、『移動式コタツ』と書いてあったよ。

身長に応じていろんなサイズがあったよ。ばかピグは、大喜びでそのコタツを購入して帰ったんだ。

移動式コタツはとても便利だ。充電しておけるから、コードが要らないんだ。ばかピグは、コタツに入りながら、家の中を移動したよ。

次の日、ばかピグは、コタツに入ったまま、学校に行ったよ。当たり前なことだけど、先生に叱られたよ。先生は、手帳を出してきて、校則のところを見せたんだ。そこには、『ゲームソフト、携帯電話、コタツの持ち込み禁止』と、ちゃんと書いてあったんだって。

## ヘルペス

ばかピグは、最近とっても疲れていた。口元がむずむずするなあ  
と思っていると、こぶのようなものが出来てきたよ。風邪引きの時  
のヘルペスとは違うみたい。もっと大きめではこぼこしているんだ。  
早速、ばかピグはインディアンピグ病院に出かけたよ。

先生は、一目見て「ヘルペスですね」と言ったよ。

「なあんだ。風邪引きのヘルペスなんですね？」

「いや、違う！ ヘルペスはヘルペスでも新種のおやじヘルペスだ  
ね」

「え〜っ！ それ、なんですか」

先生は、ヘルペスを拡大写真に収めて見せてくれたよ。なんと！  
拡大してみると、おやじの顔をした人面瘤なんだ！

「きゃ〜っ！」

ばかピグは叫んだよ。

「気持ち悪いっ！ 先生、これは治らないんですか？」

「大丈夫。これの変わっているところは、形だけなんだよ。治し方  
は普通のヘルペスと同じさ」

ばかピグはほっとした。

「おっと！ もう一つ、違うところがあった！」

「な、何ですか!？」

ばかピグはびくびくしながら聞いたよ。

「それはね……。とにかくこれをつぶして薬をつけよう！」

先生は、消毒した針を持ってきて、瘤をちくん！ とついたよ。  
そうしたら……。

「あっ！ くっ、臭い!!！」

「そうなんだ。おやじヘルペスから出る汁は加齢臭がするのだよ。  
そこが違うんだ」

「ええっ!!！」

「さあ。薬を塗ってあげよう。この薬もちよつと違うんだよ」

そして、ばかピグは薬をもらって、帰宅したよ。家で、お薬の説明を読むと、そこには”加齢臭を抑える消臭剤と、リラックスできるラベンダーの香りつきです”と、書かれていたんだって。

わる子ちゃんのお正月

わる子ホテルは、お正月も大繁盛！ ハムちゃんたちが忙しく働いている。ホテルのフロアの真ん中には、お正月の飾りつけ！ 大きな米俵が二つあって、その上に七福神や金銀の飾り物が載っているんだ！ とつても豪華！ その様子を見ていた盗賊のネットさん。米俵を盗もうと思ったよ。

わる子ホテルに発炎筒を沢山投げ込んだんだ！ きゃーっ！ ハムちゃんたちは右往左往。煙がなくなつた頃には、米俵は消えていた。

イヒヒヒヒ……。

ネットさんは、自家用ジェットから米俵を二つぶら下げて、得意げだ。その時、鷹が飛んできて、米俵を思いつきりつついたんだ。その日。わる子の町には、お米の雨が降つたよ。

頭痛

わる子ちゃんは、頭痛に悩まされていたよ。頭痛になんてなつたことなかったのに！ 風邪かなあと思つて、インディアンピグ病院に行つてみた。

インディアンピグ先生。

「頭のどのへんが痛いですか？」

「帽子をかぶつたみたいなき感じに締め付けるみたいに痛いです」

「そうですか」



インディアンピグ先生は、くるりと椅子を回して机の上のカルテに書き込み始めた！

振り向きざまにいきなりわる子ちゃんを

「わっ！！！」と大きい声で驚かせたんだ！

「キャーッ！」

わる子ちゃんは、びっくりして椅子から飛び上がったよ。

「今だ！」

インディアンピグ先生が叫ぶと、赤十字ハムちゃんがその辺りにふわふわ浮いているものを網で捕まえたんだ。

「わる子さん。どうですか？」

「あっ！ 頭痛がなくなってる……」

赤十字ハムちゃんは、網ですくったものを透明な箱に入れて、見せてくれたよ。なんだかグレーの雨雲みたい。

「これが頭痛の正体ですよ」

わる子は、目をぱちくりさ。

「わるさんがびっくりして椅子から飛び上がった時、わる子さんの飛び上がりの速さに間に合わなくて、頭痛がここに残ったのです。それを捕まえたんですよ」

「なるほど」

わる子は感心した。

でも、頭痛はずしのこの技は、インピグ先生しか使えないんだって。

## 筋肉

食いしん坊ピグは、最近太ってきたのが悩みだった。だって、洋服がきつくなってきたんだもの。食べ物が大好きで、よく食べるから仕方がないね！

食いしん坊ピグは少し痩せようと思ったけど、大好きな食べ物はやめられない。だから、運動で体を引き締めることにしたよ。

早速、スポーツマンのばか先輩のところ相談に行ったんだ。

「君は、体を絞りたいんだね！」

「はい。ぶよぶよしているんですよね。僕」

ばか先輩の体には筋肉がついていたよ。

「僕もそんな筋肉をつけたいなあ！」

「じゃあ、僕がトレーニングのメニューを組んであげよう！」

ばか先輩は、部屋に引っ込むと、何か金属製のものを持ってきたよ。

「これを体に取り付けるんだ！」

「これは、何ですか？」

「ははは。筋肉養成キプスさ」

食いしん坊ピグは、先輩に養成キプスを取り付けてもらったよ。

腰のところにリモコンがついていて、いろんなボタンがついているんだ。

「『走る』にしてみたまえ」

食いしん坊ピグが『走る』のボタンを押すと、勝手にギプスが足を上げさせてくれて、走り始めたよ。速さは、調節ができたから、食いしん坊ピグは、だんだん強くしてみたんだ。そのうち、高速スピードにしまった！

「キヤーツ！」

「ストップ、ストップ！」

ばか先輩が叫んでいる。食いしん坊ピグは、慌ててストップボタンを探したけど、手を振り切って走るから、うまくボタンが押せないんだ！ そのうち、自分の体がチリチリと焼き豚臭くなってきたよ。

「燃えるっつ！」

食いしん坊ピグが叫んだ途端！

「シャーッ！」

養成ギプスは止まって、食いしん坊ピグは、真っ白になってしまった！ 実は、養成ギプスには、発火防止の消火器が内蔵されているんだね。

## 20・座業（後書き）

今回で、わる子ちゃんは、最終回となります。次回からは、「焼豚戦隊！わる子レンジャー」がスタートするよ！

『焼豚戦隊！ わる子レンジャー』 1・風邪ひき怪人の恐怖（前編）

コンクリートの打ちっぱなしの建物。

じめつと湿気のある室内。どうやらここは地下室らしい！

なんとそこでは、白衣のお医者さんみたいな服装の男が、一人の少女を取り押さえているじゃないか！

「ふふふ。リーダーのわる子を捕らえたぞ！ さあ、みんな。わる子を基地に連れて行け！」

それを聞いた部下らしい軍団が、「ほう！」と奇声をあげたんだ。ピーヒョロロオ……。

そこで、地下室一杯に寂しげなオカリナの音色が響いた。

「む。だ、誰だ！」

「わる子レッド。参上！」

なんと、地下室のドアが開いて、赤いマントを羽織った少女が現れたよ。

「な、なんだと？ わる子はここに……」

「あはははは……」

取り押さえられていた少女は、油断した男の足を思い切り引っ掛けた。男は、瞬間、宙に舞い上がり、どーんと地下室の床に倒れたよ。少女は、洋服を一枚ばつと脱いだんだ！ 下から、現れたのは、黒の服装。

「実は、俺がわる子に変装していたのさ！」

「お、お前は……わる子ブラック！」

なんと！ リーダーのわる子レッドだと思われていたのは、わる子の双子の兄。わる子ブラックこと本名わるおだったんだ！

「悪の軍団。大トロめ！ 今日こそ、覚悟しなさい！」

「くそっ……。ばれていたのか」

男は白衣を脱ぎ捨てた。そして、本来の大トロの姿に戻ったんだ

！ 大ト口は、大きな筆を取り出したよ。

「ふふふ。勝負は、次回におあずけだな」

大ト口は、筆で宙に「大」の字を書いた。

そしたら、なんと！

空中に青白い大の字が浮かびあがったんだ！

「諸君。また会おう！」

大ト口は、ニユルーン！ と大の字の中に吸い込まれていき、すべて吸い込まれると、大の字はふっと消えてしまった。それと同時に軍団もいなくなったんだ！

あわてて駆け寄ったわる子たちにも間に合わなかったよ。

「逃げられたわね。わるお」

「うん……」

これは、わる子ちゃんの別バージョンで、わる子レンジャーと地球征服をたくらむ悪の組織「大ト口軍団」との闘いの物語です。

\*\*\*

「んーと。こつちが風流堂のガトーショコラ！ こつちのは、フナタニのチョコレートケーキだね」

食いしん坊ピグが、テーブル一杯にケーキを並べて、口をもぐもぐさせている。

「すごいわねー」

テーブルの向かいの席で、おしゃれピグが目を輝かせて見ているよ。なんと、食いしん坊ピグは、来月、開催される町の利きケーキ大会に出場するんだ。だから、せっせと練習をしているらしい。

「まかせておいてよ。優勝は僕のもの」

賞金は、なんと10万円なんだって。

「ケーキがたくさん食べられて、賞金ももらえるなんて！」

食いしん坊ピグは、すんごく幸せそうだよ。

「もう。食いしん坊ピグちゃんったら、まだ優勝が決まった訳じゃ

ないのよ」

「まあね。でも今まで正解率100%でしょ」

「食いしん坊ピグさん。ホントはケーキの持込み禁止なんですけどねえ」

カウンターの向こうで、喫茶『黒ばら』のハムちゃんのマスターが腰に手を当てて、渋い顔をしている。

「マスター。かたい事いわないでよ。賞金が当たったら、ここで仲間におごるんだからさ。そしたら、売り上げもアップするでしょ。あ。コーヒーのおかわり頂戴。口の中が甘くなっちゃった」

「仕方ないですねえ」

ハムちゃんのマスターは、首を左右に振り、肩をすくめると、コーヒーを落とし始めた。

「それにしても今日はお客さんが少ないのね」とおしゃれピグ。

「いやー。最近。風邪が流行ってるらしくて……」

「そう言えば、わる子ちゃんのクラスも学級閉鎖になったって聞いたわ」

そこにカランカランと音を立てて、わる子ちゃんがやってきたよ。わるおも一緒みたい。

「あ。わる子さん、わるお君いらっしやいー」とマスター。

おしゃれピグもわる子たちに小刻みに手を振っているよ。わる子とわるおは、カウンターに腰掛けた。

「ねえ。マスター。テレビつけて」

わる子が言った。

「りょーかい」

マスターがテレビをつけると、ニュースをやっていた。レポーターハムちゃんが、マイクを手にして立っている。なんと、レポーターハムちゃんは、マスクをしているよ。

『ここ。インディアンピグ病院は、風邪ひきの患者さんで一杯です』

カメラが、患者さんであふれた病院の風景を映してる！

「なにになに？」

食いしん坊ピグと、おしゃれピグもテレビの前に集まってきたよ。でも、そのうちにテレビは……。

『どっ、どっやら、私もうつってしまったようです！』  
「ほっ、ほっ……」

レポーターハムちゃんが咳込みはじめたよ。やがて、テレビの画面が　しばらくおまちください　になってしまった！　いくらなんでもテレビ中継が中断されるなんておかしいよね！

「ねえ？　わるお。なんかおかしくない？」とわる子。

「うん。風邪にしては、ひどすぎる。なんかにおうな……」

食いしん坊ピグが慌てて自分の匂いを嗅いでいるよ。

「僕、臭くないよ。甘い匂いならするかもしれないけど……」

「食いしん坊ピグちゃんのことじゃないわよ」

おしゃれピグがたしなめた。

「ひょっとして……大ト口の仕業？」

マスターが声を潜めて言ったんだ。

「やっぱりマスターもそう思う？」とわる子。

「なるほどねー」とおしゃれピグ。

閑散とした街角。あやしいおじいさんが歩いてる。おじいさんは、手に白い紙袋を持っているよ。そして、紙袋の中に手を突っ込むと、パアッ！と黄色い粉をばら撒いてる！　おじいさんの笑い声が響く。「あははははは！　みんな風邪をひけえ。そうすれば、学校の授業も工場の生産もストップするのだ！　その間に大ト口軍団が町をつとるのだ」

町のあちこちで、みんなごほごほ苦しそうだよ。さあ。わる子レインジャーは、町を救うことが出来るのか？！

わる子の学校は、どんどん学級閉鎖になるクラスが増えてきた。先生達もマスクをして苦しそうなんだ。わる子が家で自習していると、携帯腕時計が鳴ったよ。わる子は、素早くイヤホンを耳に当て



た。この携帯時計は、実は電話機能を備えているんだね。電話の主は、天才ピグだったよ。

「天才ピグちゃん。何かわかったの？」

「うん。風邪の原因はね、大トロ軍団の差し向けた怪人だよ」

「やっぱりね！」

「じゃ、インディアンピグの研究室で待ってる」

「わかったわ」

わる子は、出かける支度をすると、インディアンピグの研究室に急いだんだ。

30分後。

インディアンピグの研究室には、5人の仲間達が集まっていたよ。この5人は、大トロ軍団の魔の手から地球の平和を守るために組織されたレンジャー部隊なんだ！ それぞれ得意技を持っている！

まずは、わる子レッド。言わずと知れたわる子ちゃんで、この『焼豚戦隊わる子レンジャー』のリーダーなんだ。学校でも弓道部に入っているだけあって、矢を射るのが得意！ 続いて、わる子ブラツクことわるお。わる子の双子の兄で、忍びなんだ。煙を焚いて、消えてしまったり、まきびしをばら撒いたりするよ。次にわる子ピンクことおしやれピグ。彼女の得意技は、カードだよ。普段は、喫茶『黒ばら』で、よくカードで占いをしているけど、戦闘用には、特殊加工されたランプを使うんだ。それから、わる子ブルーこと天才ピグ。彼は頭脳派で、PCによる分析が得意。インディアンピグと直接連絡が取れるのは、彼だけなんだ。最後にわる子イエローこと、食いしん坊ピグ。味覚と嗅覚が鋭くて、一度食べた味は忘れない！

以上、5人が活躍するよ！

インディアンピグの研究室では、大トロ軍団と戦うためのいろんな武器を研究、開発している。今回も風邪ひき怪人の出没にあわせて、召集がかけられんだね。インディアンピグ博士は、直接わる子たちの前に姿を現すことはない。連絡手段を持っているのは、天才

ピグだけなんだ。わる子たち5人は、円陣を組んでいたよ。中央には、なんと！ インディアンピグ博士のホログラムが動いている！  
「やあ！ わる子レンジャー諸君。天才ピグ君から聞いているとは思うが、今回の風邪の流行は大トロ軍団の仕業で……」

インディアンピグが話し始めた。天才ピグはPCを操作すると、インディアンピグの話にあわせて、スクリーンに映像を映し出したよ。そこには、腰の曲がったおじいさんが映ってる！ おじいさんはよれた紙袋を持ち、黄色い粉をばら撒いているんだ！

「こ、これは……」

わる子が思わず口にしたよ。

「これが風邪引き怪人なのだ」

ホログラムのインディアンピグがわる子に答えるみたいにしゃべったよ。

「お察しのとおり、この黄色い粉が風邪ひきの菌なのだ。今流行の風邪は風邪ひき怪人を倒さない限り、治らない」

わる子たちがどよめいたよ。ホログラムのインディアンピグは、引き続き話している。

「だが、諸君。安心したまえ。我がインディアンピグ研究室では風邪ひき怪人の黄色い粉を分析して、対抗するワクチンを作り上げたのだ」

そこには、巨大な注射器の映像が映っていた！

「諸君は、このワクチンで確実に風邪ひき怪人を絶命させて欲しい。では、さらばだ。諸君」

ホログラムの映像がフツと消えた。研究室の隣の部屋には、巨大な注射器が置かれていた。

「これ、大きすぎてひとりじゃもてないわね……」とわる子。

「もう少し、コンパクトなものが開発できなかったのかな」とわるお。

「仕方がないですよ。開発する時間がゆっくり取れなかったのだから。風邪ひき怪人を絶命させるには、これだけの薬液の量が必要

なのです」

天才ピグがめがねのつるを持ち上げながら言ったよ。続けて、天才ピグはパソコンの画面を切り替えた。風邪の流行と、風邪ひき怪人の移動距離から今いる位置を計測するんだって！「画面を見て天才ピグが叫んだ。

「風邪ひき怪人は、天の川ホテルに向かっている！」

「なんだって！」とわるお。

天の川ホテルには、各ピグ国の要人が宿泊するんだ。そのピグたちが、自分の国に風邪を持ち帰ったら大変なことになる！

「急ごう！」

わるおは、わる子ブラックにすばやく変身すると、ものすごい跳躍力で飛び上がり、研究室の外に消えたよ。

～後編につづく～

## 2・風邪ひき怪人の恐怖（後編）

ここは、天の川ホテル。一人のおじいさんが、カートを押しながらやってきたよ。

「いらつしゃいませ」

ホテルのベルボーイが、丁寧にお辞儀をしたんだ。

「ご宿泊ですか？ お荷物をお持ちいたしましたよ……」

おじいさんは、ベルボーイにカートを渡してにやりと笑うと、コートのポケットをごそごそしてる。ちらりと白い袋が見えたよ。その時、おじいさんの右手がガシツとつかまれた！

「なっ、なんだあ〜？」

おじいさんは、ハツとして、ベルボーイを見たよ。いつの間にか、ベルボーイは扮装が取れて、黒装束のわる子ブラックになっていたんだ。

「きつ、貴様は……」

「ははは……風邪ひき怪人め。俺がわる子ブラックさ！」

わる子ブラックは、白い袋を取り上げると、ホテルの外に走り出した。風邪ひき怪人をホテルの外に連れ出す戦略なんだ！

「ま、待てえ〜」

おじいさんは、いつの間にかどん姿が変わっていった！ ホテルの中庭まで走ってきた時にはもう、風邪ひき怪人に变身していたよ。白い円筒形の体。それは下に行くほどずぼんでいる。その形はちょうど和式のローソクみたいだ。すぼまった円筒形の胴体から足が2本にゅつと出ていて、白いゴム長靴みたいなのを履いている！そして側面からは手がにゅつと出ているんだ。顔は、円筒形の体の側面の上部についている。まゆをひそめ、丁度しかめっ面の歌舞伎役者みたいな表情をして、自分もマスクをしているよ。インディアンピグの調査によると、マスクは自分が風邪をひかないためらしい。へんてこな怪人だよな！わる子ブラックと風邪ひき怪人は、

ホテルの中庭でにらみあったよ。そこに中庭の奥から、わる子が赤いマントをひらひらさせながら現れた！

「わる子レッド参上！ 風邪ひき怪人。覚悟なさい！」

次にホテルの陰から、現れたのは……。

「わる子ピンク参上！」

「やつ？ ややや……？」

風邪ひき怪人は、わる子レッドとわる子ピンクを見てうるたえたよ。その後ろに静かに現れたのは、わる子ブルー。風邪ひき怪人が、気配を感じて振り向くと、更に死角について、わる子イエローが現れた。

「焼豚戦隊わる子レンジャー！」

5人はいつせいに叫んだよ。

「わる子レンジャーだと！？ ふん。お前たちごときにこの風邪ひき怪人様が倒せるものか。お前たちも風邪ひきにしてやる！」

風邪ひき怪人の手がすつと宙をなでたかと思うと、その手に新しい白い袋が握られていたよ。

「危険よ！ あの黄色い粉を吸ってはいけないわ」

わる子ピンクが叫び、みんなは、素早くインディアンピグ発明のめがねとマスクを装着したよ。そして戦いがはじまった。まずはわる子レッドが風邪ひき怪人の横腹に蹴りをいれたんだ。風邪ひき怪人はよろけたけれど、持ち直したよ。わる子イエローのパンチが飛ぶ。

「ふん。そんなもの。ぜんぜん堪えんわ！」

風邪ひき怪人が体に力を入れて、「ふんっ！」と押し返すと、わる子イエローは芝生の上のところと転がってしまった。わる子ピンクが斜めがけにしたポシエットから、特殊合金のランプを取り出したよ。シャッフルすると立て続けに風邪ひき怪人の体に命中した。

「うわっ！」

わる子ピンクの操るランプは特殊加工されているから、風邪ひ

き怪人には結構なダメージをあたえたみたいだ。トランプの当たったところが赤くなっているよ！

「おのれ！」

風邪ひき怪人は、わる子ピンクに飛び掛ろうとしたよ。その時だ。

「ターイム！」

わる子ピンクが叫んだんだ。

「なんだ？」と風邪ひき怪人。

「ちよっと、待って」

わる子ピンクは、いそいそとホテルの陰に引っ込んだ。

「今の戦闘で、髪が乱れたわ」

わる子ピンクは、鏡を見て頭の前のほうに少しだけ生えている髪を整えているよ。わる子ブラックは木の枝の上に座り、わる子レッドとわる子ブルーは、正座した。わる子イエローは体育座り。風邪ひき怪人も律儀に正座して待っている。戦いを続けてもいいのにな。

「お待たせー」

わる子ピンクが再び現れた。

「戦闘再開っ！」

わる子ピンクが風邪ひき怪人の前に立ち、空手の構えを見せた。

でも風邪ひき怪人のほうが力はずっと強いんだ。

「キヤーツ！」

風邪ひき怪人のタツクルで、わる子ピンクは、芝生の上を転がされてしまったよ。風邪ひき怪人のばら撒いた黄色い粉が煙って、すごく視界が悪くなってる！

「早く決着をつけるんだ」

わる子ブルーが叫んで、バイクに積んだ巨大注射器を差し出した。わる子ブラックとわる子イエローが巨大注射器を運び出したよ。注射器の存在に気づいて、逃げようとする風邪ひき怪人の胴体にわる子レッドの矢が飛んだ。

「ギャツ！」

風邪ひき怪人は、横倒しになった。わる子レッドは、風邪ひき怪

人に飛びついて、肩の辺り？ を押さえつけた。続いて、わる子ブルーが足を押さえつけたよ。風邪ひき怪人は、力はあるけれど、円筒形の格好をしているから、転がると容易に起き上がれない。

「今だ！ 風邪ひき怪人に注射を！」

「けどその時。わる子イエローもぼったりと倒れてしまった。

「どうしたんだ。わる子イエロー！」

「おっ、おなかが空いたあ〜」

みんなは、脱力したよ。そうしている間に風邪ひき怪人が、芝生の上に手をついて再び起き上がるうとしてる。肩を押さえていたわる子レッドは、起き上がりの反動で後ろに倒れてしまった。わる子ブルーも風邪ひき怪人の蹴りで簡単に吹っ飛ばされてしまったよ。

「もっつ！ わる子イエローったら……仕方ないわねえ」

わる子ピンクは、ポシエットに手をかけた。出てきたのは1本のバナナ。

「朝食にはバナナがいのよ〜！」

わる子ピンクは、わる子イエローに向けてバナナを放り投げた。

わる子イエローは、目を輝かせて、バナナをキャッチすると、大急ぎで皮をむいて三口で平らげてしまった。その間にわる子ブラックが、やっと起き上がった風邪ひき怪人の足元にまきびしをばら撒いたんだ。だから、風邪ひき怪人はまたまたコケてしまった。

「今度こそ！ いっせーの！」

わる子、わる子ブルー、わる子イエローの3人は、掛け声を合わせ、風邪ひき怪人の横っ腹に注射器をぶすりと突き刺した。素早くわる子ブラックとわる子ピンクが注射器を押して薬液をすべて注入した。

「ギヤアアアアアアッ！」

断末魔の悲鳴とともに風邪ひき怪人は、絶命した。ボンツ！ と言う音とともに煙を残して消滅してしまったんだ。

\*\*\*

2週間後。

町の利きケーキ大会が始まった。食いしん坊ピグもエントリしているから、わる子たちも応援に駆けつけたよ。ところがね……。食いしん坊ピグったら、さっきからはずしっぱなしなんだ。

「どうしたんですかねえー。食いしん坊ピグさん。練習ではあんなに調子良かったのに」

『黒ばら』のマスターのハムちゃんが腕を組んで不思議そうにしている。

「ホントねえ〜。マスター」と調子をあわせるおしゃれピグ。

わる子ちゃん達とマスターは首を捻っていたよ。いくら他のピグたちが強敵だとしても、食いしん坊ピグったら成績が悪すぎるんだ。結局、優勝は、ほかのピグがかつさらっていつてしまったよ。

「何？ 食いしん坊ピグちゃん、風邪ひいたんだって？」

喫茶『黒ばら』で、大きな声でわる子が言った。

「そうなんですよねー。ぐずん……」

食いしん坊ピグは悲しそう。

「流行は終わったのになんだかお間抜けねー」

おしゃれピグが食いしん坊ピグの顔を覗き込むように言ったよ。

「仕方がないよね。鼻が効かなきゃ味がわからないもの」

天才ピグが慰めている。

「まあ……早く治しなよね！ マスター。食いしん坊ピグちゃんにホットミルク！」

わるおがオーダーすると、マスターは「はいよ」とミルクパンにミルクを注ぎ始めた。喫茶『黒ばら』には、わる子達の楽しそうな笑い声が響いていたよ。



### 3・アイドル怪人の罠（前編）

夕刻を迎えたここピグ公会堂の座席は満員だ。今日は、ここでアイドルのコンサートが開催されるんだ。ざわつく観客席のピグたちやがて、会場が次第に暗くなってくる。しばらくしてステージをスモークが覆った。もうピグたちは、興奮度MAXさ！ やがて、お腹の底に響くような重低音の演奏に合わせて、ステージ中央から台がせりあがってきたよ！

歌いながら現れたのは、アイドルピグのたつくんだ。甘いマスクでニコニコ笑ってる。くつきりした顔に髪も目もちよっぴり色素の薄いブラウンなんだ。時には陰りのある表情もして、そこがクールでなんとモカッコいいんだよ。たつくんは、フリフリの王子様みたいな衣装を身にまとって、切れのいいダンスを披露しながらステージを駆け回った！

「キヤーツ！」

「キヤー」

「たつくーん」

ピグたちは、いつせいに黄色い声をあげた。観客席は総立ちだ。ノリノリでこぶしを振り上げてる子。胸の前で手を組んで涙ぐんでる子。前の席のピグたちは、興奮のあまり舞台に駆け寄ろうとして「危ないから！」って、ハムちゃんのコンサートスタッフに押し戻されているよ。たつくんは、衣装を変え踊りまくり、次々とヒット曲を披露したよ。

歌い終えて、たつくんが「今日は、どうもありがとう！」と端に引っ込んでからも、女の子たちからのアンコールの声は鳴り止まないんだ。再び、たつくんが姿を現すと、女の子たちはもう絶叫してる。わんわん泣き出している子すらいるよ。やがて、コンサートは2回のアンコールを終えて、大盛況のうちに終了したんだ。

\*\*\*

「たつくん……カツコいいわぁ〜」

喫茶『黒ばら』で、おしゃれピグが、夢見るようにつぶやいているよ。手には、丸めたコンサートのパンフレットを持っている。

「たつくん？ だって、それ。食べられないんだろう？」

テーブルの向かいに座った食いしん坊ピグは、つまらなそうに言ったよ。その右手には、ホットケーキを突き刺したフォークが握られていた。

「もうっ！ 食いしん坊ピグちゃんったら、食べることばかりなんだから」

お店の中は、コーヒーの香ばしい香りが漂ってる！

「ねえねえ……」

カウンターの際でパソコンを叩いていた天才ピグが、おしゃれピグに声をかけてきた。

「何？ 天才ピグちゃん」

天才ピグは、じつとパソコンの画面を見ながら言ったんだ。

「あのさ。今、インディアンピグ博士とメールでやり取りしていたんだけど……」

インディアンピグ博士の言葉にはっとして、食いしん坊ピグとおしゃれピグ。天才ピグの次の言葉を待ったよ。

「アイドルピグのたつくんの背後に大トロ軍団がからんでいるらしいよ」

「なんですって！」

おしゃれピグが思わず椅子から立ち上がったよ。

「ふんふん。それで？」

食いしん坊ピグは、マイペースでホットケーキを食べている。

「詳しいことは、よくわかんないんだけどね。とにかく研究所に行ってみよう！」と天才ピグ。

食いしん坊ピグは、口をもぐもぐさせながら立ち上がった。

「マスター。お勘定。つけといて！」

それだけ言っつて、天才ピグとおしゃれピグと一緒に喫茶『黒ばら』

を出て行ったよ。あとに残されたハムスターのマスターは、渋い顔で「仕方ないですねー」って腕を組み首をかしげていた。食いしん坊ピグは、いつもこの調子なんだ。けれど金払いはとってもいいんだよ。食いしん坊ピグは、味覚、嗅覚を買われてレンジャー部隊に選ばれたから、栄養費が出ているんだって。

\*\*\*

3人がインディアンピグ研究所に到着してしばらくすると、わる子とわるおもやって来たよ。天才ピグが移動しながら、わる子とわるおに連絡をいれていたからね。レンジャー達が揃うと、フツと博士のホログラムが映し出されたよ。

「やあ、やあ諸君」

3Dの博士がカプセルの中で手を振っている！今日の博士は、なんと！アイドル仕様のフリフリのお洋服を着ているよ。

「わゝ。博士。どうしたんですかー」

わる子が第一声をあげた。

「なんか軽いなー」とわるお。

博士は、話し続けた。

「私の服装から連想すれば、今回の事件の概要がつかめると思うが……」

「つかめないよ……」

ぼそつと食いしん坊ピグ。

「で、たつくんのバツクに大トロがいるんですか？」

食いしん坊ピグの言葉にかぶせるようにおしゃれピグが言ったよ。「みんな知っていると思うが、スーパーアイドルたつくんのファンは、40万人とも50万人とも言われている。CDの売り上げも常にトップセールスを記録しているのだ。来年には海外進出も予定されている」

「私。ファンクラブに入っているのよ！」

おしゃれピグが嬉しそうに叫んだよ。

「そこに大トロ軍団が目をつけたんだ。まずここに置かれている」

「D」

わる子は一步踏み出して、テーブルの上のCDを手にとった。

「新しく出たこのCDには、サブリミナル効果を狙った言葉が録音されていることが判明した。これを聴き続けていると、大トロに洗脳される可能性がある」

研究所内をたつくんの曲が流れ始めた。

「ここだ。諸君」

CDのスピードがゆっくりになった。そうしたら、なんと！ サビの部分のコーラスの中に微量な音声で「大トロマンサー」って、お経のように繰り返しているのが聴こえるんだ！

「え〜っ！」

おしゃれピグはびっくりさ。

「普通に聴いていたらぜんぜん気づかないわよー！」

口を両手で覆うおしゃれピグ。

「大トロ軍団は、アイドルたつくんを世界征服の足がかりにしようとしているのだ。そこで諸君」

わる子たちの表情が引き締まったよ。

「今度の日曜日。たつくんのサイン会と握手会がある。これはたつくんとファンが直接接触れ合える機会だ。そこで大トロ軍団は、たつくんファンを洗脳してしまっただろう」

「それを阻止するのですね」

わる子が言った。

「そうだ」

ホログラムの博士が腰に手を当ててうなずいた。わる子は、いつも不思議に思っている。ホログラムの博士は、まるでわる子達とやり取りをしているみたいにタイミングよく反応する。研究所で指令を受ける時は、丁度TV会議みたいな感じなんだ。博士が本当は何をしている人なのか、わる子は知らない。もちろんレンジャー達は誰も知らないみたいだ。元々、わる子達がレンジャー部隊に抜擢されたのも、『親展』で手紙が届いて、この研究所に呼び寄せられた

んだからね。そしていきなり今みたいに博士のホログラムが指令を与えた。そんな感じだったんだよ。もつとも天才ピグは、お手伝いやメツセンジャー役を努めているから多少は博士に近いのだろうけど、正体は謎らしいんだ。博士はさらに話し始めたよ。

「気をつけてもらいたいの、たっくん自身は怪人ではなく、大トロにとりつかれているだけなんだ。そう言う意味では、たっくんも被害者だ。だからたっくんに怪我をさせたりしてはいけない」

「たっくんに取り付いてる大トロを落とすだけなんです。良かった」

おしゃれピグは、逆にこの機会にたっくんとお近づきになれるのが嬉しいみたいだ。

「それでだ。諸君。たっくんがスーパーアイドルだから大トロに利用されるのだ。アイドルの弱点はなんだ？」

「スキャンダル！」

食いしん坊ピグがはつきりと口にしたよ。

「そうだ。だから今回はたっくんをアイドルの座から引きずり降ろす事が目的だ」

話しながらゆらゆら揺れている博士。

「なるほどねー」

腕組みしたわるおがうなずいた。

「何かスキャンダルは、あるの？」

食いしん坊ピグは聞いてみた。すると「わがインピグ研究所は、たっくんのスキャンダルを入手した」と博士。天才ピグは、博士の目配せの合図を受けてスクリーンに映像を映し始めた。

「えーっ！ウソッ！」

研究所におしゃれピグの悲鳴が響いたよ。なんと！ たっくんは、結婚していたんだ！ 映像には、マンションの一室で奥さんと子供と3人で食事をしている様子が映し出されていたよ。しかもそれだけじゃない！

「これが、たっくんの卒業した学校だ」

博士の言葉に乗せて、スクリーンには校舎が映し出された。第  
年度卒業式の看板。それから整列した生徒たちの映像。そう。卒  
業年度から見ると、たつくんは年齢を5歳サバを読んでいる！

「と言うことは、今、たつくんは……」

おしゃれピグは、とっさにたつくんの年齢を計算したんだ。する  
と……人間で言うと30歳に相当する事がわかったよ。そりゃあ、  
もうアイドルとしては、苦しい年齢だよね！

「え〜っ。シヨツク……」

おしゃれピグは、スクリーンから2〜3歩遠ざかると、それっき  
り黙り込んでしまった。

「確かにこれをばらせば、アイドルの地位は危なくなるかも……」  
わる子が言った。

「あまり手荒なことはしたくないですが、大トロがとりついている  
となるとね……」と天才ピグ。

「それで今回の作戦はわかったよ……」  
わるおは察しがいいんだ。

「じゃあ、みんな！ 一足お先に」

はずみをつけて飛び上がると、わるおは、素早い動きで研究室の  
屋根から消えたよ。

〜アイドル怪人の罠（後編）〜 に続く

#### 4・アイドル怪人の罠（後編）

日曜日。イベント会場は、整理券を手にしたたつくんファンが、長蛇の列を作っていたよ。博士の計らいで、整理券を用意してもらったわる子たちは早速、会場に乗り込んだんだ。トークショーに続けて、たつくんがヒットナンバーを披露すると、もう会場は、もう興奮の坩堝さ。ファンたちは、失神したり、失禁したり大変なんだ。そしていよいよサイン会と握手会が始まったよ。でもね。わる子達が観察しているとおかしいんだよ。たつくんと握手をしたファン達は、みんな青白い顔でうつろな目をして会場を出ていくんだ。その様子を観察していると、たつくんが、ファンに「どうもありがとう」と握手をするたびにたつくんの目が青白く光ってる！

「ああ……洗脳されてる……でもたつくんに憑いた大ト口を落とせば、洗脳は解けるはずだよ」と天才ピグ。

わる子はうなずいたよ。

「ここで、大ト口を落とさなくては……」

その時、会場にいた男性のイベントスタッフが、ひな壇のたつくんに近寄った。

「どうもお。取材に来ましたあー」

男性は、ペロんと黄色いスタツフジャンパーを脱いだよ。すると突撃芸能レポーターの腕章が！なんとイベントのスタツフに化けて、取材をしようと紛れ込んだみたい。

「たつくん。実は結婚してるって情報が入ったんだけど。子供も一人いるんだってね。本当？」

唐突にレポーターが言うものだから、たつくんは、ビックリして固まったよ。

「ええっ!？」

会場のたつくんファン達がざわついた。

「え？ 何何？」

「嘘！」

あちこちからファンの声が聞こえる。

「それに年齢を5歳も若く公表しているんだってねー。どうなの？説明して欲しいな」

追い討ちをかけるようにレポーターが言ったよ。会場は、混乱し始めた。本当のことを知ろうと、ファンの子がたつくんのところを押し掛けて、将棋倒しになった。他にももうずくまって泣き出す子。興奮状態のファン達で場内は騒然としている。慌てて会場にいた係員が、拡声器を使って叫んだ。

「今日の……たつくんのサイン会と握手会は中止します！」

たつくんはマネージャーに抱えられるように楽屋に姿を消した。ファンの子はスタッフに誘導されて会場を出て行ったよ。騒ぎの後のがらんとした会場。芸能レポーターは楽屋まで追っかけてきたよ。「君ねえ。いつたいどういっつもりなんだ！」

マネージャが言ったよ。

「ははは……」

芸能レポーターは、高らかに笑うと、ぱっと扮装をはがした。そこにはいたのは、レポーターでなくわる子ブラックだった。

「おっ、お前は誰だ！」

「わる子ブラック参上」

わる子ブラックの右後ろから、赤いマントの少女が現れた。

「わる子レッド参上！」

続いて、左後ろから現れたのは……。

「わる子ブルー参上！」

続いて、ちゃっかりとたつくんの色紙を抱えながら現れたのは……。

…。

「わる子ピンク！ 参上……」

最後に口をもぐもぐさせながら現れた……。

「わる子イエロー！ ごめん。ちょっと戦闘前の腹ごしらえなの」  
他のレンジャー達は、わる子イエローが口の中のものごとくくん



と飲み込むのを待つて叫んだよ。

「焼豚戦隊わる子レンジャー！」

楽屋のソファで休んでいた筈のたつくんが、ゆっくりと立ち上がった。

「ふ。あはははは……」

たつくんは、顔を上にあげると、高らかに笑った。全身が青白い光に包まれると、たつくんの色素の薄い髪は、毒々しいレインボーカラーに変化した。目は隈取を入れたように色どられ、釣りあがっている。邪悪な顔立ち。

たつくんの体の大きさが、一回り大きくなった。そして全身を包むフリフリ衣装はイルミネーションのように光っている。

「きゃー。たつくんが……」

わる子ピンクは、呆然と立ち尽くしている。たつくんは、アイドル怪人に変身してしまっただ。

「わる子レンジャーめ。せつかくの洗脳計画を邪魔してくれたな」

「大トコの回し者、アイドル怪人。さあ、外に出るのよ！」

わる子レッドが叫び、アイドル怪人とレンジャー達は、広い会場に場所を移し、戦いが始まった！ まずは、アイドル怪人とにらみ合うわる子。他のレンジャーたちが後ろで控えている。わる子レッドに一步二歩と近づきながら、アイドル怪人はフリフリ衣装に手をかけた。なんと！ この衣装はフリルが取り外し出来るらしい。

一列分のフリルを剥ぎ取ると、アイドル怪人は、わる子レッドの後ろで、まだ動揺しているわる子ピンクに向かって投げってきたよ。

「危ない！」

わる子ブラックが素早く、わる子ピンクを抱えあげて、跳躍した。フリルは、壁を削り取ってUターンし、アイドル怪人の衣装に納まったよ。再び、アイドル怪人は、別の場所からフリルを一列剥ぎ取ると、今度はわる子レッドに向かって投げってきた。弧を描いて飛んでくるフリルをわる子レッドは、転がるように避けたよ。

「あのフリルは、軽量の金属で出来ていて、アイドル怪人の唯一の

武器なんだ」

わる子ブルーは、携帯情報端末を片手にめがねの中心をちよいと持ち上げて言った。

「あんなにフリルが沢山あったら危ないよ！ どうしたらいいんだい」とわる子イエロー。

「大丈夫。一回、使ったフリルは、充電しないと使えないから」

アイドル怪人は、今度は、話しているわる子ブルーの隙について、フリルを投げてきたよ。

「おおっと！」

わる子ブルーは、頭を低くして逃れたよ。

「こんなことしてたんじゃばてちゃうよ！ 早く勝負をつけなくちゃ」

続くアイドル怪人の攻撃を避けながらわる子イエローが叫んだ。

「大トコの邪悪な心がああ戦闘用衣装を作り上げているんだ。だからたつくん本来の心を取り戻すしかないよ」

わる子ブルーの言葉にわる子ブラックはうなずいた。

「心理作戦……」

わる子レッドがつぶやいたよ。わる子ピンクは、ポシエットから特殊合金トランプを取り出して投げた。飛んできたフリルは空中で叩き落とされたよ。次にフリルが飛んできてもわる子ピンクが叩き落してしまう。その命中率は100発100中だ。アイドル怪人はだんだんとばててきたようだ。そこにわる子ピンクが言ったものさ。「何よ。そーんな事してたら、奥さんと子供が悲しむわよっ！」  
アイドル怪人は、突っ立ったまま目をぱちくりさせた。わる子ピンクの言葉に耳を傾けてくれたみたい。

「奥さんとは、まだ学生だった時代に知り合っただってね……」  
わる子ブラックが言ったよ。

「うっ……」

なんだかアイドル怪人の頭に去来するものがあつたみたい。

「君は……高校を卒業して、上京してきた。そしてお料理専門学校

に通ううちに今の奥さんと知り合った」

わる子ブルーは、携帯情報端末を片手に淡々と語り始めた。

「二人は、たちまち恋に落ちた。そして二人でお店を持つことを夢見て、卒業と同時に結婚したんだ」

アイドル怪人は、固まったままでわる子ブルーの話の聞いているよ。

「卒業して飲食店で働きはじめて、子供にも恵まれた。そして休日に繁華街を歩いているところをスカウトされんだ。すぐには、売り出してもらえなかったけれど、何年かするうちにデビューのチャンスがめぐってきた。かくて君は奥さんと子供の存在を隠し、スーパーアイドルへの道をかけあがった。そんな君に大トロが目をつけたんだね。でも君は気づいてるはずさ。段々とたっくん人気が落ちかけていることに。これ以上アイドルを続けても落ちるだけだ。まして年齢を5歳もサバ読んでいるから。君は……人間で言つと、もう30歳なんだよね」

わる子ブルーは、30を強調して言つたさ。

「30代は……おっさん……」

わる子レッドが言つたよ。

「おっさんだつたんだな」

かみ締めるようにわる子ブラックが言つた。

「おっさんだあ！」

力強く言つたのは、わる子イエロー。そして最後に残念そうな表情で、わる子ピンクが言つたんだ。

「おっさんなのよねーえ」

「うわああああっ！」

ひざ立ちになっていたアイドル怪人は、地面に両手を突いた。

「僕は……僕はっ！」

「だから、おっさん」

わる子レッドが無表情で言つたよ。

「アイドルの命って短いよね。打ち上げ花火みたいに。ファンに

とっては、アイドルって青春の通過点なのかなあ」

しみじみと言うわる子ピンク。

「なんかたそがれていますねー」とわる子ブルー。

「うん。なんだか熱病から覚めたような……でもいい思い出よね！」  
わる子ピンクはそうそうに元気を取り戻していたよ。そのうち突っ伏したアイドル怪人の体から、グレーの煙みたいなものが出てきて、レンジャーたちは、はっと目を見張った。グレーの煙の中にレンジャーたちを見据える鋭い目があった。

「この青年のアイドル性が、我らのエネルギーだったのに……。かくなる上は利用の価値なし！」

エコーがかかったみたいな声が、空から降ってきた。アイドル怪人はいつの間にか、普通のセーターとGパン姿の平凡な青年に戻ってる。一方で、パアツ！とグレーの煙は四方にはじけ、ついに大トロ口が姿を現した。わる子レッドは、すばやく弓を取り出し、矢を射たんだ。けれど、矢はむなしく大トロ口を通過するだけだ。

「諸君。また会おう！」

大トロ口は、筆を取り出すと、宙に大の字を書いた。

「さらば！」

大トロ口は、大の字の中にゆるーんと吸い込まれていった。大トロ口が吸い込まれた後、描かれた大の字の中にさざれ波みたいなものが映っていたけれど、やがてそれはだんだん小さくなって、ふっと消えた。あとに残された憑き物が落ちてしまったたつくんは、がっかりとうな垂れている。

「僕は、これからどうしたらいいんだろう……」

さすがにレンジャーたちは、同情した。だって、たつくんはこれから家族を養っていかなくてはならないんだからね。

\*\*\*

一カ月後。 おしゃれピグと食いしん坊ピグが喫茶『黒ばら』に向かう途中。

「おしゃれピグさーん。食いしん坊ピグさーん」

二人を呼ぶ声がするんだ。すぐくよくよく通る声だ。おしゃれピグと食いしん坊ピグが振り向くと、そこにはなんとたつくんがいたんだ。たつくんは、ねじり鉢巻にエプロン姿でラーメン屋の屋台の向こうにいたよ。

「わあ！ たつくーん」

おしゃれピグは、手を振って駆け寄っていった。食いしん坊ピグも匂いに誘われて屋台に走って行ったよ。

「色々考えて、お店を出そうと思って。だからまず開店資金を溜めるのにラーメン屋をする事にしたんだ」

たつくんは、にこにこしながら言ったよ。

「君。ラーメン屋さんになったんだね。僕にラーメン作って！」

食いしん坊ピグは大喜び！

「じゃあ、私も」

「へい。まいど」

たつくんは、生麺を二玉手に取ると熱い湯の中にはつりこんだ。おしゃれピグと食いしん坊ピグは木製の長椅子に座って、たつくんの鮮やかな手つきに見入っているよ。やがて、二人の前にとんとラーメンが置かれた。

「おいしい！」

あつという間に食べてしまい、汁まで全部飲み干す食いしん坊ピグ。

「ほんと！ おいしいわー」

熱いラーメンをふうふうしながらちよつとずつ、口に入れるおしゃれピグ。

「だって、元々僕はお料理専門学校に通っていたんだからねー」

資金が溜まったたら、奥さんと一緒にカフェ風のラーメン店をオープンするつもりなんだって。

「そのカフェが気になりますねー」

喫茶『黒ばら』のハムちゃんのマスターが険しい顔をしている。

「大丈夫よー。たつくんの出すお店は、ラーメンをカフェ風のお店

でってアイディアなの。メニューはかぶらないわ」

カウンターには、たった今、ラーメンを食べてきたおしゃれピグと食いしん坊ピグが座っているよ。

「それならいいんですけど。うーん。あっちのほうが男前だからですわね……」

手鏡を覗き込むマスター。

「マスターもいい男よっ！」

おしゃれピグは、ウインクしたよ。

「そっ、そうですかあー」

手鏡を持った手をおろし、おしゃれピグの方に向き直るマスター。

「うん。マスター。いい男！」

テーブル席に座っていたわる子、わるお、天才ピグも調子を合わせて言ったよ。

「みつ、皆さん。今日のコーヒーは、私のおごりですよっ！」

マスターが叫んだ。

「やったあ〜！」

食いしん坊ピグは大喜びだ。喫茶『黒ばら』の店内には、わる子達の楽しそうな笑い声が響いていたよ。

## 5・シスターロボットの甘い誘惑（前編）

アイドル怪人以来、わる子達の町には平和な日々が続いていた。わる子達は、『黒ばら』でお茶していたよ。

「はぁー」

喫茶『黒ばら』のハムちゃんのマスターがカウンターの向こうでため息を吐いた。

「少なくともあれで5回目だなー」

食いしん坊ピグは、カウンターのほうを見ると、口をもぐもぐさせながら言ったよ。

「いったいどうしたの？ マスター」

同じテーブルについているわる子が聞いた。

「マスターは、お嫁さんが欲しいんですって」  
代わりにおしやれピグが答えたよ。

「は？ お嫁さん……」

わる子はびっくりさ。無理もないかもしれない。マスターは、ハムスターだからわる子達よりも体は小さめだけど、もう大人なんだ。長い間、一人で『黒ばら』を切り盛りしてきたんだからね。どうやらマスターは、前回、わる子達が戦った元アイドルのたっくんが、家庭を持っていた事に影響を受けたらしいんだ。自分も家庭を持ちたいってね。

「マスター！」

天才ピグがカウンターに座り、マスターに呼びかけたよ。ひじをついて、ため息ばかり漏らしていたマスターはその声にちょっと我に返ったみたい。

「天才ピグさん。ナンデスカー？」

「マスター。お嫁さんが欲しいんなら、旅ハムさんに写真を預けたらどうだろう？」と天才ピグ。旅ハムって言うのは、旅をして歩く習性のあるハムスターで、色んなものを売り歩いてるんだ。とって

も顔が広いから、最近はお見合いの仲介などもしているらしい。

「旅ハムさん？」

「お見合いを100組もまとめている凄腕の旅ハムさんもいるらしいよ」

「お見合いですかー？」

マスターは目をぱちくりしている。

「いいね！ それ」

わる子は目を輝かせたよ。

「マスター。いつちやえ！」

食いしん坊ピグも盛り上がってる。

「そうですねー」

マスターは、腕を組んで首をかしげたよ。

「薬売りの旅ハムさんなら、毎月この町にくるよね！」

わるおが言うと、おしゃれピグは目を輝かせた。

「じゃあ、その薬売りのハムさんに聞いてみたらいいじゃないの」

\*\*\*

一週間後。喫茶『黒ばら』に薬売りの旅ハムさんがやってきたよ。

「じゃあ、お使いいただいた傷薬と頭痛薬の代金をいただいて……

薬を補充していきますよー」

薬売りの旅ハムは、手馴れた調子でジェルミンのケースから薬を取り出すと、マスターの薬箱に補充していった。

「ねえねえ。旅ハムさん」

作業が終わったところでマスターは切り出したよ。

「ナンデスカー？」

「旅ハムさんは縁談をまとめているんだよね」

旅ハムは、おやといった表情で言った。

「そうですね。もしかしてマスター？」

「うん。うん。どこかに気立てのいい女の子はいないかなあ」

「それなら任せてくださいよ」

旅ハムさんは胸を叩いて言ったよ。それをマスターは頼もしげに



見ている。

「まずは、マスターの写真が必要なのです」

「うん。うん」

「このケータイで顔写真と全身写真を撮って、プロフィールと一緒に『ハム良縁センター』にメールで送るんです。だから今すぐに来るんですよ」

「なるほど！」

マスターは、そのシステムに感心したみたい。旅ハムさんは、何枚もマスターの写真を撮ったよ。それからマスターのプロフィールや希望条件を打ち込み、あつという間にメールを送信したんだ。旅ハムさんは、では！と去って行ったよ。その後姿をマスターは半信半疑で見送ったんだ。

翌日、オープン間もない「黒ばら」に再びハムちゃんがやってきたんだ。

「マスター！ さつそく候補者がいましたよー」

マスターはびっくりき。なんて早いんだろう。こんなことならもっと早くにお願いしたら良かったかもって思ったよ。

「このハムさんが、マスターと趣味がぴったり一致したんですよー」  
旅ハムさんは、マスターに携帯を差し出したよ。マスターは、その携帯の画面を食い入るように見つめた。それはキュートな感じの可愛い女の子だった。見事にマスターのツボにヒットしたんだ！

「このハムさんは、マスターに会ってもいいと言ってます。マスターはどうします？」

マスターは二つ返事で、「あうあう……」って、言っていたよ。上機嫌で、旅ハムさんにコーヒーをサービスしたもののさ。

「これ、紹介料とか要るの？」

「いえ。サービスですから……。もし結婚までたどり着いたら、必要な物は旅ハムから買って欲しいですね」

旅ハムさんは、早速、初回のデートの段取りをしてくれた。

\*\*\*

喫茶『黒ばら』も今日ばかりは臨時休業。マスターは、待ち合わせの公園に出向いたよ。やがて、公園の時計台の下のベンチにメールの写真と同じ顔の女の子がやってきた。

「はじめまして。りぼんハムと言います」

女の子は、つぶらな眼をぱちぱちさせて言い、マスターもすぐに自己紹介をしたんだ。それからお茶をして、映画を観て……食事にしかけたけれど、趣味がぴったりと合つてすごく楽しいんだ。マスターは、すっかりりぼんちゃんに夢中になってしまった！ それ以来、喫茶『黒ばら』は、しばしば臨時休業をするようになったよ。

「なんだか、最近、臨時休業多くない？」

わる子が言った。みんなは、『黒ばら』が使えなくて、わる子の家に集まっていたよ。

「マスターは、旅ハムさんに女の子を紹介してもらったようだね……だって、この間、遊園地でマスターに会ったんだよ！」

食いしん坊ピグは話し始めた。

「僕が、ホットドッグを食べていたら、マスターが女の子を連れて買いに来たのさ」

「へえ〜。マスターにもいよいよ春が……」

おしゃれピグは楽しそう。

「どつりで臨時休業が増えたわけだ！」

言いながらわるおは、ひよいと菓子器のピーナツチョコレートを口に放り込んだ。食いしん坊ピグは、それを横目で見ながら、自分の分のお菓子をとりよけたよ。

「それが……わる子ちゃん。なんだか怪しい雲行きになってさ」

険しい表情で、話す天才ピグにみんなの関心が集まったさ。

「俺がマスターに話を振っておいて、ひっじょおーに申し訳ないんだけど」

「どうしたの？」

おしゃれピグは天才ピグの顔を覗き込むようにしたよ。その時、天才ピグの携帯が2〜3コール鳴って切れたんだ！

「あ……。インピグ博士からだよ。みんな研究所に行こう！」  
天才ピグは、携帯画面に目を落とすと、そう言った。

\*\*\*

「やあ。やあ。諸君」

カプセルの中には、立体映像の博士がソファに座り、待機していた。

「博士。今度の事件は何？」

早速わる子は聞いてみたよ。

「うん……。まず映像を観てもらおうか。天才ピグ君。アシスタントを頼むよ」

博士が映像を映すように手を指し示すと、天才ピグは、言われたとおり機械を動かし始めた。真っ白なスクリーンに間もなく映像が映し出された。行商の旅ハムの姿が大写しになった。

「これは……。旅ハムさんよね？」とおしゃれピグ。

それに答えるようにインディアンピグ博士の合いの手が入ったよ。  
「諸君も知つてのとおり、旅ハムの行商は我々の生活に深く根付いている」

「そうそう。おやつに不足した時に、どっかで旅ハムさんに会わないかって探しちゃうもの」

食いしん坊ピグが楽しげに言ったよ。

「私は、インピグデパートに売っているのと同じお洋服を旅ハムさんから5%引きで買ったのよ」

おしゃれピグも嬉しそう……。

「旅ハムさんは、もう全国津々浦々まで回っているよね」とわるお博士。また大トロが絡んでいるのでしょうか？  
今回は旅ハムに目をつけたって事？」

わる子も言ったよ。

「そう！ 今回、大トロは旅ハムのネットワークに目をつけたのだ」  
先ほどから聞いていた天才ピグの表情が苦しげなものに変わったよ。  
ぶるぶると震えているんだ。

「もしかして……。天才ピグちゃん」

おしゃれピグが天才ピグの顔を覗き込んだよ。

「もしかして……」

わるおがつぶやいた。レンジャーたちみんなに真つ先にマスターのお見合い話が浮かんださ。

「大トロ軍団は、自分たちの手先のハムちゃんと善良な市民を縁結びして、その勢力を拡大しようとしている」

博士の話は、核心を突いたよ。

「そう言うことか……」

食いしん坊ピグも考え込むように腕組みをしている。

「俺が、縁談話をマスターに教えなければ……」

天才ピグは、うなだれていた。

「いや、必ずしもそうとは限らない。元々、旅ハムさんたちは、縁結びを副業にしていたからね」

博士は言ったけれど、天才ピグは、大層責任を感じているようだ。

「マスターの相手も大トロの手先かもしれないって言うの？ そんなの限らないじゃない」

おしゃれピグは、かばうように言った。

「可能性は、あるんだよなあ……ちよつと偵察してくるよ！」

わるおは、そう言う和高く飛び上がって姿を消した。

（シスターロボットの甘い誘惑（後編）に続く）

## 6・シスターロボットの甘い誘惑（後編）

喫茶「黒ばら」は、今日も臨時休業だった。

「あははは……」

「ふふふふ……」

マスターとりぼんハムちゃんは、二人海岸で戯れていたよ。

「ほつら捕まえてごらん」

先を走るマスター。

「待ってえ」

その後を追いかけるりぼんハムちゃん。でもハムちゃん族の短い足では、海岸を上手く走ることは出来なくて、マスターはこけてしまった。慌てて駆け寄るりぼんハムちゃん。

「マスター大丈夫？」

マスターはひざ小僧をすりむいていたよ。りぼんハムちゃんは、自分のハンカチを取り出すと、やさしくお手当てしてあげている。うつとりと、りぼんハムちゃんを見つめるマスター。

そんな二人を松の木の枝に座り足をぶらぶらさせながらわるおが見ていたのさ。

「おい。おいおいおい……。マスター。見ちゃいられないなあ！」

わるおはつぶやいた。だけど……。よく見ているとマスターの様子が変なんだ。わるおは、目を凝らしたよ。マスターは、立ち上がるうとしていてけど、またばったりと倒れてしまう。りぼんハムちゃんは、助け起こすどころか、冷やかにマスターを見下ろしているんだ！ わるおは、他のレンジャーたちに手早く連絡を済ませると、マスターの元に走ったよ。

「マスター！ どうしたんだ」

かがみこんでマスターを起こそうとするわるお。

「わ、わるおさーん。どうしたんでしょうね……。何だか体に力が入

らなくて……」

「ふ……あははははは！」

りぼんハムちゃんが高らかな笑い声を上げ、わるおは背後を振り返った。

「ふん。バカな男……。あなたは、レンジャーたちをおびき出すための道具に過ぎなかったのよ！」

「お前……マスターに何をしたんだ」

りぼんハムは、鼻で笑ったよ。

「ちよいとハンカチに薬を塗っておいただけよ。早く手当てしないと、明日には死ぬわよ」

マスターの絶望的な表情にりぼんハムちゃんの高笑いが響く。マスターを担いで、病院に連れて行くこうとするわるおの前に腕組みをしたりりぼんハムが回り込んで立ちあはだかった。

「駄目よ。私を倒してから行きなさい」

わるおは、りぼんハムを見上げ、思いつきり睨みつけたよ。そこにわる子とおしゃれピグと食いしん坊ピグがやってきた！

「わるお！ どうしたの？」

駆け寄るわる子。

「マスターが、毒を塗られて……すぐに病院に！」

わるおは、それだけ叫ぶと高く跳躍し、空中で一回転したよ。着地したわるおは、すでにわる子ブラックに変身していた。わる子ピグとわる子イエローがマスターを担いで立ち去って行く。その先にはなんと！ 救急車が待機していたよ。救急車の助手席から飛び降りたのは天才ピグ。天才ピグは、りぼんハムの手口を分析してマスターに危険が迫っている事を察知したらしい。

「ふん。手回しのいい事！」

りぼんハムは、憎憎しげに毒づいたよ。天才ピグは、救急車にマスターを任せると、海岸に走ってやってきた。途中、側転をして着地すると、わる子ブルーに変身していたよ。わる子は、その場でスピンをするように回るとわる子レッドに。食いしん坊ピグとおしゃ

れピグは、同時に跳躍した。ひざを抱え込むようにまわった食いしん坊ピグは、わる子イエローに。バック転したおしゃれピグは、わる子ピンクに変身したよ。わる子達は、体に回転を加えると、レンジャーに変身できるんだね。その様子を見たりぼんハムは、海に向かつて「シスター！」と叫んだよ。すると海の中から、りぼんハムちゃんをかたどった巨大なロボットが出現したんだ！パカンとロボットの頭のでっぺんの蓋が開いて、りぼんハムはそこに乗り込んだ。

「げげっ！ あんな大きなロボットじゃ太刀打ちできないよ！」とわる子イエロー。

「大丈夫。ちゃんと手は打ってあるから……」

わる子ブルーはパチンと指を鳴らしたよ。ゴゴゴ……と地響きがしたかと思うと、なんと！砂の中からピグロボットが出現したんだ。

「乗って！」

わる子ブルーに促され、レンジャー達はピグロボットに乗り込んだよ。わる子ブルーは、操縦席に座ると、手袋をはめサングラスを装着した。わる子レッドたちは固唾を呑んで見守っている。わる子イエローだけは、余裕でバナナを食べていたけどね！りぼんハムは、早速攻撃してきた。シスターロボットの両の目からビーム発射わる子ブルーは、器用にピグロボットを操り、ひよいと身かわした。ビームの当たった松の木はさつき、わるおが腰を下ろしていた木だ。それは、根元から真っ二つに裂けて、燃え上がった。

操縦かんを握るりぼんハムの口元がにやりとしたかと思うと、シスターロボットがピグロボットを指差したんだ。すると！人差し指から銃弾がたて続けに発射された！あっと言う間にピグロボットの胴体に小さな穴が沢山開いたよ。

「ねえ！このままじゃやられちゃう。こっちから攻撃は仕掛けないの？」

おしゃれピグは、不安そうだ。

「大丈夫だよ。わる子ピンク。これから逆襲だ」

わる子ブルーは、中央にあるレバーを思いっきり引いた。わる子レッドは、操縦席の中のモニターテレビを見ている。モニターテレビには、ロボットの内部にはわからない外の様子が映っているんだ。ピグロボットのお腹の扉がパカン！ と開いたかと思うと、2本の腕が出てきた。

「よーし。波動！」

わる子イエローが、叫ぶ。お腹から生えている二本の腕が手の平をシスターロボットに向けた。その瞬間、なんとも言えない神々しい光がシスターロボットを包み込んだよ。シスターロボットが苦しんでいる。拡声器越しにりぼんハムの苦しむ声が響いてきた。

「手の平に宇宙のエネルギーを集約して、シスターロボットに当てているんだ。これは物凄いエネルギーなんだけれど、一点にしか効かないんだ」

わる子ブルーが解説したよ。

「うん。そりゃ、地球に優しい攻撃だねえー」

わる子イエローは2本目のバナナを食べていた。やがて全身を黄色い光に包まれたシスターロボットは、次第に膨張しはじめたよ。そして膨張が限界を迎えたところで爆発してしまっただ。ロボットの消えた後の砂浜には、やけどを負ったりりぼんハムが倒れていた。レンジャーたちもまたロボットを下りて、りぼんハムに近づいて行ったよ。りぼんハムは、砂浜にひざまずくと、両手を一杯に空に向かって広げ、口をぱくぱくさせると、「大……トロ……マンセー！」とひと言。次の瞬間、自爆したんだ。

砂浜には、もうりぼんハムの形跡は何も残されていない。二つに裂けて燃え上がった松の木だけが、戦いの余韻を残していたよ。

「てごわい奴だったね……」

わる子イエローがわる子ブルーを見やった。

「うん……」

わる子ブルーがうなずく。



\*\*\*

手術室から、マスターを乗せたストレッチャーが出てきた。心配そうに駆け寄るわる子たち。

「大丈夫ですよ。2、3日で歩けるように、一週間もすれば運動だつて出来ます」

医師の言葉に、おしゃれピグはほつと胸を撫で下ろしていた。かくて、マスターは自宅療養の後、お店を再開したよ。わる子たちが遊びに行くと、マスターはいつもの調子で出迎えてくれるけど、やっぱり少し元気がないんだ。学校帰りにわるおと天才ピグは、「黒ばら」にやってきた。でも「黒ばら」に臨時休業の札が下がっていたんだ。

「マスター。どうしたんだろう」

もうすっかり、傷は治ったはずなのに。もつとも心の傷は癒えてないみたいだけど。わるおは、心配になったよ。

「きつと、旅に出たくなつたんだよ」

天才ピグには、マスターの気持ちがわかるみたいだったよ。そこに天才ピグの携帯が鳴った。インピグ博士からの呼び出しだ。

\*\*\*

ここは、インピグ研究所。

「諸君！ 大トロの本拠地は、『ハム良縁センター』だ。間違いない」

「え？ りぼんハムの陰謀が崩れたのに。アジトを変えないんですか」

わる子は、不思議に思った。何故って大トロは手を変え品を変えて自分たちを攻撃してくると思っていたからさ。

「表向きはあくまで、『ハム良縁センター』なんだ。それは、雇われているハムたちも気づいていない。旅ハムさんも騙されているだけに過ぎないのさ」

「そうだったのか……」

深くうなずく、食いしん坊ピグ。

「今度こそ……敵地に乗り込んで、奴らの息の根を止めてほしい」  
博士の命令におしゃれ。ピグの心は躍ったよ。

「いよいよ、本拠地を攻撃ね！」

「敵地に潜入か……。何が出てくるか……。」とわるお。

「うん。充分、作戦を練らないとね」

食いしん坊ピグは、菓子パンをかじっている。レンジャー達は、  
早速作戦会議に入ったよ。

その頃。マスターは、思い出の海岸近くに来ていた。

海に半分沈みかけたオレンジ色の夕日に照らされながら、国道を  
一人バイクでひた走っていたよ。悲しくて悔しくて、涙が風に干切  
れていく。でもこんな思いをするのも今日までさ。ひとしきり走っ  
たら、明日からは、また元気でお店に立とうとマスターは、誓った  
よ。

## 7・敵陣に潜入せよ

ハム良縁センターは、まあいいピンクの建物。玄関にはアーチがかかっている、バラの花が飾られているよ。

中に入ると、フロアーにはご成約カップルの披露宴の写真が飾られているんだ。館内全体には、リラックスできるアロマの香りも漂っていて、相談者はゆったりとした応接セットの椅子で、話ができるようになってるよ。

登録は、良縁センターに直接来てもいいし、携帯からだって構わない。三人までなら、無料で紹介してくれる。けれど何人でも無制限に紹介して欲しいときは、ハートフル会員と言って、有料になるんだ。

こんな風にとても雰囲気の良いサロンみたいなハム良縁センターなんだけど、そこで働くハムちゃんたちのデスクは、一変して端末の機械が沢山並んでる。ハム良縁ネットをつかさどるホストコンピュータがあったりね。職員のハムちゃんたちは日々、カップリングにいそしんでいるよ。

「ねえ。私に合う人、誰かいないかしらね！」

受付にやってきたのは、気取りハムちゃんだ。一瞬、おしゃれピグの眉がびくつと動いたよ。実は、おしゃれピグは、ハム良縁センターの秘密に迫るためにこっそリアルバイトとして潜入していたんだ。なんだか、気取りハムの身なりに自分と共通するものを感じたんだよねえ。気取りハムは、ちょっぴりフリルの入ったデザインのワンピースに青い花の髪飾りをつけて、ポシエットを斜めにかけているよ。

受付のハムは言ったよ。

「あらあら。気取りハムさん。この間の方はどうしたんですー？」

「なんかね。あーんまり合わなかったのよねえ」

「少し、お付き合いしてみたらいかがですー？」

「そんな事言ったって、一回会えばわかるわよ。また会って期待を持たせるのもね！私、ハートフル会員だから、何人でも紹介してくれるでしょ」

「それはそうですけど……」

職員のハムちゃんは、奥に引っ込んで、はあとため息をついた。「どうしたんですか？」とおしゃれピグ。

「あの人。常連さんなんです。誰を紹介しても気に入らなくて、ちよつとわがままなんです。まあ、会費を払ってもらってるから、良いんですけどね」

気取りハムちゃんは、結構、可愛い子だった。頭が良くて、性格が良くて、お金持ちの男の人と結婚してセレブな暮らしがしたい人だった！ そんな人にリアルでは出会えないから、ここに登録をしているらしいよ。気取りハムちゃんは、毎週のようにやってきては、誰か紹介してくれって言ったよ。おしゃれピグは、そんなに虫のいい話って思ってたけど、お金をもらっている会員さんだから、むげにはできないよね！

\*\*\*\*\*

ここは喫茶「黒ばら」わる子ちゃんたちが集まっていた。

「ねえ。おしゃれピグ一人潜入させて大丈夫かな？」

わる子は、カウンターで頬杖突いて心配そうだ。

「もうすぐハム良縁センターでは、5周年記念パーティーが開催される。インピグ博士は、おしゃれピグを潜入させるのをそれにぶつけたんだ」

天才ピグは、平然とPCを叩いている。何故って、天才ピグのPCには、しばしばおしゃれピグから写メが送られて来るんだ。PCには、『インピグ博士特製CADシステム』が表示されていたよ。写メの写真をもとに3D図面化して、隠し扉や地下室の可能性を計算して割り出すんだね。PCの中には、今までの怪人の攻撃パターンなどの大トロ軍団のデータがすべて入っているよ。

天才ピグには何か考えがあるのか、せっせとPCを操作していた。

人が集まる場所……パーティーで何かが起こる！？　って、わる子は察知したよ。

だって、ハムちゃんたちを洗脳するのに絶好の場じゃないか。

\*\*\*\*\*

ハム良縁センターでは、5周年記念パーティーが開催されていたよ。ここでは、毎年、成約したカップルを招待して、パーティーを開いているんだ。

今年は、開設してから丁度5年のキリのいい数字なので、より盛大に行っている。ハム良縁センターには、温泉の大広間みたいなお部屋があつて、会席料理の支度がされていたよ。出席しているのは、めでたくカップルになったハムちゃん達やハートフル会員たちで、中には、気取りハムの姿もあつた。お食事が中盤にさしかかると、司会ハムちゃんの進行に合わせ、スペシャルゲストの登場だよ。舞台の袖から現れたのは、なんと元アイドルのたつくんだ！　場内は、騒然さ。女性のハムちゃん達が、キャーキャー言ってる。だんなさんたちは、仕方ないなって渋い顔さ。

「みなさん。こんにちは！　元アイドルのたつくんことタツヒコです」

たつくんの本名はタツヒコって言つたんだね。客席のあちこちら、「知ってるわよ！」って、声が飛んだよ。

「今は、ラーメンカフェを経営しています」

たつくんのラーメン屋さんには、すっかり軌道に乗っている。元アイドルだったお陰で、あつという間に火がついたんだ。たつくんは、お料理学校に行っていたから、味も折り紙つき。行列がつくのも当たり前だよ！

「いいわよねえ。たつくん。かつこいいし、ラーメン屋がすごく繁盛してお金持ちだし。たつくんみたいな人なら、おっさんでも文句言わないのに。でもたつくんは結婚してるんだよね。残念だわ……」

気取りハムちゃんは、長机にひじをついて、ため息を漏らしたよ。

「もう僕もすっかりおっさんです」

「そんなこと、ないわ」とか、「たっくん、カッコいい！」って言葉がまたまた客席から投げられる。たっくんは、会場を見渡して微笑んだ。

「今日はおっさんパワーで頑張ります！」

たっくんはそれだけ言うと、往年のヒット曲を次々に披露していた。アイドル曲をロックテイストにアレンジして、スタンドマイクを蹴り倒して熱唱しているよ。その歌声には、アイドル時代にはなかった厚み加わって、なんとも渋いんだ。たっくんは、今でも誘われてたまにライブハウスやなんかで歌っているんだよ。みんなが食い入るようにステージに見入っている中、お料理のお皿を片付けていたおしゃれピグはふと廊下にいた料理長に目を向けた。やたらときよるきよるしていて、挙動不審なんだ。なんだか、怪しい。やがて料理長は、懐から白い粉を取り出すと、コーヒーポットの中を開けたじゃないか！ おしゃれピグは、料理長の前に立ちほだかっただ。

## 8・おしゃれピグの失踪

「見たわよ。今のは何？」

料理長はおびえの色が隠せなかったよ。だけどね。その時、おしゃれピグは料理長の挙動不審な態度に気を取られて後ろに気が回らなかつたんだ。

背後に黒い影が忍び寄ってきたかと思うと、手刀でおしゃれピグを打ったよ。おしゃれピグは、ばたんとその場に倒れこんで気を失ってしまった。

後ろに立っていたのは、なんとセンター長じゃないか！ 料理長とセンター長は、顔を見合わせてにやりと笑うと、二人がかりでおしゃれピグを担いで行ったよ。おしゃれピグのピンチだ！

\*\*\*\*\*

その頃、喫茶「黒ばら」では、カウンターに腰を下ろした天才ピグが首を傾げていたよ。

「おかしいぞ。おしゃれピグの通信が途絶えた……」

天才ピグは、何度もPCの画面を覗き込んでいる。

「出動しよう！」

天才ピグがつぶやく。

「畏かもしれないよ？」

カウンターの隣でバナナを食べながら、食いしん坊ピグが言った。

「行かないやならないだろう。たとえ畏でも……」って、わるお。

わる子が天才ピグに聞いたよ。

「会員制のパーティーにどうやって忍び込むの？」

「それはね……」

天才ピグはにっこりとわる子を見たよ。

「俺は、一足先に行ってるよ」

わるおは、その場でジャンプすると姿を消した。

会場は、すっかり盛り上がり、出来上がっている。お酒が飲めないハムちゃんたちも、こどもビールで雰囲気を出しているよ。たつくんライブは終わったけれど、興奮はまだ冷めていないみたいだ。

ジャンジャンジャン……

そこに遠くの方から津軽三味線の音色が聞こえてきたよ。

ジャンジャンジャララン……

三味線の音色は次第に大きく、激しくなってくる。会場がざわざわとしてきた。

ジャジャジャンジャジャンジャン……

三味線の音色が最大になったかと思うと、ふすまがパァンと二つに割れた。ふすまの向こうから登場したのは……なんと、着物姿のわる子だ。

わる子は、三味線の演奏を続けたまま、体を左右に振りながらゆつくりと客席に歩いて行った。そのまま各席を回って歩く。お客さんと目が合つと、うんうんとうなずくようにして、さらに強く三味線を演奏したよ。

「わる子流家元、わる子さんの三味線の生演奏です」

場内にアナウンスが流れたよ。

「なかなか、いいじゃん」

気取りハムは大喜び。会場みんなも聴き入っているよ。とにかくハムたちは、歌も楽器も含めて音楽が大好きなんだ。ハム良縁センターの係員たちは、おいおい……こんなプログラムのあったか？ って、係員同士で話している。けどお客さんは喜んでいて誰も迷惑をしていないから、雰囲気壊すわけに行かなくて黙っているしかなかったよ。

ジャンジャン……

激しく三味線がなり続ける中、わるおは天井づたいに会場内を調



べてまわっている。食いしん坊ピグは、ハートフル会員の席に紛れ込んで、ちゃっかりと食事をしているよ。勿論、食べてるだけじゃなくて、わるおが会場の内部を調べているとしたら、食いしん坊ピグは客のふりをして、おしゃれピグを探しているんだよ。でもどれだけ探してもおしゃれピグは、見つからないんだ。

「おい。セクター長を見なかったかい？」

出入り口近くで、係員のハムちゃんたちが小声で話している。

「そう言えば、さつきから姿が見えないのよ」

「おかしいなあ。締め挨拶してもらわなきゃいけないのに……」

食いしん坊ピグは、じいいとそのやり取りを聞いていたよ。何かおしゃれピグの行方不明と関係があるんだろうか。

## 9・最後の戦い

やがてわるおは廊下に落ちている貝殻のボタンを発見した。わるおは、天井から廊下に降り立つと、ボタンを拾い上げた。それは、紛れもなくおしゃれピグの洋服についていたボタンだったよ。廊下の一方は、厨房。もう一方は、玄関先のフロアに直結しているよ。どうやらおしゃれピグは、ここで拉致られたらしい。そこに満腹と言いなながら、食いしん坊ピグがやって来たよ。食いしん坊ピグは、わるおを見つけると走りよってきた。

「わるお。何か手がかりはつかめたのかい？」

わるおは、黙って食いしん坊ピグの目の前にボタンを示したよ。

食いしん坊ピグは、ボタンから視線をずらすとわるおに言った。

「センター長の姿が見えないらしい。おしゃれピグがいなくなったことに一枚かんでいるのかもしれないね」

わるおがびつくりしたように食いしん坊ピグを見た。

「そうか……」

センター長の行方を捜すことがおしゃれピグ搜索の近道かもしれない！

天才ピグが、堂々と廊下を歩いてきたよ。小脇に抱えたPCを開くと、センター内部の図面が現れた。天才ピグはその中のある一点を指し示したよ。

それは、今までおしゃれピグからいろんな写真が送られてきた情報を取り込んだ『インピグ博士特製CADシステム』の威力だった。会場に設置された舞台裏の不自然に置かれたキャビネットをずらすと、向こう側には小部屋があったんだ。天才ピグとわるおと食いしん坊ピグは、PCの指し示す小部屋に乗り込んだ。挨拶に出ようと小部屋から出ようとしていたセンター長と鉢合わせた。

「やっつ！ 何奴……」

「焼豚戦隊わる子レンジャー！」

そう叫ぶとわるおは、バック転すると、わる子ブラックに変身したよ。食いしん坊ピグは、バナナの皮をむいて中身を宙にほうるとジャンプして回転しながらばくついた。

「わる子イエロー参上」

手にはバナナの皮を持ったままだ。センター長は、すっかりその様子に気を取られている。その間に天才ピグは、素早く部屋の中に入り込んだ。センター長が出て行こうとした小部屋の中には誰もいない。天才ピグは、おしゃれピグの椅子にくくりつけられた縄を解き、猿ぐつわをはずしたんだ。おしゃれピグは、二三度呼吸をして息を整えると言ったよ。

「センター長と料理長はぐるよ。会員を洗脳しようとしていたの。デザートのコーヒーの中に怪しい薬を混ぜてね」

「曲者！ 曲者が現れたぞ」

センター長が大声で叫ぶと、黒タイツ姿の大トロ一味がどこからともなく現れた。みんな「ほう！」としか叫ばない。おしゃれピグは、アイススケートみたいにしてその場でスピニングして、素早くわる子ピンクに変身したよ。

戦いが始まった。

狭い小部屋を出て、大トロ一味は、会場にまで飛び出してきたよ。わる子イエローと天才ピグは、二人がかりで会場のお客さんたちを避難させている。お客さんを後ろから追い立てているわる子イエローを一味が追ってきた。そこでイエローは、ずっと持っていたままのバナナの皮をアンダースローで投げたんだ。先頭を追いかけたきた一味の一人がバナナの皮でツルン！ って滑ったよ。そしたらうしろの一味が将棋倒しになって、ばたばたといっせいにひっくり返ったんだ。わる子ピンクの特殊合金ランプが、空を舞っている。黒タイツ軍団の一人の顎の下すれすれにランプが直撃すると、それを避けようとして体勢を崩した一味が後ろ向きにひっくり返るんだ。

三味線を持ったわる子に、黒タイツが後ろから襲ってきた。肩越

しに気配を感じたわる子が三味線の柄で、敵の鳩尾を打った。うつと叫んで、敵はうづくまって倒れたよ。

ジャンジャン……

わる子は、着物姿のまま、ジャンジャンと三味線をかき鳴らしながら黒タイツ一味に向かつて歩く。そして時折演奏をとめると、五月雨式に襲い掛かる黒タイツを三味線で打ったんだ。お客さんを避難させようとしている天才ピグの後を追う黒タイツの姿を見るや、わる子はハアッ！ と持っていたばちを投げたよ。ばちに足元をすくわれた黒タイツはその場にひっくり返った。わる子ブラックは、側転やバック転を織り交ぜながら、黒タイツ軍団の間を縫うように動いている。騒ぎを聞いて現れた料理長は戦いのプロではないようだ。ブラックに後ろ手に腕をひねり上げられて、がっくりとたたみの上に膝を落としたよ。料理長は、重要参考人だ。気絶させては話が訊けなくなるからね。やがて、会場内は倒れた黒タイツ軍団でいっぱいになった。

残るはセンター長だけだ。しんと会場が静まり返る。

「もはやこれまで……」

センター長が天才ピグに襲いかかろうとしたその時。

「やめて！」

会場内に良く通る声が響いた。見ると廊下から一人の少年が会場に入ってきたよ。

「ロビン……！ ロビンじゃないか」

天才ピグが少年に呼びかけたよ。少年は、天才ピグを見ると微笑んで歩み寄ってきた。少年の栗色の髪がさらさらと揺れている。とび色のパッチリとした瞳。肌の色は他のハムちゃんたちよりも透明感があつて、このロビンと呼ばれたハムは大層美少年だった。背丈は、天才ピグよりも一回り小さい。このルックスでこんな場所にいるのは適当じゃない。本来ならば少年合唱団の最前列あたりにいるべきだろうなんてわる子は思ったさ。まさにそんな場所の方が似合いそうなタイプだったんだ。天才ピグとロビンは、少し距離を置

いて向かい合わせに立つ形になったよ。

## 10・大ト口の正体

「お兄ちゃん！」

少年は叫んだ。

「ロビン。久しぶりだね」

「うん。だってお兄ちゃんが大学の研究室に入ってから、全然会っていないもん」

「そうか。じゃあ3年ぶりかな」

「そうだよ」

ロビンは元気よく言った。わる子たちは、わけわかめさ。大ト口の黒幕がこの少年だって言うんだろうか。じいっと見ているわる子たちを振り返って、天才ピグが言った。わる子たちの考えている事を察したようだ。

「違うよ」

天才ピグは、それだけ言うと、ロビンに向き直った。

「風邪ひき怪人やアイドル怪人は、ロビンの仕業だったんだね」

「そうなるんだろうね」

ロビンはクスリと笑ったよ。わる子たちは黙って天才ピグとロビンのやり取りを聴いていた。それは、センター長や料理長も同様だった。

「ロビン。いったいどうしてこんな事になったんだい？」

「ボクは、お兄ちゃんに遊んで欲しかったんだよ！」

「あ、あそんでほしかったあ！？」

天才ピグ以外のレンジャーたちが声を揃えて叫んだよ。

「うーん。構って欲しかったって言うか、認めて欲しかったって言うか。だってお兄ちゃんは大学に行く為に引っ越してそれっきりだったじゃないか。昔はよくお勉強も教えてくれたり一緒に遊んでくれたのに」

ロビンは、口を尖らせた。

「おい。そんな理由なのか？ 大体、大ト口のお陰でどれだけ世間が大騒ぎになって、犠牲者が出たか……」

わるおが語調も荒く、ロビンに詰め寄ったよ。ロビンに詰め寄るわるおを天才ピグがおしとどめた。

「まあ待て。まずはロビンの話を聞こう」

ロビンはゆっくりと話し始めた。

「ボクは、3D映像を開発していたんだよ。お兄ちゃんも研究している3D映像！」

ロビンは、嬉しそうに声を上げた。

「ロビン。わかっていたのかい」

「うん。3D映像の研究がお兄ちゃんの証さ。インピグ博士の正体は、お兄ちゃんなんだろう？ ボク。すぐにわかったよ」

ロビンは、無邪気に言っただよ。瞳がきらきら輝いて、とっても嬉しそうに見えた。

「ええええ〜っ！」

おしゃれピグが、甲高い声を出した。目を見開いて、口もまんまに開けて……。わる子なんて、驚きすぎで言葉を失っているし、食いしん坊ピグも同様に口をあんぐりあけている。わるおは、口を真一文字にきゅっと結んで、こめかみからたらーっと汗をたらしている。みんなで天才ピグを凝視している。そう言えば……そう言えば、インピグ博士と連絡が取れる者は、天才ピグしかいなかった。いつもそうだった。大ト口で事件が起こった時はあらかじめ対策がしっかり練られていて……。決定的なのは、今までインピグ博士に実際会った者はいない事だ。インピグ博士は、いつも3D映像で現れて近くにはいつも天才ピグと一緒にいたよ。それは天才ピグがインピグ博士の助手のような存在だからだって、みんな勝手に思っていたんだ。

「みんな。黙っていてごめん。インピグ博士は俺の作り出した映像だったんだよ」

あたりに沈黙が流れた。

「さぞ、怒っているだろうね……すまん。許してくれなんて言うつもりもないよ」

わる子がおもむろに口を開いた。

「許すも許さないも……それよりもう、驚いちゃって」

「うん。全くだよ」とわるお。

「あのさ。その辺の話は置いて、展開を先に進めようよ」と食いしん坊ピグ。

「そうね」

おしゃれピグも言って、食いしん坊ピグと顔を見合わせ、互にうんうんとうなずいてる。確かに今は大トロの正体に迫っているところだからね。

天才ピグは、わる子たちの方を向いてうなずくと、今度はロビンの方を見やったよ。

「じゃあさ、ロビンのバックにいるのは誰なんだい？」

ロビンは、ふっと笑みを浮かべたよ。

「ハム副大統領……」

わる子たちは、再びええっ！？ とひっくり返るほど驚いた。

「なんだか、今日は驚く事ばかりいー」

おしゃれピグが叫ぶ。ロビンは話し続けたよ。

「ボクは、副大統領から研究費用の援助を受けてただけさ。お兄ちゃんとおなじ分野で有名になったらまたお兄ちゃんに会えると思っただけさ。ハム研究室で言われるまま研究テーマを消化していたんだよ」

天才ピグは、ずっとインピグ大学で、3D映像の研究をしていた。それは、いかにも映しましたって映像じゃない。生々しくて触れられそうで、匂いすら漂ってくるものだよ。これは、ただの研究じゃないよ。応用すれば、使いたころは無数に考えられる宝の山なんだ。「ロビンは、利用されていただけなんだ。大トロは3D映像だったんだ……あと映像を使ったのは、リボンハムが自爆する時だね。風邪ひき怪人は、ロボットだ。大トロの事件で死んだものは誰もいな



い

さすがに自分が研究しているだけあって、天才ピグには、すぐにわかったらしかった。

「じゃあ、マスターと付き合っていたリボンハムさんは、今もどこかに存在するの？」とわる子。

ロビンが答えた。

「リボンハムさんは、生きていますよ。彼女は女優さんの卵なんだ」「マスターは殺されそうになったけど？」

「あれは薄いものだった。到底、致死量には達していなかった」

「どうやら副大統領はハム良縁センターを利用して、このピグ共和国をのつとろうとしていたらしいよ。大統領はピグで、副大統領はハムなんだ。」

「ピグとハムは共存共栄していたと思うんだけど」

わる子は、決してそう思っていたわけではないけれど、口に出してみた。ハムたちが反乱を起こそうとしているなんて考えたくなかつたんだ。

「要職についているのは、大概はピグだ。副がハム。ピグ共和国では、ピグの方が圧倒的に数が多いし、ハムちゃんたち種族は移民族だった為もあるんだけどね」

「種族差別ってこと？」

「やっぱりかって言うように天才ピグに問いかける。」

「今はほとんどなくなってるよ。一部の年寄りにそんな意識があるだけさ」

「そう……」

わる子は、少しばかり安心したようにうなずいた。その時、突っ立って話を聞いていたセンター長が、やにわに向きを変えると駆け出そうとした。

その背中に天才ピグの冷静な声が響く。

「無駄だよ。センター長。ここに帳簿の記録が全部入っているよ」

センター長が振り向くと、天才ピグの手には、メモリスティック

が握られていたさ。それを見たセンター長はがっくりと肩を落とし、うなだれた。

「少子化対策に向けて、成約したハムちゃんのカップルが子供を生む数によって、国から助成金が出るんだってね。その数が水増しされている。副大統領には見逃してもらって接待漬けか。ほかにも諸々が記録されているよ」

もう副大統領もお終いだよね。

「流石ね。天才ピグ。パスワードを破ったの？」

おしゃれピグが、天才ピグに微笑みかけた。

「だってさ。パスワードが、8686（ハムハム）なんだ。全く苦勞しなかったよ」

天才ピグは、いかにも張り合いがないといった風に肩をすくめると、肘を曲げて両手の平を上に向け、首を振った。おしゃれピグは「ずるっとなったよ。」

わけがわからないうちにパーティーがぶち壊しになってしまった。美味しい会席料理は堪能したし、素敵なシヨも見られたけれど、それは楽しみにしていたデザートが出てくる前の事だったよ。それもピグたちやら、センター長たちがなにやら叫びだしたからだ。お陰で招かれていたお客さんたち全員があっという間に避難させられて、会場を出されてしまったからね。野次馬と化したハムちゃんが、しばらく残っていたけれど、外からじゃ中の様子はわからない。あきらめて一人二人と帰って行ったよ。

もしかしたら、これは余興でどこかにカメラがあるかもしれないって気取りハムちゃんは思ったけれど、テレビカメラのクルーもいる気配がなかった。気取りハムちゃんもつまらなくなって、一人、会場を後にしたよ。盛大な5周年記念パーティーのはずだったのに、抽選でただで招待されたのにつまんない。このまま帰るのもなあって思いながら、つまんないつまんないって商店街を歩いているとふっと美味しそうなコーヒの香りが漂ってきて、思わず気取りハムちゃんは立ち止まった。

喫茶「黒ばら」

そうだ。お茶して帰ろう。美味しいデザートはここで食べればいいやって、気取りハムはお店に入ったよ。

\*\*\*\*\*

もう大ト口はいなくなつた。ロビンは参考人として話は訊かれたけれど、お咎めなしだった。でも代わりにその能力を役立てるようにつて、天才ピグと共にピグ共和国の研究室に入る事になったよ。

「じゃあ、元気でね……」

わる子、わるお、おしゃれピグ、食いしん坊ピグはバスターミナルで、天才ピグを見送ったよ。

「うん。わる子ちゃんたちもね」って、天才ピグ。

リュックを肩に掛けた天才ピグは、何度も振り返りながらバスに乗り込んだ。しばらくすると、二階の窓を少し開けて天才ピグが顔を覗かせた。乗客がみんな乗り込むと、バスのエンジンがかかる。やがてゆっくりとバスは滑り出して、わる子ちゃんたちはちぎれるくらい力いっぱい手を振ったよ。

天才ピグもバスの一番後ろの席で手を振っている。バスはどんどん小さくなって、やがて交差点の角を曲がって見えなくなった。

喫茶「黒ばら」

レンジャーをやめてから一ヶ月が経ったけれど、相変わらず「黒ばら」は、わる子たちには憩いの場所だったよ。カウンター席では、わる子たちが語らっていた。天才ピグとは、友達として近況報告をし合っているし、レンジャーでなくなった事で脱力感があったけれど、それでも仲間とは今まで同様友達だ。今日は、マスターがいつもにも増して機嫌が良かった。マスターは、こぼれる笑みを抑えきれないみたいで、わる子たちが揃った時点で言ったものだ。

「みなさん。実はですね。私。結婚する事にしましたよ！」  
やにわにマスターが口にした言葉。

「え？」

コーヒーを飲んでいたわる子は危うくカップを落としそうになったよ。

「えーっ！」

おしゃれピグは思わず、カウンターの椅子から立ち上がって叫んだんだ。

「紹介します。気取りハムさんです」

マスターの隣には、いつの間にか気取りハムちゃんが寄り添っている！

「信じられ……ない」

おしゃれピグは、立ちすくんでいる。

「いやあ、色々相談に乗っているうちに意気投合しまして」

マスターは、ニコニコ顔を崩さなかったよ。

「はじめて会ったときにマスターにいきなり説教されちゃってね。とことん話をしてるうちに気が合ったの。マスターってすごくいい人よ」

気取りハムちゃんも嬉しそうに言った。気取りハムちゃんは、ハム良縁センターにいたときはすっかり印象が変わっている。とても穏やかな表情で、服装もハム良縁センターにいたときと違って、シンプルなエコ風味になっている。確かに今の気取りハムちゃんならマスターとお似合いと言えるかもしれない。おしゃれピグは、ガタンとまた椅子に腰を下ろしたよ。

「マスター。おめでとう」

わるおが言った。食いしん坊ピグは、マイペースでケーキをぱくつきながら、マスターの方を見てにっこりとおめでとうって言ったよ。

「マスター。良かったね。おめでとう！」

わる子もマスターにお祝いの言葉を投げかけた。おしゃれピグはまだ腑に落ちない表情をしていたけれど。

「おめでとう。マスター！」

それでもお祝いの言葉を言ったさ。

「ありがとうございます……じゃあですね、今日は私のおごりですよっ！」

マスターが勢い良く叫んだ。

「ちょ……それって、逆じゃない！」って、おしゃれピグが慌てて言ったけれど、マスターは前言撤回なんてしない。

いそいそと奥に引っ込むと、張り切って、デザート準備を始めたよ。

「マスターはよっぽど嬉しかったんだね」ってわる子がおしゃれピグの耳元で囁いた。

おしゃれピグは、そうねって、苦笑いさ。食いしん坊ピグとわるおは、しきりにマスターの馴れ初めを訊こうと、作業中のマスターに話しかけている。喫茶「黒ばら」には、愉しげな笑い声がいっ

までも響いていたよ。

(完)

## わる子ちゃん2 1・マッサージ

わる子は、肩こりが止まらなかった。

それも一日中、ネットで小説を書くようになったからなんだ。無理もない。これは、職業病？ だよな！

だからわる子は、マッサージに行つて癒されることにしたよ。行きつけのハムちゃんのマッサージのお店に出かけたんだ！

「いらつしゃい。わる子さん。今日は、どのコースにされますか？」  
「うーん。肩と腕もだし。それから腰も……」

「分かりました！ そしたら全身で」

わる子ちゃんは、早速、手もみハムちゃんのマッサージを受けたよ。

お店の中は、アロマの香りがしてとっても心地よく、癒されるんだ。

手もみハムちゃんは、一生懸命マッサージを施してくれた。

「さあ。わる子さん。60分コース、終了ですよ」

「もう終わり？ なんか物足りないわ」

「みなさん、そうおっしゃいますよ」

「今度は、もつと長いコースでお願いするかも。でも楽になったわ。ありがとう」

わる子ちゃんは、お店を後にしたよ。

それから一カ月後。

わる子ちゃんが、再びハムちゃんのマッサージのお店に行くと、ズラズラッとスタッフが沢山出てきたよ。

「わる子さん。今日から新しく手もみオールナイトコースをはじめようと思つんですけど、如何ですか？」

「ええっ！？ 何ですって」

わる子はびっくりさ。でもそんなに長いマッサージなら受けてみ

たいと思っただよ。

お値段もそれなりだったけどね。

わる子ちゃんは、早速そのコースを受けることにしたんだ。

でもオールナイトのマッサージって、どうするんだろう？

それは、なんとハムちゃんたちが、交代でマッサージをしてくれるんだよ。

足のマッサージを受けている間には、軽食やお茶が付くんだ。

マッサージは、ハムちゃんたちが交代しながら延々と続けられた。

そして、入店から12時間が経ったよ。

わる子ちゃんは、マッサージ台から下りると、大きく伸びをしたよ。

「すごい。もう体が軽くなって生まれ変わったみたい！」

「そうですかー。良かったです」

わる子ちゃんは、今なら飛べそうだと思った。

思いつきり、手で宙をかいてみたよ。

そうしたら、わる子の体がふわりと浮いたんだ！

「あらっ！？ あらっ」

わる子は、どんどん軽くなって高く高く舞い上がったよ。

「あらあゝ。見て見て！」

手もみハムちゃんは、にっこりそれを見ていたけれど、やがて顔面がひきつったよ。

「お、お客さんーん！ わる子さん。お支払いを！」

わる子は、「次回にまとめて」って、切れ切れの声で叫びながら飛んでいってしまったんだ。

それから、しばらくオールナイトコースを続けたハムちゃんのお店だったけれど……。

なんと！

みんな、気持ちよくなって空に飛んで行ってしまっただよ。



お陰で代金を取り損ねたハムのマツサージ店は、一カ月後に閉店  
してしまっただよ。

## 2・サウナでごはん

ある日、わる子は大御所ピグからの誘いで、おしゃれして出かけたよ。大御所ピグは金持ちピグにも劣らない資産家で、わる子と同じく小説を書いている女性なんだ。気取らなくてすごくいい人なんだけど、ちよつと変わっている。でも小説を書く人だから、そんなものだとなる子は思っているよ。

わる子がインディアンピグのデパートの前で待っていると、目の前に一台の赤い車が止まった。パワーウィンドウがスーツと開いて大御所ピグが顔を出したよ。

「大御所ピグさん。こんにちは」

「わる子さん。一年ぶりね。さあ、乗って」

わる子は、早速、大御所ピグの助手席に乗せてもらったよ。そう言えば、この車、なんだか去年見かけた車と違ってみたい。

「大御所ピグさん。車、変えたんですか？」

大御所ピグは、ハンドルを握りながら、「そうよ」「って、嬉しそうに言ったよ。

「すごいですねー。去年も新しい車だったような」

「ええ。私、これからは、毎年、車を買うことにしたの」

「ええっ！」

でも大御所ピグの事だから、きつと知り合いが多くて、車を買うようにすすめられるのかもしれないって、わる子は思ったんだ。

「わる子さん。知ってる？」

大御所ピグは、にこにこしながら言ったよ。

「はい」

「新車を買つと、グリーン化つて言つて翌年の自動車税が安くなるのよね！ だから私は、毎年、車を買って替えるのよ」

わる子は、違わないけど……違わないけど……ちよつと違つて思つた。

「でも……大御所ピグさん。車はお値段が高いと思います」  
大御所ピグは、そんなわる子の言葉をまるつきり無視して言ったんだ。

「わる子さん。新しい車って気分がいいと思わない？」

「はい。そうですね」

「新しい車で、気分も良くて、税金も安いなんて、最高じゃないかしら？」

大御所ピグが、得意そうに言って、わる子は、押し黙ったよ。どうも大御所ピグにとっては、それは新しい車の値段よりも価値あることらしい。

わる子に乗せた車は、大御所ピグの自宅に到着したよ。大御所ピグの邸宅は、まるでお城みたいな広くて素敵なお家なんだ。わる子ちゃんにハムちゃんのおメイドさんたちが、お茶やお菓子を運んできて、もてなしてくれたよ。大御所ピグとわる子ちゃんは、お茶を飲みながら、色んなお話をして、とても楽しい時間を過ごしたんだ。そのうち、時間が経って、すでに夕方になっていた。大御所ピグのお腹がぐうとなったよ。大御所ピグはにっこりとして言った。

「わる子さん。夕ごはんの準備が出来ているの。是非、食べて行ってね」

「ありがとうございます」

「じゃあ、まずシャワーしましょう」

わる子は首をかしげてしまったよ。でも大御所ピグの家ではごはんの前に先にシャワーで疲れをとるのかもしれない。そのほうが、気持ちよくごはんが食べられるしね。大御所ピグの家には、お客様用と二つのシャワー室があったから、二人はほとんど同時にシャワーを終えることが出来たよ。サウナ室で木の椅子に腰掛けているとハムちゃんが、ごはんの載ったワゴンを運んでやって来た。ハムちゃんも、二人分のごはんを置いて去って行ったよ。

またまたわる子は、ええっ！？　と思っただ。

「さあ。いただきます」

大御所ピグは、にこにここと目の前の浴槽の木蓋を持ち上げた。な、なんと！ そこには茶碗蒸しが入っていたんだ。

わる子は、目を丸くしたよ。

「最近、改造したのよ。サウナ室って、蒸し器みたいでしょう？」

私。茶碗蒸し、大好きなのよね！ だから沢山食べたくって」

わる子は、さあと木のしゃもじを持たせられて、そんな馬鹿な…

…って、思いながら大御所ピグと一緒に茶碗蒸しをつついたんだよ。

「今度は、ここでプリンを作ってみようと思うの。わる子さん。また遊びに来てね」

大御所ピグは、ここがサウナなのに！ 涼しい顔してそう言ったんだ。

わる子は、内心、参った……って思った。

### 3・デュエリスト

青空が見えるまあるい大きな競技場の中で、おならピグはただ突っ伏していた。ぽたぽたと零れ落ちる涙がおならピグの手の甲を濡らす。彼は、今までずっと優勝をかつさらっていた『おならコンテスト』で初めて敗北したんだ。コンテストに向けて日々のトレーニングは欠かさなかったつもりだったよ。だけど、やっぱり自分になうものは無いと思って慢心していたのかもしれないね。しばらくしておならピグは、涙を拭ってすつくと立ち上がった。

「次は、絶対に勝つ……」

そんな風につぶやいた。友人であるわる子は、その様子をじっと見守っていたよ。

『おならコンテスト』は、半年に一回開催される！

色んな街からおなら自慢のピグたちがやってくるんだ。会場は、勿論！ 広大なおならスタジアムだよ。

敗北を喫した日、おならピグはわる子に言ったんだ。

「わる子ちゃん。ボクは、次のコンテストで絶対優勝する。だからボクの姿をドキュメンタリータッチで書いて欲しいんだ」

「わかったわ」

わる子は、うなずいたよ。

おならピグの朝は、にわとりの鳴き声と同時に始まる。まずは、朝の体操。いい音のおならを出すためには腹筋も鍛えなくちゃならない。おならピグは、朝晩、最低でも50回の腹筋を習慣付けたよ。そしてお食事には、必ず温野菜を沢山いただくんだ。

「繊維のものを沢山とるようにしているんだ。お肉は、おならが臭くなるからね。健康的でないおならは、失点の対象になるんだよ」

わる子は、うんうんとうなずきながらメモをとったよ。とにかく、健康的な生活をする事が基本なんだね。それから健康に気を配りつつ、業も磨かなくちゃならない。何故っておならコンテストでの採

点は、音とにおいと振動で計算されるからね。毎日毎日雪辱を果たすための、おならピグの地道なトレーニングは続いたよ。

そしてコンテストの日がやってきた。

スタジアムに立つおならピグの向こうから前回の覇者、すかしピグがやってきた。試合前のすかしピグは、ガムをくちやくちやくと噛んでいたよ。そんな態度がカチンときて、わる子は言ったよ。

「まあ！ なんだか馬鹿にしているみたいね」

「違うよ。わる子ちゃん。ガムを噛むのは、お腹の中に空気を取り込むからおならを出すのに有効なのさ。試合前の選手は、よくガムを噛むんだよ」

「あらっ。そうなの？ 知らなかったわ」

すかしピグは、おならピグの前までやってきた。

「やあ。おならピグ君。しばらくぶりだね。お互いがんばろう」

「もちろんさ。今回は、負けないよ」

そして二匹は、めいめいに控え席に散ったんだ。

試合がはじまった。集まった選手たちは、それぞれの技術を競い合った。おならコンテストは、単純なように見えてそうじゃない。

本選で緊張のあまりおならが出なくなり、脱落していく選手の多いことったら！ 審査員席には、振動をあらわすモニタが波形を描いている。そして審査員たちはヘッドフォンをつけておならの匂いを聞いているよ。すかしピグの番がやってきた。大きく深呼吸すると、ブツと一発おならをしたよ。少なくともこれまで演技した選手とは比べものにならない量、質ともに素晴らしいものだった。現段階での最高得点がマークされ、会場は拍手に包まれた。わる子も例外なく、拍手を送ったよ。

色んな選手が現れて、おならをしたけれど、すかしピグの音色にかなうものはなかなか現れない。やがて最後から二番目のおならピグが会場に現れた。

「おならピグちゃん。がんばって！」

わる子は、手を振って声を限りに叫んだよ。おならピグは、腕回し肩回しをして体をほぐしている。そして大きく息を吸った。ホイッスルがなったら、30秒以内におならをしなきゃいけない。おならピグは構えの姿勢をとると、大きく力んだよ。

ブ　　ッ！！

そしておならピグの力強いおならの音が空にこだました。

それは参加しているピグたちを励ましてくれるような、希望が湧いてくるような素晴らしい音だったんだ。わる子は、思わず立ち上がって拍手していたよ。そしてスタンディングオベーションが起った！

なんと、おならピグの得点は過去最高のものだったんだ。記録更新！

「おならピグさん優勝！」

司会が高らかに叫んだよ。金メダルをかけられたおならピグは、高々と花束を持ち上げて会場にアピールしたよ。地道なトレーニングが実を結んだ日だった。

だけど、優勝にあぐらをかいては駄目なんだ。だって、がっかりとうなだれているほかの選手たちは、きのうのおならピグのようじゃないか。

おならピグは、初心を忘れずに今日もトレーニングに励んでいるよ。

#### 4・天才脳外科医オペピグ

インディアンピグの病院に勤務する脳外科の権威、オペピグの手術の腕はすばらしかった。各地から難しい症例の患者さんが沢山訪れるんだ。オペピグは、そんな難しい手術のどれも見事に成功させているよ。そんなオペピグが非公式に行っている手術がある。それは、なんと……！ 頭の良くなる手術なんだ。

この手術は、世界でただ一人、オペピグしか執刀できない。どんな医者もそんな高等なテクニクを持つていないんだ。どんな手術を施したら頭が良くなるのかさえ、謎だ。当然ながら手術にかかる費用は膨大なものなんだよ。オペピグの執刀した手術によって、頭よくなつた患者はこれまでにたった2人。それぞれ名だたるお金持ちだつたらしい。

そんなオペピグの手術を受けようと、噂を聞いた一人の青年が相談にやってきた。青年の名は超ばかピグと言った。

「君。手術を受けたいのかい？」

「はい。僕、超頭が悪いんですよ……」

「しかし、この手術には莫大なお金がかかるのだよ」

それは、なんと人間の単位で言うと、10億円もするんだ。それでも超ばかピグは、手術を受けたいと譲らなかつた。

「超ばかピグさん。お金が用意できますか？」

「できません」

「それなら手術は受けられません」

「でも……」

超ばかピグは、示されたリーフレットの一つを指差したんだ。

「ここに「出世払いコース」と言う支払い方法があるではありませんか」

超ばかピグは、そんなところにだけ目ざとかつたよ。でも、この「出世払いコース」を使った者はいまだかつていない。だって、こ



れまでに手術を受けたのが、2人のお金持ちだけだったんだからね。「いいだろう。私は全力で君の手術に立ち向かうよ」

オペピグはにっこりと微笑んだよ。つまり……「出世払いコース」と言うのは、良くなった頭を使って巨万の富を稼ぐって事なんだよ。だからオペピグは、そのために最大限に患者の能力を引き出す手術をしなきゃならないんだ。でも、超ばかピグが手術でいくら頭が良くなったからってそんなにお金が稼げるのかなあ……？

手術が始まった。

手術には、ナースピグが付き添ったよ。ナースピグは、秘密が守れる優秀な看護師だった。準備が整うと、エアシャワーを抜けて、なんと！ グレーの作業着姿のオペピグが姿を現したんだ！ 身軽な地下足袋を履いて、頭には毛が飛び散らないようにヘルメットもかぶっているよ。

「おっしやあぁ〜っ！」

オペピグは、気合を入ると、超ばかピグの脳を取り出した。

「ここ。思考回路が単純なんだよね。さあ、接続を良くするぞ！」

そしてオペピグは、工事道具を取り出してトンテンカン……と手術を始めたんだ。手術室内にばしばしと火花が散ったよ。もくもくと煙が上がってる！そして、オペピグは、超ばかピグの脳にとても沢山の……回路を埋め込んだ。すべての工程を終えると、オペピグは額の汗を拭った。

「先生。お疲れ様です。相変わらず鮮やかなお手並みで」

「ふう……。今までで一番、力を尽くしたよ」

手術室から出た超ばかピグは、一日もの間、眠り続けたよ。

翌朝。

超ばかピグの病室にナースピグがやってきた。

「超ばかピグさん。お加減は如何ですか？」

「うん。ちよっと、頭痛がして体がだるいけど……」

「術後の状態を見たいので、これ、やっておいてくださいいね」

ナースピグは、インディアン大学入試問題集を超ばかピグの机に置いて去っていったよ。

こんなの、解けるわけないよ！ って超ばかピグは叫びそうになった。けれど、問題集を開いて驚いたよ。瞬時に答えが浮かび上がってくるんだ。超ばかピグは、適性検査並みのスピードで、問題集一冊を終えてしまった。

「先生。どうもありがとうございました。僕は、必ずや出世して費用を支払います」

退院してすぐに超ばかピグは、会社を設立したよ。そして超ばかピグの会社は、わずか3年の間に全国に衣料品のスーパーを設けるまでになったんだ！ 超ばかピグは、仕事がなくて困っている沢山のハムちゃんたちを雇い入れたよ。そんな超ばかピグの事業活動はやがてマスコミにも取り上げられた。それが宣伝になってますます超ばかピグの会社は、繁盛したよ。

「はっはっは……」

超ばかピグは、笑いが止まらなかった。今日も超ばかピグは、テレビの取材を受けていたよ。

「天才は……紙一重って言いますけどねえ。超ばかピグさんは、学校時代は、成績が悪かったそうですね」

超ばかピグは、快く取材に応じている。アナウンサーピグが羨望のまなざしで超ばかピグを見ている。そんな超ばかピグの出演しているテレビを見ながら、オペピグは言った。

「彼は、僕の生涯の中で最高傑作だよ！ もうあれを上回る手術は出来そうもない。あの手術はものすごく集中力を必要とするんだ。もう僕は隠居するよ」

「先生のあの素晴らしい手術がもう見られないなんて……」

ナースピグは、心底悲しんだ。オペピグは、そんなナースピグの手を取ってうなずいた。そして、オペピグとナースピグは、3人分の脳外科手術の費用30億円を持って海外で結婚して幸せに暮らし

たらしい。

## 5・ラピスラズリ

ばかピグは、パワーストーンを手に入れた！

ラピスラズリは、幸運を招く石だって言われている。

握り締めていると手のひらが温かくなって、心が落ち着いて来るんだよ。

試験勉強だって、はかどる事間違いなしだ。

ばかピグは、ラピスをポケットに入れて今、試験に臨んでいた。

この石さえあれば楽勝だって思ったよ。

さらさらさら……。

なんと全然、つかえずに次々と問題が解けていくじゃないか。

ばかピグは、あまりの調子良さに自己ベストだっていけるかもって思った。

さらさらさら……。

本当に気持ち悪いほど、のりのりだったよ。

ラピスラズリ……恐るべしだ。

そもそもラピスラズリは、昨日や今日、ブームになったものじゃない。

その歴史は古くて、元々お守りとして活用されてきているし。

さらさらさら……。

しかし、そこではかピグの手は止まってしまった。

授業で習っていない思いつきりひねった問題があったんだ。

こんな奇問を出すなんてひどいよ！  
ばかピグは、頭を抱えてしまったよ。  
となりのわる子ちゃんを見ると涼しい顔をして問題を解いている。  
天才ピグなんて、もはや書いていない。  
全部書き終えて、見直しをしてみるみたいだったよ。  
ばかピグは、ポケットの上からラピスを押さえた。  
ラピスがあれば、大丈夫なはずだ。  
ラピスがあれば……。

だけど、あまりにもラピスの魅力に惹かれていたばかピグの頭に浮かぶのは、その効能ばかりなんだ。

” 目先の状況だけにこだわらず、ときには厳しい試練を与え、本来超えなければならぬ経験や体験をさせてくれるパワーストーン……”

厳しい試練。そうかー。

かくて頭が真っ白になったばかピグは、パニックになってその後の問題が全然とけなくなった。  
結局、平凡な成績に落ち着いたんだよ。

5 ラピスラズリ（後書き）

## 6・ものぐさピグのいちいち

ものぐさピグは、足がとっても器用なんだ。用事の半分は、足ですませちゃうんだよ。そしてものぐさピグの朝は、早いんだ。ものぐさなのね。今日ものぐさピグは、新聞受けから新聞を取ってきた。この時は、勿論手を使って取ってくる。それから、ごろりと長いソファーに横になったんだ。ソファーの下には引き出しがあって、それはなんと冷蔵庫になっている！ そこには、非常用食料がたっぷりと入っているんだ。便利だよ！ ものぐさピグは、寝転がったまま足でひょいと引き出しを開けると、手でチョコバーを一本つかみ出した。それから足で引き出しを閉じたよ。ものぐさピグは、チョコバーをかじりながら、ぱらぱらと新聞に目を通すんだ。チョコバーを食べ終わると、ものぐさピグは半身を起こしてチョコバーの空袋を手にくずかごに狙いを定めた。はずすと立ち上がって捨てに行かなきゃならないから、必死なんだ。集中力が要るんだよ。「えい！」

空袋は宙を舞って無事くずかごに一発で入った。空袋というやつは重量感がない。だから、投げるのが難しいんだ。この力加減を会得するために何度練習したかわからない。的をはずしたゴミを拾いに行く大変さが身に沁みたものぐさピグは、まさにこの技術を体で覚えたと言えるんだ。やがて先ほど食べたチョコバーが胃の中で膨らんできた。お腹が一杯になると、眠くなってくる。ものぐさピグは、それから夜まで眠り続けたんだよ。どれだけ眠ったのか、ものぐさピグは、目が覚めた。傍らの時計を見ると、午後十一時。夜中じゃないか！

(もう寝る時間だ……)

ものぐさピグは、目覚まし時計を朝六時にセットした。

(今日も一日ほとんど何もせずに過ごしてしまった)  
心に軽く後悔がよぎる。

明日は、もっと足を鍛えるためのトレーニングをしよう。そして  
もっとものぐさになるんだ。決意も新たにものぐさピグは、眠りに  
ついたよ。



## 7・大御所ピグの車選び

大御所ピグは、車を買いに出かけたよ。今乗っている、真っ赤な車にそろそろ飽きてきたんだ。これから秋になるし、違う色の車が欲しくなったんだ。

デザインともにシックな感じの車がいいと思ったよ。ファッションと統一性がなくちゃ、おしゃれじゃない。

週末のディーラーは、大勢のピグたちが訪れていた。でも本当に車を買うピグはわずかだろう。

「大御所ピグさん、いらっしやい。ようこそ」

お客さんたちをかきわけて、早速、スーツ姿の営業ハムが、もみ手をしてやってきたよ。大御所ピグは、必ず車を買ってくれるから上得意様なんだ。営業ハムたちの間では、大御所ピグがやって来ると、一帯に後光がさしたようになって見えるらしいんだ。

「こんにちは」

大御所ピグは、ゆったりとした笑みを浮かべて言った。

「渋い色合いの車が欲しいのよねー。しつとりと落ち着いた感じの」

「ああ、それは、いいですねえ」

営業ハムは、大御所ピグを展示コーナーに案内したよ。そこには、黒い車や紺の車がずらりと並んでいた。

「このシルバーマタリックの車なんて、如何でしょう」

「あら、いやよ。おやじくさいわ」

大御所ピグは、加齢臭がするわと言って、鼻をつまんだよ。

「そ、そうですね……では、この黒い車はどうですか？」

「こんなスポーツタイプのデザインだと、走り屋みたいよ……。もつと、こう秋らしい枯れ葉色の車はないかしら？ 曲線のかかったデザインがいいわね」

そう話す大御所ピグの目が一点で留まったよ。

「ああ、あれ、あれ。あれよー！」

その車は、まさに大御所ピグの思ったような枯れ葉色をしていたんだ。丸っこい独特のデザインをしている。茶色い車って、おっさん臭くなりがちだけど、お洒落なデザインのお陰でとても上品になつて見えるんだ。

「お、大御所ピグさん。あれは、あまりお勧め出来ない車で……」  
「あら？」

大御所ピグの目がきらりと光つたよ。

「売り物じゃないのかしらー？ すっごく可愛いデザインなんだけど」

営業ハムは首をすくめたよ。

「ちよつと、使い勝手が悪いんですよねー」

「ああ……」

大御所ピグは、納得したようにうなずいた。

「車はねえ。性能うんぬんよりも面白いのがいいのよ。なんならセカンドカーにしてもいいし、構わないわ」

車を見ただけで買うわと大御所ピグは、うなずいた。

「でっ、では、試乗してみてください……」

営業ハムは観念したように言ったよ。大御所ピグは、早速、運転席に腰を下ろした。助手席には営業ハムが乗っている。毎年車を乗り換えている大御所ピグは、ドライビングテクニクも優れているよ。

コラムシフトのレバーをDに入れると、ゆっくりとアクセルを踏み込んだ。ところがちつとも動かないんだ。

「こ、これは、どうしたことかしらー？」

サイドブレーキもしっかりと下りている。けれど、びくともしない。そのうち大御所ピグは窓の外を見て、あつと声をあげたんだ！

ドアミラーが、ものすごい勢いで前後に揺れている。大御所ピグは、更にアクセルを踏み込んでみたよ。すると、ドアミラーがちぎれそうなほど首を振って、なんと車はふわりと空に舞い上がったんだ。

「まあ……。なんてこと！」

「こんなわけなんです……」

営業ハムは、ぼそりと言ったよ。大御所ピグに叱られると思ったんだ。

「気に入ったわ。可愛いデザインでステキな色のうえ、空を飛ぶなんて最高！ 私。これ、買っわよー」

「お、お買い上げありがとうございます……」

ディーラーのお店の上空には、いつまでも大御所ピグの高笑いが響いていたよ。

## 7・大御所ピグの車選び（後書き）

群青まーぶると分けた事により、わる子スタイルをわる子ちゃん2に一括しました。近々、大御所ピグ、もう一作投下します。

## 8・コスメピグの訪問販売

大御所ピグの屋敷には、月に一回、コスメピグがやってくる。今日も大きなバッグを抱えたコスメピグが、訪れたよ。

「こんにちは。大御所ピグさん」

玄関のカメラの前に立って、コスメピグは叫んだ。

「待っていたのよ。お化粧水が少なくなっちゃって」

テレビ画面に大御所ピグの姿が映ったかと思うと、自動的に玄関のドアが開いたよ。

コスメピグが中に入ると、足首までの丈のあるワンピースを着た大御所ピグが現れた。

「いつもありがとございます。当社の白ばら化粧水は自然派なので、冷蔵庫で保管し、早く使い切ってもらうのは、とても良いことなのです。それにしても、徳用一リットル瓶でしたのに、なくなるのがお早いですね」

「ええ。私、いいものだと思ったら、気前よく人にあげちゃうのよ」

大御所ピグは、にこにこして言ったよ。そうですかとコスメピグも微笑んだ。コスメピグは、バッグから化粧水一リットルを取り出したよ。

「では、化粧水の補充分ですね。他に必要なものはありませんか？」

「そうねえ。最近、お肌の黒ずみが気になるんだけど、いいものはないかしら？」

コスメピグは、ちょっと首をかしげて考えていたけれど、やがてバッグの中をごそごそすると、青い瓶を取り出したんだ。丁度、手のひらに乗るくらいのお大きだよ。

「これは、当社特製のお肌まっしろ白ばらクリームなのです……。ちょっと失礼」

コスメピグは、スパチュラでひよいとクリームをすくうと、大御

所ピグの右頬にすりこんだよ。そして、大きな鏡を取り出して見せたんだ。

「大御所ピグさん。どうですか？」

「まあ。ステキ！ 右の頬が白いわー。左の頬と全然違うじゃないの」

大御所ピグは、手を頬に当てて目を見張った。この白ばらクリームは、八ミリリットルしかないくせに一リットルサイズの化粧品と変わらない値段なんだ。けれど、大御所ピグは迷わず言ったよ。「これ、いただきわ！」

「ありがとうございます……それですね。大御所ピグさん……」

コスメピグが、もじもじしている。

「何かしらー」

大御所ピグは、左の頬にもクリームを塗り塗りしながら、上機嫌で言ったよ。

「新製品のモニターをお願いしたいのです」

「まあ！ 新製品ですって」

白ばら化粧品の新製品を試せるとあって、大御所ピグはその場で踊るように一回転したんだ。金のペンダントが瞬間、宙を舞い、長いドレスの裾がひらりと揺れたよ。

「はい。実はこのパックなのですが……。画期的な発明品なのです。なんと！ それは、まるでチューインガムそっくりだったんだ。「これ、ガムじゃないの？」

大御所ピグは、まじまじとそれを見つめたよ。白ばらのプリントされた紙に包まれた平べったいガム。包みを開けるとほんわりとバラの香りが漂ってくる。コスメピグは、説明を始めた。

「化粧品は、安全なものではなくてはなりません。口に入れても大丈夫なような。その点、白ばら化粧品の信頼性は、業界で一番なのです。大御所ピグさん。是非これを食べて見てください。このガムには、コラーゲンとビタミンCが配合されています」

大御所ピグは、早速、それを食べてみたんだ。パックの話はどう

なっただらうと思いながらね。噛めば噛むほど、ガムは、飲み込みたくなるほど柔らかくなってる行った。

「そうやって、ビタミンCやコラーゲンを体内に取り入れるのです。大御所ピグさん。そのガムで風船を膨らませてください」

大御所ピグは、言われるままガムをプーツと膨らませたよ。柔らかいガムは、伸びが良くて大きな風船が出来た。

「失礼します」

コスメピグは、やにわに虫ピンを取り出すと、思いつきりその風船を突いたんだ！

「キヤーツ！」

風船が割れて、ガムがべったりと大御所ピグの顔に広がったよ。

「これが、白ばら化粧品の新製品。白ばらパツクなのです」

コスメピグが言った。

「そのまま三分間お待ちください。白ばら化粧品の新商品は、体内から……そしてお肌の上から栄養素を吸収させる画期的なガム型パツクなのです」

大御所ピグは、完全に固まっていた。コスメピグは、三分間を計り終わると大御所ピグの顔のパツクをべりべりとはがしたよ。すると中からツルツルのお肌が現れたんだ！

けれど、大御所ピグの顔は真っ赤だったよ。

「いかがですか？」

得意満面のコスメピグは大御所ピグは、一息ついて言った。

「コスメピグさん……」

「なんででしょう？」

「やっぱりパツクは、呼吸が出来るよう、鼻に空気穴が開いてるといいんだけど……」

「ああ……」

コスメピグは、切ない表情を見せると、そつと手帳に「モニタ失敗」と書き込んだんだよ。





## 9・だめ子の見た夢

秋は、だめ子の一番好きな季節だ。涼しくって気持ちが良いくて運動するにもいいし、美味しい食べ物だつて多い。そして寝るにも最高なんだよ。

だめ子は、庭に出てみたよ。そしてだめパパが愛用しているハンモックで眠る事にしたんだ。

だめ子は、ひよいとハンモックに乗ってみた。ところが次の瞬間、ずどんと落ちて、思いつきりしりもちをついてしまったんだ。だめ子は、腰をさすりながらつぶやいたよ。

「アイタタタ……だめじゃん！」

だめ子は、ハンモックをにらみつけた。そして気を取り直してもう一回挑戦してみたよ。どうやらハンモックで眠るには、コツが要るみたい。パパが言っていた事を思い出して、だめ子は、一回ハンモックに座ると、それから横になった。するとちよつと安定したみたいだ。頭上には、西に傾きかけたお日様が見える。小鳥のさえずりも聞こえてくる。涼やかな風が吹いてきて、だめ草から、だめだめだめ……って葉ずれの音がしたよ。だめ子は、気持ちよくなつていつの間にかうとうととしながら夢の世界に誘われていったんだ。

いつの間にかだめ子は学校の教室にいた。

「ねえ。だめちゃん、鉛筆持っていない？」

声をかけてきたのは、ばかピグだ。

「何。忘れてきたの？」

だめ子は答えたんだ。

「うん。ボク、ペンケース忘れてきたんだ」

だめ子は、とっさにだめじゃん！ っつて、言おうとしたよ。

「仕方ないわねー。ばかピグちゃん。貸してあげる」

だめ子は、自分で言った言葉にびっくりしたよ。

「ほんと？ だめちゃん。ありがとう」

ばかピグは、大喜びで自分の席にもどって行ったよ。

次にわる子が話しかけてきた。

「ねー。だめちゃん。昨日、言おうと思って忘れていたんだけど。今日、お掃除当番代わってほしかったんだ」

「いいわよ」

だめ子は、自分の顔がにっこりと微笑んでいるのを感じたんだ。本当は、早く言ってくれなきゃだめじゃん！ って言いたかったのにな。おかしい。こんな自分は自分じゃない。

それから、だめ子は、誰に話しかけられても、だめの言葉を言わなかったよ。調子がくるってしまう。だめ子は、心の中で助けてって叫んだよ。

そこで、だめ子は、目が覚めたんだ。

きつとこれは逆夢なんだってだめ子は思った。それからだめ子は、ハンモックから降りると、夕暮れの空に向かって力いっぱい、だめー！ って叫んだんだ。だめ子の声は、エコーがかかりながら、遠くの山に消えて行ったよ。すごく気分がよかった。こうでなきゃってだめ子は思ったよ。

翌日の学校がはじまった。

「ねえ。だめちゃん、鉛筆持ってない？」

声をかけてきたのは、ばかピグだ。だめ子は、まさかっと思いがら、聞き返したよ。

「ええっ、忘れたの？」

ばかピグが、八の字眉で、うんうんとうなずいている。

「だめじゃん、仕方ないねー。貸してあげるよ」

「やったあ、だめちゃん。ありがとう」

ばかピグは、大喜びで自分の席にもどって行ったよ。だめ子は、ほっとしたんだ。夢と同じかもって思ったけど、ばかピグは、元々忘れ物が多いから珍しい事じゃないんだ。

次にわる子が話しかけてきた。

「ねー。だめちゃん。昨日、言おうと思って忘れていたんだけど。今日、お掃除当番代わってほしかったんだ」

だめ子は、あれれ……？ 夢と同じだって思ったよ。しかし、ばかピグと言い、わる子と言い、何でこんなにものを忘れるんだろう。「仕方ないわねー。代わってあげる。だけど今度からはもつと早く言ってくれなきゃだめなんだからねっ」

「ありがとう」

わる子は、お礼を言うと自分の席に引っ込んでいったよ。

しばらくして教室の前のドアが開いて、先生がやってきた。先生は、背の高い見慣れないピグを連れてくる。どうやら転校生らしい。朝の挨拶のあと、先生は言ったものさ。

「今日から、転校してきたナイトピグさんです」

「ナイトピグです。みなさん、よろしく……」

先生は、教室を見回して言ったよ。

「ナイトピグさんは、学級委員のだめ子さんの隣に座ってもらいます。だめ子さんは、この学校の事をいろいろ教えてあげてくださいね」

「はい」

ナイトピグは、だめ子の隣に座ると、挨拶をしてきたよ。

「だめ子さん、よろしくね。いろいろ教えてください」

だめ子は、うんうんとうなずいた。それからしばらくは、だめ子はだめって言わなくなった。転校生を案内していて、だめなんて言う機会がなかったんだ。

ハンモックで見た夢は、逆夢みたいで正夢みたいな、なんだか不思議な夢だったんだよ。

## 10・だめ子の学校案内

だめ子は、先生の言い付けで、しばらく転校生のナイトピグのお世話をする事になった。お昼になって、学校の中を見て回る事にしたよ。

「だめ子さん。案内してくれてありがとうございますー」

ナイトピグは、小さな目をぱちぱちさせて言ったよ。どうやらとっても礼儀正しいピグのようだ。

「学級委員なんだから、転校生のお世話くらいしなきゃだめだと思っっているのよ」

だめ子は、素っ気無く言うと、まず図書室にやってきたよ。ナイトピグは、きよるきよるとあたりを見ている。カウンターには、天才ピグがいて、本を読んでいる。

「ねえ。天才ピグちゃん」

なんですかと天才ピグが顔を上げた。

「転校生のナイトピグちゃんにカードを作って欲しいのよ」

「ああ、そうでしたねー」

天才ピグは、ナイトピグにクラスと名前を書かせると、早速カードを作り始めたよ。

「ナイトピグちゃん。こんなに沢山の本がある図書室を利用しないなんてだめよ」

「はい。だめ子さん。僕、精々ここを利用します」

ナイトピグがうなずくと、だめ子は満足気に書棚の間を周り始めた。そしてナイトピグが出来上がったカードを受け取ると、次の場所に向かったんだ。視聴覚室に美術室、音楽室を見て回ると、最後に食堂にやって来た。

食堂は、とっても広かった。四角いテーブルと椅子があちこちに設置されている。それらは、衝立や簾で仕切られている。ところどころに観葉植物が飾られている。そして壁沿いには、カウンターテ

ーブルがあつて、座つて食べるところや立つて食べるところまであるんだ。とつても立派な食堂だった。厨房では、ハムちゃんたちの調理員さんが働いている。

「私、ここがすごく気に入ってるの。バイキングになっているから好きなものを取ってね」

だめ子は、話しながらトレーを二つとると、一つをナイトピグに渡した。

「ありがとうございます」

ナイトピグは、チキンをお皿に載せてみた。すると厨房からハムちゃんがひよっこり顔を出すじゃないか。

「チキンを取ったら、次は野菜を取らないとだめでーす」

それだけ言つて引つ込んだよ。ナイトピグは、目をぱちくりさ。でもとつてもお腹が空いていたナイトピグは、ハムちゃんのことを無視して、次はステーキに手を出した。再び、厨房からハムちゃんが顔を出す。

「野菜を取らなきゃだめつて言つたでしょ、言つたでしょ。次は野菜を取ってくださいね」

それでもナイトピグは、無視して今度はハンバーグを取つたんだ。そしたら、さっきのハムちゃんが追いかけてきて、トレーにレッドカードを載せて行つたよ。

ハムちゃんは、じろりとナイトピグを見ると、名札のクラスと名前をメモに取つたんだ。ナイトピグは、なんだか怖くなつてきた。

「だめ子さん……」

ナイトピグは、ふるえる声で言った。

「どうしたの？」

「ハムちゃんの調理員さんに怒られて、名前を控えられました……」  
ナイトピグのトレーには、力のつきそうな肉ばかりが山盛りになつていたよ。だめ子は、トレーをひと目見ると言つたんだ。

「肉ばかり。だめじゃん」

「僕、どうなるんですか」

だめ子は、不敵に微笑んでナイトピグのトレーに野菜ジュースをひとつのつけたよ。

「明日になったらわかるわよ。せめてこれでも飲まなきゃだめよ」  
翌日、朝のホームルームの時間にナイトピグは、呼び出されたんだ。ナイトピグは、先生から封筒を手渡されたよ。そこには、生活習慣病の恐ろしさと書かれたリーフレットと講習のご案内が入っていたんだ。

お肉を取りすぎたナイトピグは、講習の受講が必須らしい。けれどもあとから野菜ジュースを摂取したから、軽微な違反の第一教室で六十分の講習でいいですって、書いてあったんだよ。

## 11 大御所ピグのお出かけ

季節は、冬を迎えようとしている。けれど大御所ピグの家は快適なんだよ。

朝、起きると大御所ピグは、早速水着に着替えて自家用の温水プールに向かったんだ。飛び込み台でばうんばうんとジャンプすると、ざっぱあ〜んと飛び込んだ。

ぷーっと水から顔を上げると、まずは平泳ぎで体を慣らしたよ。そして見事なクロールでプールを何回も往復したんだ。プールサイドには、執事のハムちゃんが控えている。ひとしきり泳いだ大御所ピグは、プールからあがった。ぶるんぶるんと頭を振る大御所ピグのもとに、執事ハムがタオルを持って、駆け寄ったよ。

「大御所ピグさま。相変わらず、見事な泳ぎぶりです」

「ああ。そんな事ないのよー。最近、泳いでいないからすっかり体がなまっちゃって。だめねー」

言いながら、大御所ピグははっとした。

「そう言えば、お買い物も最近、外商ばかり……。一步も家から出ないで、小説ばかり書いているからだわ。たまには、外に出なくちゃ。そうだわ。インピグ出版の原稿もあがった事だし、わる子さんをお芝居に誘ってみましょう」

お芝居を見て、美味しいものを食べて、それからシヨツピングをして……。きつと楽しいに違いない。大御所ピグは、思いついたら即、行動する性格なんだ。プール脇に置かれたリラックスチェアーに深々と座ると、わくわくしながらわる子に電話をかけてみた。三コールほどして、わる子が電話に出てくれたよ。

「はろ、はろー。わる子さん……」

「あつ。大御所ピグさん。お久しぶりー」

「わる子さーん。今日は、お時間あるかしら」

「ええ。午後から空いていますよ」

「それは良かったわ。お芝居のチケットがあるのよー。一緒に見に行かない？」

「はい。喜んで……」

「じゃあ、ピグ橋の交差点でね」

大御所ピグはがちやりと通話を切った。

それから、長いテーブルの端っこで、フォークとナイフを器用に使って、ランチをいただいたよ。食事を終えると、お出かけ、お出かけ…… 大御所ピグは、鼻歌交じりに白ばら化粧品でぴたぴたと顔を叩いたんだ。あまった化粧水は首にもたっぷりと塗るのを忘れない。最後にクローゼットから洋服を選んだよ。いちど着替えてみたけど、それは大御所ピグの満足いくものではなかった。

「お芝居に、この赤いドレスは、ちょっとどんくさいわ」

大御所ピグは、クローゼット前にいっぱい洋服を脱ぎ散らかして、結局、渋いココア色のドレスを選んだんだ。胸元にスパンコールがついてなかなかお洒落だった。そして、首に同系色のスカーフを巻いたよ。バッグは、ワントーン濃い目のこげ茶の手提げバッグを選んだ。大御所ピグは、何回も鏡に自分の姿を映して悦に入っていたんだ。

今日は、セカンドカーのシルバーの車で出かけよう。そう思いながら時計を見た。

そしたら、なんと！ 約束の時間まで、あと十分だった。これじゃあ、車を飛ばしても間に合わない。

大御所ピグは、慌てて部屋の小脇にある、呼び鈴を押したんだ。すぐに、執事ハムが現れたよ。

「約束の時間に遅れそうなのよー」

「かしこまりました」

大御所ピグは、ほっとしたように微笑んだよ。

ピグ橋のたもとで待っているわる子は、大御所ピグの目印である赤いスポーツカーを探していた。まだ約束の時間までは、五分ほど



ある。大御所ピグは、おおらかな気性だから、少し遅れるかもしれないって、わる子は思ったんだ。

そのうちわる子の頭上に、ばばばばと爆音が響いてきた。えっと思つてわる子は、空を見上げたよ。そしてびっくりしたんだ。すぐ近くにヘリコプターが飛んでいる。そのヘリからぱあつと縄ばしごが降りてきたかと思うと、なんと大御所ピグがぶら下がるように降りてきたんだ。茶色いドレスが風にはためいている。通行中のピグたちもびっくりして空を見上げているよ。

「わる子さーん。お・待・た・せー」

大御所ピグが、拡声器を片手に叫んでいる。そして近くのデパートの屋上に降り立ったよ。

「待ち合わせ場所が変わっちゃって、ごめんなさいねー」

屋上からわる子に向かって叫ぶ大御所ピグ。わる子は、あたりの注目を一身に集めてしまった。

わる子は、大御所ピグには、敵わないな……って、思ったんだよ。

## 12・キラキラ とびっきりの流れ星（前書き）

この物語は、ツイッターアプリの『少女漫画家になったー』で、出てきたネタをもとに執筆しました。  
どんなのが、出たかと言いますと……。

沢木香穂里のペンネームは『轟さくら』で、『キラキラ とびっきりの流れ星』という新連載を始めます。

新連載ではないのですが、わる子ちゃんシリーズで書いてみました。

## 12・キラキラ とびっきりの流れ星

乙女ピグは夢見る女の子。

文芸部の部長をしていて、詩や小説を書いているんだよ。

月の綺麗な夜。

乙女ピグは、小高い丘の上に建っている自分の部屋の窓から、星を眺めていたんだ。

なんだか創作のイメージが湧いてきそうに思えたんだ。

乙女ピグは、まばたきもせずじっと夜空を眺めていたよ。

そうしたら、なんと！流れ星がツーツと空をつきつて行くじゃないか。

ステキな人にめぐり合えますように！

乙女ピグは、とっさにつぶやいたよ。

翌朝の乙女ピグは、寝坊してしまった。

昨日、すっかり夜更かしてしまったんだからね。

遅刻しそうになって、慌てて自転車を漕いでいたんだ。

すると、交差点の角で見慣れないピグとぶつかりそうになってしまった！

「キヤーツ」

乙女ピグは悲鳴を上げて、ブレーキを踏んだよ。

キキーツ……。

でもその男の子のピグは、見事な反射神経で、突っ込んできそうになった乙女ピグの自転車をかわしたよ。

身軽にジャンプするとスタッと乙女ピグの自転車の後ろに降り立っただ。

乙女ピグは、ぼうぜんさ。

止まった自転車のかごからは、ピンクのノートが落っこちた。

それは、乙女ピグの創作ノートだったんだ。

男の子は、黙ってそのノートを拾いあげると、パンパンと埃をたたいてくれて、そしてそれを見つめた。

乙女ピグは、恥ずかしくてその男の子を見つめていたよ。

「轟さくらさん？」

それは、ノートの表紙に書かれた乙女ピグのペンネームだったんだ。

「あ、ありがとう……」

乙女ピグは、男の子の差し出すノートを受け取ったよ。

同じ歳くらいの見慣れない男の子。

「私は、乙女ピグ。あなたは？」

「ボクは、ナイトピグだよ！」

男の子は言った。

ナイトピグは、とつてもスラリとしていて、かわいい顔をしていたよ。

乙女ピグが書いている恋愛小説の登場人物のイメージなんだ。

昨日流れ星に祈ったばかりで、こんな事があるなんてね。

乙女ピグの胸は高鳴ったよ。

無事遅刻を免れた乙女ピグの教室に現れた転校生は、なんとナイトピグだったんだ。

ますます私の小説の世界みたい……。

乙女ピグは、転校してきたナイトピグのお世話をしたいって思ったけど、残念ながら指名されたのは学級委員のためちゃんだった。

仕方ないなって乙女ピグは思ったよ。

その夜の乙女ピグ。

そつと家の窓を開けてみた。

また流れ星に遭遇できたら、今度はナイトピグと仲良くなれるようにお祈りしよう。

もしも遭遇できなかつたらまたその次の日。

そんな夜のどきどきタイムが、乙女ピグのもっとも楽しみな時間になったんだよ。

### 13・ピグたちのクリスマス！

クリスマスがやってきた！

#### 大御所ピグのクリスマス

冬を迎えた大御所ピグの家は、素敵な電飾をまとっている。

赤や青や黄色いイルミネーションがすっぽりと建物を覆い、光でトナカイや雪だるまやいろんな冬の風物詩が描かれているんだよ。

近づくとも明るさに目もくらむようで、それはそれは見事なんだ。

同じ街に住むこともたちも大喜びさ。大御所ピグの家はとっても有名で、遠くから写真を撮りに来るピグさえいるんだ。

それは、大御所ピグにとっては嬉しい事だった。けれども同時に大御所ピグは、不満な事でもあったんだ。

何故かと言うと、自分の家に飾りつけた光は、家の中に入ってしまえば、見られないんだからね。街中でもっとも素敵な自宅の光を楽しむ事ができないなんて。

それでも冬場に自宅を飾る事は大御所ピグの家で脈々と受け継がれている家訓だから仕方ないんだよね……。

仕方なく、ヘリで自宅の豪邸を鑑賞しがてら、街流しをする大御所ピグだったよ。

ちなみにそのヘリも素晴らしい電飾で、みんなから喜ばれたの一言うまでもない。

#### ばか先輩のクリスマス

郵便局にアルバイトにやってきたばか先輩は張り切っていた。ばか先輩は、今はハイスクールの生徒んだけど、将来は、郵便局に

お勤めしたいとひそかに思っているんだ。

だから郵便局の仕事が出来ることはとっても嬉しい事だったんだよ。

早速、主任ピグがやってきて、ばか先輩に言った。

「君。この小包を……」

「はい、はいっ!」

ばか先輩は、小包をひつたくるようにして受け取ると、一目散に駆け出したんだ。

主任ピグは呆気にとられているよ。言い終わらないうちに韋駄天走りで消えちゃったんだからね。

ばか先輩は、走りながら小包のあて先を見たよ。  
すると……。

「こりゃ失敗。逆方向だったな。あははは」

ばか先輩は、向きを変え再び走り出した。そして驚くべき速さで配達を終えて、郵便局に戻ったんだ。

「早いな。君」

主任ピグの驚いた様子にはか先輩はやったぜって思ったよ。主任は、自分の仕事の速さに驚異を感じているに違いないってね。ばか先輩は、その場で軽く走りこみながら言ったんだ。

「まだありますか?」

「ええと……」

主任ピグが、他の小包に手を伸ばすやいなやばか先輩は、さーつとそれを搔つ攫った。自分の顔の真正面に持つてきてしつかりとあて先を読むと、ぴゅーんと駆け出したよ。

さっきは、張り切りすぎてあて先を失念しちゃったからね。またも主任ピグが呆気にとられているよ。

ばか先輩は、大満足だったさ。きっと自分は、郵便局員に適性がばつちりに違いない。ハイスクールを出たら、きっと雇ってくれるに違いないって思ったよ。

今度も素晴らしいスピードではか先輩は、配達先に到着したさ。

小包を手渡すと伝票にサインをもらうことも忘れない。ばか先輩は、自分が役に立っていると思えて、もう嬉しくって知らず知らずに笑みがこぼれたよ。

「ははははは……」

高らかに笑いながらばか先輩は、郵便局に戻ったんだ。

「僕は早さが自慢です。さあ、もっと仕事を言いつけてください」  
でも主任ピグは、今度は何にも言わなかった。ばか先輩がきよんとしているのと、ようやく口を開いたんだ。

「君ね……」

「はいはいっ」

ばか先輩は、身を乗り出して主任の次の言葉を待ったよ。

「落ち着きたまえ」

「は？」

「一つずつ荷物を運ぶんじゃないで、まとめて持って行って欲しかったんだよね。言い終わらないうちに行ってしまうんだからね。君は」

そうして、ばか先輩は郵便物の区分けの作業にまわされてしまったんだよ。

わる子ちゃん家のクリスマス

クリスマスイブの夜にわる子ちゃんの家テーブルを彩るのは、手作りケーキなんだ。

わる子は、せっせと生クリームでケーキに飾り付けをしていた。

双子の兄のわる夫は、イチゴを載せている。

「わる夫とゆつくり話す機会はなかったわねー」

「ほんと、ほんと。学校じゃすれ違いだからねー」

二人は、仲良くケーキを作り終えたよ。その時、絶妙のタイミン



グで、ピンポンと玄関でチャイムが鳴ったんだ。わる子が出て行くくと、ばかピグが立っていた。ばかピグは真っ赤な顔をして言ったものさ。

「ひどいんだ。食いしん坊ピグがやって来て、ぼくの分のケーキまで食べちゃったんだよ。ゲーム貸してあげるからケーキちょうだい」  
「いいわよ」

わる子にはっこり笑ってばかピグを家に招きいれたよ。

「じゃあ、お茶を入れよう……」

わる夫がお湯を沸かし始めると、ピンポンとチャイムが鳴ったよ。

わる子が出て行くと、玄関にはだめ子が立っていたんだ。

「ママもパパも仕事なんだ。つまらなくて。だからって、ひとの家に押しかけたりしたらだめじゃんって思ったんだけどねー」

だめ子は、足先でタイルの上をなぞりながら、決まり悪そうに言っただよ。

「いいよ。ばかピグちゃんも来てるんだから。たくさんいる方が楽しいし」

「ええっ？ ばかピグちゃんったら、だめじゃん！」

だめ子は、自分もただけどってぶつぶつ言いながらわる子の家にお邪魔したよ。そこに立て続けにチャイムが鳴ったんだ。今度は、わる夫が玄関に出てみた。

そこにはかわいいツリーを抱えた自慢ピグがいたんだ。

「やあ。このツリーをかわいいだろう？ アイドルピグのサイン入りなんだ。自慢したくってさあ……」

「そりゃちょうどいいや。ばかピグとだめちゃんも来てるから、一緒にケーキを食べないか？」

「ほんと？」

自慢ピグは、目を輝かせたよ。

「みんなに自慢できるね！」

「ああ、自慢したらいいよ」

自慢ピグは言った。

「わる夫。君は、いいやつだ。以前は、同時に風邪をひいた事があ  
るし、運命を感じるよ」

来客たちにわる子とわる夫は、大忙し。そこに天才ピグがやって  
きた。

「おお間に合った。間に合った……」

天才ピグは、何やら発明品を抱えてる！

それは丸い型にカッターがついたものだった。

「ケーキカッター。試させてくれないか」

天才ピグは、わる子パパとママと……わる子とわる夫、そしてば  
かピグ、だめ子、自慢ピグと客人の数を数えると自分をプラスして、  
カッターを八のメモリに合わせたよ。そして一気にざっくりと、八  
切れに切り分けたものさ。

「ちよつと、だめじゃん！先にローソクを飾らなきゃ……あーあ」

「それよりも自慢のこのツリーを拝んでくれないか」

「キヤー。いつの間にか食いしん坊ピグがついて来てる！八切れ  
じゃ足りないよ！」

「このカッターは、切るのは簡単だけど、洗うのが大変だな。うー  
ん」

そんなこんなで、わる子ちゃんの家での時間はとつてもにぎやか  
に過ぎて行つたんだよ。

メリークリスマス！

#### 14・インチキ堂とナイトピグ

インチキ堂の店主のおやじは、インチキ臭い。売っているものも微妙なんだよ。それでもお店が潰れないのは、がらくたの中に掘り出し物があるからなんだ。

放課後の教室でクラスメートから、インチキ堂の話聞いたナイトピグは、行ってみたくてたまらなくなったよ。でも誰も乗っていないんだ。

「あのお店は、値段が高いからなあ。お小遣いで買える物は限られているよ」

「ばかピグは言ったよ。」

「それにインチキ臭いものね。同じお店に行くなら雑貨屋さんとかもつとカワイイところがいくらでもあるしー」

「そう言ったのは、お洒落ピグだった。」

「うーん。でも一回は行ってみたいなあ……」

でもみんな首を横にふるだけさ。そこに現れたのはだめちゃんだ。「みんな、だめじゃん。ナイトピグちゃんは、まだこの土地に不慣れなんだから付き合ってあげなくちゃ」

「あのう……」

そこに乙女ピグが、もじもじと言ったよ。

「私は、一緒に行つてあげてもいいかなあ……」

「ありがとう。乙女ピグちゃん……」

ナイトピグはにっこり微笑んで言うと、だめ子に向き直った。

「だめ子さんも行ってくれるんですよね？」

「ナイトピグちゃんがその方がいいのなら、行かなきゃだめよね」

そうしてナイトピグは、乙女ピグとだめちゃんと三人でインチキ堂に行く事になったよ。

「待ちたまえ。僕も行くよ」

名乗り出たのは、自慢ピグだ。実は、自慢ピグは乙女ピグちゃん

が好きなんだよ。乙女ピグは、びっくりしたような顔で自慢ピグを見た。

「わあ。自慢ピグちゃんって面倒見がいいのね」

「もちろんさ」

自慢ピグは、フンと得意そうに鼻を鳴らしたよ。乙女ピグちゃんから感心されて、内心はうきうきだったんだけどね。

「じゃあ、四人で行きましょう」

だめ子がそう言って、四人は早速インチキ堂に向かったんだ。そうして、学校から十分も歩くとインチキ堂に着いたよ。木の幹を斜めにカットした看板にインチキ堂の文字が彫られている。野ざらしになった看板は、茶色くなってそれなりにいい味を出していたよ。店の引き戸には、張り紙がしてあった。

『小籠包、餃子はじめました』

「ねえねえ。だめ子さん……」

ナイトピグが、だめ子に話しかける。

「ここって、食べ物も売っているの？」

「インチキ堂は、何でも屋なのよ」

だめ子は、笑って言ったよ。

でも小籠包や餃子って、豚の肉じゃないか。いくら種類が違っても、豚の仲間だ。そう思ったらゲテモノ料理を出されているみたいで、ナイトピグはちよつとイヤな気持ちになったものさ。

そんなナイトピグを見透かしたみたいにおやじは言ったよ。

「小籠包も餃子も鶏肉で作ってあります。どうです？ 肉汁たっぷりの小籠包と、カリカリに焼いた餃子。おいしいですよー」

店の奥から良い匂いの湯気が立ちのぼってくる。丁度、夕飯どきとあって、ナイトピグたちのお腹がぎゅうつととなったよ。

「でも普通のお店のより高いんでしょ？」

だめ子は、はっきりと言った。

「大丈夫です。みんなひとつ1円ですからー」

「まあ。そつなの？」

乙女ピグは、目をぱちくりさ。

「じゃあ小籠包をひとつください」  
ナイトピグが進み出た。

「まいど！ この小籠包は、是非、餃子とセットで食べてください。小籠包を食べた後に餃子を食べると格別なんですよねー。餃子どうです？」

餃子も売ろうしてくるおやじにナイトピグは、さすがインチキ堂だっと思ってたよ。

「ちっちゃいから、二つくらいはすぐに食べちゃうかも。じゃあ餃子もください」

ナイトピグは、カウンターに2円を出した。それを見たみんなもナイトピグにならって、お財布からお金を出したよ。

「はいはいっ。じゃあ、すぐに持ってきますよー」

奥からお皿に載った小籠包が出てきて、わあってみんなの歓声があがったよ。

「あふいいい！（あついい）」

みんなは、ふうふう言いながらかじりついた。だけど変なんだ。

「あれ？ これ肉汁しか入ってないじゃないか！」

ナイトピグが叫んだ。

「そうですよ。肉汁たっぷりですよ」

インチキ堂のおやじが得意げに言った。

「くーっ、インチキだ！」

自慢ピグが地団太を踏んで悔しがっている。

「ここが、インチキ堂だっけわかってたのに」

乙女ピグも悔しそうだった。

「あのね、だましたりしちやだめじゃん！」

腰に手を当てて、だめ子が叫んだよ。

「だっけ、ここ、インチキ堂だし。だから餃子とセットでお勧めしたんですよ。中の具は、みんな餃子に入ってるんですね」

みんなは、不満でいっぱいだったんだけど、もうお金も払ってし

まったし、食べちゃったから仕方ないね。おやじは、文句を軽く聞き流して、奥で餃子を焼いているよ。

「これは、美味しいですからね！。気を取り直して食べてください。この餃子こそが、うちの売りなんですからね」

「ほんとかなあ……インチキくさいなあ」

ナイトピグが呟いたよ。

「まあ、話のタネに食べてみようよ。ここってたまに当たりがあるし」

だめ子が、さっきから呆然としているナイトピグに囁いたよ。それでナイトピグは、気を取り直して、餃子をいただこうって思ったんだ。しばらくして皿の上にカリッカリに焼いた餃子が並べられた。薄い羽がついているのが食欲をそそったよ。ナイトピグは、早速、箸を伸ばしたんだ。

そしたら、なんと、箸をするりとすり抜けた餃子が天井近くまで舞い上がったんだ。

「えーっ!?!」

ナイトピグは、慌てて空中で箸を振り回したよ。けれど羽の生えた餃子は、箸なんかじゃ容易につかまらない。そのうちに餃子は、店を出て飛んでいってしまったんだ。他のみんなの餃子も宙を舞って、それから外に出て行ってしまったよ。

「インチキじゃないか!」

ナイトピグは、おやじに食ってかかったよ。

「ああ、どうやら命が宿ったようだ。精魂込めて焼きすぎたかもしれない……」

おやじは、涼しい顔で空を見上げて言ったんだ。

「あ、1円だけは、みなさんにお返ししますよ。今後ともご贖目に」

かくて、インチキ堂は営業時間を終了してしまったんだ。ナイトピグはくやしくて、閉店したインチキ堂を恨めしそうに見ていたよ。そんなナイトピグの肩をぽんと叩いたのは、だめ子だった。

「世の中には、不条理な事もあるって、知ってなきゃだめなのよー」  
振り向くと、乙女ピグと自慢ピグが温かい目でナイトピグを見て  
うなずいていた。

「まあ。勉強になったわよねえ」

乙女ピグは、目をぱちくりさせている。

「まあ、インチキ堂ときたら、予想できた事だからねー」

自慢ピグも平気そうなんだ。

少しずつこの街の事がわかってきて、そして人生を知ったナイト  
ピグだったよ。

## 15 ナイトピグとジャージ

学校帰り。ナイトピグの足は、自然にインチキ堂に向かっていたよ。インチキ堂でナイトピグは、空に舞うギョーザを見て、それから人生を知った。そう思ったらインチキ堂の持つ不思議な魅力から離れられなくなったんだ。インチキ堂の前に立つと、ナイトピグは中を覗きこむ。先日と違って、今日は店先にかっこいいジャージが飾られていた。青くてサイドに白いラインが入っているんだ。胸元のワンポイントの剣のマークがいかしているんだよ。

「ジャージまで売っているのか」

ナイトピグは、つぶやいた。

「いらっしやい」

インチキ堂のおやじが揉み手をしてやって来た。

「このジャージは、三着仕入れたんですけどね。もう最後の一着なんですよ」

ナイトピグは、そんなの嘘だっと思ったよ。うまいことを言っただけさ。着るものは、ママに任せているからね。

「見ているだけさ。着るものは、ママに任せているからね」

インチキ堂のおやじは目を丸くして言ったよ。

「おお！ そいつはもったいない」

「もったいないって？」

「そうですとも。このジャージは背の高いキミにとっても似合っと思っただなあ。キミのために作られたようなものさ」

「そんなのボクは信じないよ」

ナイトピグは、このままおやじと話していても丸め込まれてしまうと思っただけさ。さっさと家に帰ったんだ。ナイトピグが、玄関のドアを開けると、なんともいい匂いが漂ってきた。ママがいそいそとナイトピグの大好きなシチューを運んできたよ。

「おかえりー。さあ食事にしましょ」



ママがにっこりと微笑んだ。ナイトピグがシチューを食べているとママが話しかけてきたよ。

「ママ。今日とっても素敵なものを買ったのよ」

ママが奥から出してきたものは、なんとジャージだったんだ！

ナイトピグは、目をぱちくりさ。インチキ堂にあったものとは違い、黒色だったけどおんなじデザインだ。

「ママ……。それ、どこで買ったの？」

「インチキ堂ってお店なのよー」

ママはにっこりと微笑んだ。やっぱりとナイトピグは思った。なんとママもあのジャージに目をつけていたなんてね。それでもあのジャージは気になっていたから、ナイトピグはラッキーって思ったよ。翌日、学校に行こうと準備しているナイトピグにママが言ったんだ。

「今日は、昨日買ったジャージを着て行ってね」

「ええつ。ボク、私服で行こうと思うんだけど」

「ママはこのジャージを着たナイトピグちゃんが見たいのよー」

ナイトピグは、ジャージで登校するなんてかっこ悪いなって思ったけど、これも親孝行だとしぶしぶママの言う事に従ったよ。

「わあ。似合うことー！」

ママがきらきら目を輝かせている。ナイトピグは、ママの喜ぶ顔を見ていると、それ以上なにも言えなくてそのまま家を出たんだ。学校の近くまで来ると、声をかけてくるピグがいたよ。

「やあ！ 君、かっこいいなあ」

振り向くとそこにはばか先輩がいた。なんとナイトピグと同じ剣マークのジャージを着ているよ。色はナイトピグのと違ってグレーだったけどね。

「そのジャージ。似合っているよ」

「はあ。ありがとっございます」

「君。転校してきてまだ部活を決めていないだろう？ ぜひ陸上部に入りなよ。同じジャージのよしみで。ははは」

ばか先輩は、ナイトピグの背中をばしばし叩きながら親しげに話しかけてくる。ナイトピグがためらっていると、ばか先輩はさらに言ったよ。

「最初は見学からでいいんだよ。じゃ放課後にね」

それだけ言うと、ばか先輩は軽やかに走り去った。学校にジャージを着てくるのは、ばか先輩のように部活の早朝練習があるピグくらいなんだ。ナイトピグは、帰宅部なのに恥ずかしく思いながら教室へと入ったよ。教室のみんなは、ほとんどが私服を着ていた。けれどナイトピグを変な目で見るピグは誰もいない。そしてわずかに陸上部員の自慢ピグとばかピグだけがジャージ姿だったよ。そんな様子にナイトピグはほっとしたもののさ。一時間目の体育の授業では、着替える必要のないナイトピグは、自慢ピグとばかピグとともにそのまま体育館に行つてバスケットボールで思う存分力を発揮したんだ。ちよつと汗をかいたけれど、ジャージは通気性がよかつて不快な思いをする事もなかったんだよ。

「ジャージは便利だよねえ」

ばかピグがにこにこ話しかけてきた。

「でもなんか一日中、ジャージってかつこ悪いんじゃないかなあつて思うんだ」

「どうしてだい。剣マークのジャージのデザインはかつこいいんだぜ？ 僕は家でもジャージだよ。コンビニに行くときもジャージ。寝るときもジャージ。ジャージって便利だしかつこいいし、万能だよ！」

ナイトピグは、かぶりを振った。どうもばかピグは話を通じない。ナイトピグは黙って自分の席についた。学校にいるあいだじゅう、ナイトピグは違和感ありまくりだったんだ。誰かが自分を見て陰口をたたいてるんじゃないかとさえ思えたよ。けれど不思議な事にナイトピグのジャージを褒めてくるピグはいてもけなす者などひとりもないんだ。

二時間目の国語の時間もジャージ。午前中ずっとジャージ。お昼

ごはんも読書の時間も掃除の時間もナイトピグはジャージで過ごした。乙女ピグが恥ずかしそうに「ナイトピグちゃんのジャージ姿っていいわね」って言った。だめちゃんも「なかなかいいじゃん」って言うてきたよ。そんな周りのピグたちを見て、ナイトピグは、自分が異世界に迷い込んだ気さえたものさ。もしかしたら自分がかしいのかなって、ナイトピグは自分を疑ってみた。この学校へは転校してきたばかりだし、土地柄かもしれないと自分を納得させたんだ。

すべての授業を終えると、教室に担任の先生がやって来た。

「今日は、みなさんに重要なお知らせがあります」

先生は神妙な顔をすると言ったんだ。

「ナイトピグ君。ちょっと前へ」

ナイトピグは、びくつとしたよ。背中を冷たい汗が流れた。いたいボクが何をしたというのだろうか……。しかし、逃げも隠れもできない。ナイトピグは、重い足取りで先生のもとへと歩いていった。「実は、来月からこの学校の制服がジャージになります。このナイトピグ君の着ている剣マークの黒いジャージがそうです。みんな。来月までにジャージを買い揃えておくように」

「ええっ!？」

ナイトピグは驚きのあまり大きな声を出してしまった。

「君のその服装は非常によろしい。みんなのお手本だ。さあ、くるとり回ってみんなによく見せてあげなさい」

ナイトピグは、先生に言われるまま不器用にぐるぐると回ってみせた。かくて翌月からピグたちの学校は、色とりどりのジャージ姿の生徒でいっぱいになったんだよ。

## 16・大御所ピグの衣替え

衣替えの季節がやって来た！

「去年は何を着ていたのかしらー」

大御所ピグは、ため息をひとつついた。それくらいクローゼットの中は空っぽだった。何故って大御所ピグは、ドレスを褒められると嬉しくなって気前よく人にあげてしまっただ。だから仕方がないんだよね。さっそく大御所ピグは、洋服を新調しに出かける事にしたよ。

出かける支度をしていると、執事ハムがやって来た。

「大御所ピグさま。今日はお車でお出かけですか？」

大御所ピグは、なんと車を五台持っているんだ。出かける車を指定すれば、執事ハムが車庫から出してきて玄関先にぴたりつけてくれる。さてどうしようかって、大御所ピグは考えた。そして言ったよ。

「歩いていくわ」

「ええっ！」

びつくりした執事ハムが床上五センチくらい飛び上がったよ。それもそのはずだ。大御所ピグの家は、小高い丘の上に建ってるんだ。ピグバスで停留所軽く十箇所はある。

「街まで、全部歩いていくのは遠ございます。せめて途中までお送りいたします」

大御所ピグは、ピグタウン地図を広げると眉を寄せてものさしを当ててみた。

「そうねえ。この間わる子さんと出かけた時はへりを使ったし、やっぱり遠いわよねー」

大御所ピグは、短い丈の動きやすそうなドレスを示しながら言ったよ。

「ほんとは自然に触れながら行きたかったの。自分で運転していく

と景色が見られないし」

「さようでございますか。では」

執事ハムはぱちんと指を鳴らした。間もなくえっほ、えっほの掛け声とともにハムちゃんたちの担ぐ籠が現れたよ。かれこれ十匹くらいいただろうか。

「あら。これ。いいわね。じゃあ行ってくるわ」

大御所ピグは、たいそう喜んでいそいそと籠に乗り込んだものさ。大御所ピグは、丘を降りていく籠の中から景色を堪能したよ。創作のアイデアも浮かびそうだ。丘を下り街の中に入ると大御所ピグの視界にとても珍しい光景が広がったんだ。赤や青や色とりどりのジャージを着たピグたちがいるじゃないか。

「あの子たちは、どうしたのかしらー？」

大御所ピグ。籠からひよっこりと顔を出すと、お付きのハムちゃんに訊いてみた。

「ああ、ピグ学校の生徒達ですよ。制服がジャージに変わったようですね」

一番、近くにいたハムちゃんが答えたよ。

「なるほどねー。ゆっくり街を見物すると、思わぬ発見があるものねー」

やがて籠は、街中で一番高いインピグタワーの前に到着した。大御所ピグは、ひよいと籠から降りたよ。

「どうもありがとう」

「お気をつけて行ってらっしゃいませー。お帰りは？」

「そうねー。また連絡するわ。迎えは車で大丈夫よ」

ハムちゃんたちが空の籠をわっせわっせと担いでいくのを見送ると、大御所ピグは、目的の場所に向かって歩き始めた。目指す先は、デザイナーのウンドさんの研究所だ。大御所ピグは、いつも彼女のところでドレスを作っているんだよ。ピンポンとチャイムを鳴らすと、スタッフのピグが現れた。

「大御所ピグさん。いらっしやい」

「こんにちはー。夏物のドレスを作っただけで来たのよ」

「そうですか。では先生を呼んでいただけますのでお待ちくださいねー」

大御所ピグは、応接室に通されたよ。ウンドさんの事務所はさすがにデザイナーだけあってなかなかお洒落なんだ。机も椅子もウンドさんがデザインしたものだ。大御所ピグは、ウンドさんのデザインをとつても気に入っているんだよ。

「こんにちはー。大御所ピグさん。ようこそ」

ウンドさんがにこにこしながら現れたよ。

「こんにちは。ウンドさん。さっそくですけど私のお洋服をこしらえて欲しいのよー」

「ええ。ええ。だと思って、これを用意してきたのよ」

ウンドさんは手にしたファイルを広げると、デザイン画が一杯に描かれていた。

「大御所ピグさんは、ちょっとマンネリを打破して、何かこう画期的なデザインがいいと思うのー」

「奇遇ね。私もそう思っていたのよ」

二人は、スタッフの運んで来た紅茶を飲みながら話し込んだよ。大御所ピグにとってウンドさんは、とても気のあう友達でもある。なぜって大御所ピグは、ウンドさんに自分と同じ匂いを感じているんだよ。

「今日の丈の短いドレスは良く似合っているわ」

「ええ、ちよつとイメチェンしてみたの。今日はここまで籠で来てみたのよ。新鮮だったわ」

ウンドさんは、目を輝かせて言ったよ。

「まあ！ 籠だなんて超素敵。ああ、なんだか創作意欲が湧いてきたわー！」

ウンドさんは、やにわにスケッチブックを取り上げると一気にデザイン画を仕上げたよ。

「籠型のソーラーカーよ。どうかしらー」

「これはいいわね。こんな車があったらうちのハムちゃんたちが疲

れなくていいものね」

大御所ピグは、口に手を当ててほほと笑った。答えるようにウインドさんもふふふと笑った。

「今度のお洋服はどんなのがいいかしらね」

ウインドさんは、ぴしつと鉛筆を立てると大御所ピグを見つめた。そしてふたたびスケッチブックにデザイン画を描きまくったんだ。出来上がったスタイルに大御所ピグは、おうと叫んだよ。そこにはとっても華やかなジャージが描かれていたんだ。黒とピンクの二色使いで、なんと蛍光塗料まであしらわれている。

「まあ。ウインドさんには、私の気持ちがわかってしまうのね。私、ここに来る前にジャージの集団を見たのよー」

「大御所ピグさんがジャージを着るって新しいと思うの。これは、リバーシブルで片面を水玉模様にしようかしら。あ、待って」

ウインドさんは、再び猛スピードでデザイン画を描きはじめたよ。そして仕上がるとそれを大御所ピグに見せた。

「高速ジェットシューズよ。これも特注で作らせるわ」

ウインドさんのデザインしたシューズには、鳥の羽の模様があしらってあった。つま先と踵が面取りしてあって鳥のように軽やかに走れるらしい。

「まあ。すっごくいかしたデザインなことー！」

大御所ピグは、胸の前で手を組んで大喜びさ。

「大御所ピグさん。どうなさる？ 着替え用に三着ほど作っておいたらいいかしら」

「ええ。願いますわ。着こなし方は、どうなのかしら」

ウインドさんは、デザイン画を指しながら言ったよ。

「執筆して疲れてもこのまま眠れるし、ちょっとしたお買い物とかハウスウェアには最適よ。大御所ピグさんの趣味のお庭のお世話をする時にもぴつたり。シーンに応じて、裾を捲り上げたり、前を開けたりファスナーを閉めたり。それから……」

「それから？」

大御所ピグがおうむがえしに訊いてみる。

「やっぱり、ジャージだから、スポーツをした方がいいみたい」  
「なるほど！」

大御所ピグは、ぽんと手を打った。帰宅すると大御所ピグは、さつそく使用人のハムちゃんたち全員を集めて、屋敷の隣にスポーツクラブを建設させたんだよ。それから使用人全員のジャージを追加発注して、あらたにスポーツクラブの経営に乗り出したらしい。



## 17・臆病ピグの臆病退治

臆病ピグは、臆病な子。いつもびくびくしているんだよ。だから友達ひとり作るのにもとつても苦労する。だって初対面のピグに話しかけられただけで、きゃあつと逃げちゃうんだからね。学級委員のだめちゃんは、非常に困っていた。臆病ピグの臆病っぷりは、度を越している。あれくらいになると学校生活だって都合が悪い。どうやったら臆病ピグが、普通の水準の臆病になるのか。だめちゃん、学級委員として考えていたよ。

「だめ子さん。何か悩んでいるんですか？」

隣の席のナイトピグが話しかけてきたよ。

「臆病ピグちゃんの臆病を治したいのよねえ」

ナイトピグは、目をぱちくりさ。

「クラスの事を考えるなんて、さすがだめ子さん。でも臆病ピグちゃんの臆病は治らないと思うよ」

するとナイトピグをきつと睨みつけて、だめちゃんは言った。

「簡単にそんな事言っちゃだめじゃん！」

ナイトピグがびくんとなったよ。

「あきらめちゃ、だめだめなのよ。わたしはここを卒業するまでになんとか臆病ピグちゃんの臆病を治したいの！ わかった？」

ナイトピグは、だめちゃんにらまれてぞくぞくしたよ。そしてその正義感にいたく感動したんだ。

「ぼく、臆病ピグちゃんの臆病を治す方法を考えてみます」

思わずだめちゃんにそんな風に言ってしまったナイトピグだったよ。とは言え、あてもなんにもないんだ。ナイトピグは、廊下をとぼとぼ歩いていたよ。すると向こうからばか先輩がやって来た。彼は人懐っこい笑顔で話しかけてきたよ。

「やあ！ 新聞少年じゃないか」

「こんにちは」

朝、ばか先輩はトレーニングで、ナイトピグは新聞配達をしているから、しょっちゅう顔を合わせるんだよね。

「さて……君の名前はなんて言うのだったかな」

ナイトピグは、ばかピグ経由でばか先輩の事は知っていたけれど、向こうは知らないみたい。

「ナイトピグです」

「そうか。うん。ナイトピグ君。何か困っているようだね。相談にのってあげよう。はっはっは……」

ばか先輩は大きな耳をふるんぷるんと動かして言ったよ。

「実は……」

臆病ピグもばか先輩みたいになれたら、問題はすっかり解決するだろうと思ったナイトピグ。臆病を治す方法を尋ねてみたんだ。ばか先輩は、にこにこことナイトピグの話す事を聴くと言いつつ放った。

「臆病を治す方法？ 簡単さ」

「ええつ。あるんですか？」

「明日、相談室に専門員がやって来る。臆病ピグ君をそこに連れて行ったらいいよ」

よくよく訊いてみると、今まで相談室では学校の先生が相談にのっていたけれど、新しく外部から相談員がやってくるらしい。

「なるほど」

ナイトピグは、早速臆病ピグを相談室に連れて行く事にしたよ。でも連れて行くまでが大変だったんだ。なんたって臆病ピグ。だめちゃんはもとより、ナイトピグのことまで怖がるんだからね。

「君の声は大きくてよく通るから、僕、怖い」

ナイトピグの話しかけに、臆病ピグは柱の影から体を半分出してびくびくしながら答えた。仕方なくナイトピグは、ばかピグ経由で臆病ピグに話をしてもらい、何とか相談室まで連れ出すことに成功したんだ。

相談室は、秘密が保てる小さな部屋だった。ナイトピグとばかピグは、連れ立って相談室の中に入ったんだ。だって、臆病ピグがひ

とりで相談室に入るのは怖いって言うんだから仕方がないね。ところが、ナイトピグとばかピグは、相談室に入っただけと叫んだよ。臆病ピグがびくん！ としている。

なんと相談室にいたのは、インチキ堂のおやじだったんだ。鼻眼鏡をかけて変装していたけど、ひと目でわかったよ。

「インチキくさいなあ……」

開口一番、ナイトピグは、つぶやいた。

「なんと失礼な。わたしはインチキ協会の相談員の資格を持っているのです。ちゃんと学校から依頼されてここに来たんですからね」

おやじは、ふんつと鼻を鳴らして、相談員の資格証を突き出したよ。インチキ協会長の印が押されたそれはそれはインチキくさいものだった。

「さあ……ここにお座りなさい。わたしが君の臆病神を追い出してあげよう」

おやじがやさしい声で臆病ピグに言った。鼻眼鏡のインチキおやじは、怖いというよりもこっけいで、臆病ピグはためらいなく椅子に腰掛けたよ。ナイトピグとばかピグから、「おお……」とちよつと驚きの声が漏れたものさ。

「さあ、君の不安な気持ちをみんなわたしに言いなさい」

やがて臆病ピグは、ぼつぼつと話し始めたよ。おやじは根気よく臆病ピグの話を聴いていた。臆病ピグは、ずっと語り続けた。ナイトピグとばかピグが、「あああ」とあくびをしても、延々と相談は続いたんだよ。やがて疲れて臆病ピグは黙ってしまった。

「もういいのかい？」

「うん」

おやじは机の下に隠し持っていた白い大きな袋を取り出した。袋の口はおやじの手でしっかりと握られている。

「いいかい。臆病ピグ君。君の話したことはみんなここに入ってしまったよ。臆病の種がここにあるんだ」

臆病ピグは、じつと袋に見入った。

「そう言えば、僕、なんだかさわやかな気分。怖い気持ちが薄くなってきたよ」

「そうだろう。そうだろう。じゃあ、これからこの袋を開けるよ」「ええっ!？ どこかに捨ててきてくれるんじゃないの？ そんな事をしたら臆病の種が逃げて僕のところに戻ってきてしまうよ!」

臆病ピグが泣きそうなりながら顔を覆う。

「大丈夫ですよー」

おやじはインチキくさく微笑みながら、ハアツと言う掛け声とともに袋の口から手を放し、手前に引いた。

「わあ!」

臆病ピグの体が跳ね上がった。ナイトピグとばかピグも肩をすくめ、わっと叫んでかたく目を閉じた。もしかしたら、臆病の種が自分たちのところに来るんじゃないかって思いながらね。でもなんにも起こらなかつたんだ。ナイトピグとばかピグが目を開けると、なんとおやじの指先に白い小鳥が止まっていたんだよ。おやじは、小鳥を臆病ピグに差し出しながら、言った。

「この子はとっても臆病なんだ。君がしっかり育ててあげなさい」

臆病ピグは素直に手を差し出したよ。自分よりも弱いものは、ちつとも怖くなかつた。むしろ大切に守つてやらなければならぬものなのだったんだよ。臆病ピグは、おやじからもらった小鳥をペットとして大切に育てたんだ。

そして前よりも少しだけ強くなつたんだよ。

18・保険天国。保障が服を来て歩く。（前書き）

この作品は、私が活動報告にアップしているお題をタイトルに書きました。お題をもとにあとからストーリーを考えています。今回のお題は、「保険天国。保障が服を着て歩く」です。

## 18・保険天国。保障が服を来て歩く。

大御所ピグのところには、日々、たくさんの来客がある。大御所ピグは性格がおおらかだから、時間の許す限りお客さんには会うようにしているんだよ。小説のネタが拾えるかもしれないしね！

今日やってきたのは、ブイアイピー生命保険の保険ピグちゃんだった。

「大御所ピグさん。こんにちは。保険ピグです」

「あら、いらつしゃい。そう言えば私、ブイアイピー保険には入っていないかったわねえ」

「大御所ピグさんは、万が一のことがあっても保険で保障する程度の金額は、自分で払ってしまえるんですもの。だから必要ないのですね」。でも今日、お勧めするプランは、画期的なのです」

「まあ！」

大御所ピグの目がきらーんと輝いたよ。

「それはどんな保険かしらー」

大御所ピグは、大喜びで保険ピグを客間に通したんだ。踏みしめるのが申し訳ないほどのゴージャスな絨毯は、三半規管がどうにかなったのかと思えるほどにふわふわだった。……それはそれで、ちよっと問題だけどね！

保険ピグは、革張りのソファに座ると微笑んで分厚いパンフレットを取り出したよ。大御所ピグは、身を乗り出してその説明を聴いている。

執事ハムちゃんは、遠くからその様子をじっと見ていた。大御所ピグは、おおらかで気がいいように見えて実はなかなか鋭い。口車に乗せられてへんてこな保険を買わせられるほど、単細胞じゃないんだよ。それだけのピグだからこそ、この屋敷を守っているとも言える。亡くなった大奥様から大御所ピグの事をくれぐれもよろしくねと頼まれている執事ハムだけど、そこは安心してゆったりと構

えていたんだ。

「……と言うわけなんですね」

保険ピグが長い長い話を終えた。

「どうでしょう？ このプランは。大御所ピグさんにぴったりの保険だと思っんですよ」

しばし沈黙が流れた。大御所ピグが食い入るようにパンフレットの文字を読み込んでいる。保険ピグは、大御所ピグの表情を窺ったよ。

「こっ、これは……保険が服を着て歩いている……なな、なんて斬新なのかしら」。加入するわ」

大御所ピグは、興奮状態で立ち上がると胸の前で手を合わせて叫んだんだ。保険ピグもまた椅子から立ち上がった。二人は、顔を見合わせるとがっかりと手を組んだよ。

「ブイアイピー保険は、利用者様の大切なパートナーなのです……」  
保険ピグは、ちょこんと首をかしげて言ったものさ。

数日後。大御所ピグのもとに保険ピグが訪れた。

「大御所ピグさん。こんにちは。こちらが大御所ピグさん専用組んだ保険のプランです」

保険ピグは一体のアンドロイドを連れていた。先日、パンフレットで示されたのはこれだったんだ。アンドロイドは、とても整った顔立ちをして男性か女性かわからない中性的な魅力があつたよ。そしてしなやかなボディを包み込むように白地に黒いラインの入ったユニフォームをまとっていた。それがまたとってもカッコよくてアンドロイドに似合っている。大御所ピグは、思わず見入ってしまったよ。

「はじめまして。わたしは、ブイアイピー保険から来たアンドロイドのQと申します。よろしくお願ひします」

Qちゃんは甲高い声で自己紹介をすると、ぺこりと頭を下げた。

「これがあの保険……さすがお高いはずだわ」

「保険に関する説明はお話したとおりですが、わからない点がありましたら、なんでもこのQちゃんに訊いてくださいね。また不都合が生じましたらいつでもブイアイピー保険カスタマーセンターにご連絡ください。それではっ」

保険ピグは、丁寧にお辞儀をして帰って行った。

あとに残されたQちゃんを大御所ピグは、自分の部屋に招き入れた。Qちゃんは保険だからいつも一緒にいてもらえばいいかなと思っただよ。

大御所ピグは、依頼されていたエッセイを書くことにした。それは、雑誌「ピグ生活」の巻頭をかざるものだったんだ。大御所ピグは、のりのりでパソコンを打ち始めたけれど、途中で手が止まってしまったよ。

「うーん。この表現は、さっきも使ったわねえ。文章が締まらないわ。何かいい言葉はないかしらー」

そのとき、Qちゃんが言った。

「“考え込む”の類語なら、“思案に暮れる”がありますよー”なるほど”」

大御所ピグの顔がぱっと明るくなったよ。大御所ピグのタイピングスピードがぐっとあがる。やがて大御所ピグは、五十枚もの原稿を一気に書き上げたんだ。

「Qちゃん。どうもありがとう」

「いいえ。わたしは、保険ですからー。言葉に詰まったときにサポートするのも保障のうちなのです」

Qちゃんは、どや顔で言ったよ。大御所ピグは、この保険……Qちゃんのことが大層気に入ってどこに行くにも連れて歩いたよ。

土砂降りの雨の日。走り去る車のしぶきが大御所ピグのドレスにかかってしまった時、Qちゃんは、即座にウインドさんのお店に走って、注文してあった服を取ってきてくれた。

「Qちゃん。どうもありがとう」



「いいえ。保険ですからー」

「あなたもいつも同じ服ね。着替えがあつたほうがいいわ」

大御所ピグは、メイドのハムちゃんを呼びつけると、Qちゃんのために数着の洋服を仕立てさせたよ。大御所ピグはQちゃんを季節に合った洋服に着替えさせて、執筆するときもスポーツに出かける時もそばにおいておいたんだ。そんなQちゃんを嫉妬深い目で見つめるメイドハムちゃんの姿があつたよ。

「あのQちゃんがいるせいで、大御所ピグ様に呼びつけられる回数が減ってしまった。これでは、わたくし達の仕事がなくなってしまう……」

メイドハムは、ハンカチをぎりぎりとかみ締めた。そして我慢も限界を超えたんだ。

ある日。大御所ピグがお風呂に入っている間を見計らってメイドハムは、Qちゃんに言ったよ。

「ちよつとあなた、なんのつもりなの！」

「保険のつもりです」

Qちゃんは、けろりとして言ったものさ。

「あなた、生意気なのよ！」

メイドハムは、Qちゃんの頬を平手打ちした。だけど……。

「あいたたた……」

手が真っ赤にはれ上がったのは、メイドハムちゃんのほうだったよ。そんなメイドハムちゃんをQちゃんは、かいがいしく手当てしてくれた。

「あつ、あなた。一体どうして……」

「使用人のみなさま全員の特約つきですからー」

Qちゃんはどうやら顔で言ったよ。メイドハムちゃんは、はっと自分の心の醜さに気づいたんだ。

「Qちゃん。ごめんなさい」

「いえ。お構いなく」

Qちゃんは、保険を執行するために必要と思われる日常会話のパ

ターンをぜんぶ織り込んでいたんだけど、メイドハムにはまるでQちゃんが生きたピグみたいに思えたよ。そして、大御所ピグがQちゃんを大事にするのも仕方がないと納得したんだ。そうやってQちゃんは、少しずつ大御所ピグの使用人たちの間でも受け入れられるようになってきたよ。

いつものように大御所ピグは、Qちゃんを助手席に乗せて、赤いスポーツカーでお出かけた。これからピグ出版社に行くんだよ。スポーツカーに乗っている割りに、大御所ピグは安全運転だ。以前は、飛ばした事もあったけど、大御所ピグはなるべくQちゃんの保障を使いたくないと思っているんだ。

けどどうしたことだろう。ふもとまで降りる丘の途中で車がぴくりとも動かなくなっただ。大御所ピグが、とてもマニアックなレトロな車に乗っているからかなあ。

「車の様子を見てきます」

「まあ。Qちゃんは、車の整備もできるのかしらー」

「はい。もしものときの保障ですから」

Qちゃんは、どや顔で助手席を降りたよ。大御所ピグもエンジンを停めて一緒に車を降りたんだ。Qちゃんは、車の周りを一周したり下を覗き込んだりしたよ。

その時、急に車が動き出した。

「きゃあ」

大御所ピグは、叫んだよ。しかし、大御所ピグの叫びもむなしく、バリバリバリと大きな音が響いて、Qちゃんの体は、車の下敷きになってしまった。ぱちんとQちゃんの部品がはじけ飛んだ。車はQちゃんの体の上を通り過ぎると、大きな樹に激突して、ようやく止まったんだ。

「Qちゃんー！」

でもそこには、Qちゃんの姿はもうなくて、その残骸だけがちらばっていた。大御所ピグは、放心状態でそれを見つめていた。しば

らくして我に返ると大御所ピグは、ばらばらになった部品を拾い集めた。Qちゃんの手足はとても重かったけれど、そんな事は気にならなかったよ。執事ハムちゃんたちが駆けつけて、手伝いますと言ってもそれを突っぱねたんだ。なにしろ、それ以上に大きな悲しみが大御所ピグをおそっていたんだから。まもなく執事ハムの通報を受けて、保険ピグがやって来た。

「大御所ピグさん。大丈夫ですか」

「Qちゃんが……」

大きな布袋の中身が変わり果てたQちゃんの姿だった。大御所ピグの瞳から幾筋もの涙が零れ落ちた。たとえアンドロイドでもピグの形をしたものは辛い。大御所ピグは、自分の体の一部が欠けてしまったようにさえ思えたよ。

「新しい保障内容をお持ちします。Qちゃんの代替品を」

保険ピグが言ったけれど、大御所ピグはいいえと首を横に振った。

「もう、いいのよ。保険ピグさん」

「そんなことは出来ません。アンドロイドの破損の場合はこちらで代わりを用意する事にもなっています。いらないと仰るのは保険を解約する事と同じなのです」

「それでもいいのよ。保険を解約します」

大御所ピグは、肩を震わせながら言った。

そして大御所ピグは、それから二度と保険に入る事はなかったんだよ。

## 19・クリーミー選手権なる祭りはまだ終わらない(前書き)

この作品は、私が活動報告にアップしているお題をタイトルに書きました。お題をもとにあとからストーリーを考えていきます。

今回のお題は、「クリーミー選手権」と「祭はまだ終わらない」です。

ふたつを合体しました。

## 19・クリーミー選手権なる祭りはまだ終わらない

大御所ピグは、旅支度を終わるとさっそく自家用ヘリに乗り込んだよ。目指す先は、大御所ピグの妹の不動産ピグの屋敷なんだ。

「妹に会うのも久しぶりだわ！ 楽しみなこと。おみやげはこれでもいいかしらねー」

大御所ピグは、満面の笑みをたたえ、いくつもの箱を見やったよ。おつきのメイドハムちゃんと言ったものさ。

「これだけたくさんのおみやげを用意なさるなんて。さすが大御所ピグさま！」

「なんたつて赤ちゃんが生まれましたからね。わたしの甥ですもの。できるだけのことはしてあげたいのよー。あれから何ヶ月も経つし、だいぶ大きくなつたかしらね。ああ、会うのが楽しみだわ！」

大御所ピグは、胸の前で手を組んだ。ここちよい加速に身を任せ、大御所ピグは、妹とそのジュニアに思いを馳せて空を見つめたよ。

ヘリは、あつと言う間に妹の屋敷の上空に到着した。ゆっくりと降下したヘリから大御所ピグが降り立つと、妹の不動産ピグことサン子が玄関先で待ち構えていたよ。

「おねえさま。いらっしやい」

不動産ピグは、大御所ピグにそっくりだ。なんたつて年齢がひとつしか違わないんだからね。不動産ピグは、レースの服を身にまとった赤ちゃんを抱いていたよ。

「こんにちはー。ジュニアピグちゃんもこんにちはー」

大御所ピグは、妹の手からひよいと赤ちゃんを抱きあげて、あやしたよ。

「今日は、ジュニアピグちゃんにおみやげを持ってきましたからねー」

「まあ。おねえさま、ありがとう。さあ、お部屋にどうぞ」

「失礼するわー」

大御所ピグは、ドレスの裾をつまみあげていそいそと屋敷に入っていたよ。そして楽しいお茶の時間がはじまったんだ。

「おねえさまは、すいぶんご活躍のようね。この間は、保険のエッセイを読ませていただいたわ。」

サン子は、口元に紅茶を運んで言った。

「まあ、さつそく読んでくれたのね。ありがとう、サン子。」

ふと大御所ピグの脳裏にQちゃんの事がよぎって、大御所ピグは目頭を押さえたよ。そんな大御所ピグの気配を察してサン子が慌てて言った。

「ごめんなさい、おねえさま。ブイアイピー保険の事を思い出させてしまったわ。」

「いえ。いいのよ。サン子。」

ふるふると顔を振ると、大御所ピグは言ったものさ。

「今日は、おみやげを用意してきたのよ。メイドハムちゃん……」

「はい。大御所ピグさま。」

メイドハムが、荷物を持ってきた。

「これはね、食材なのよ。わたしのおみやげはね。ジュニアピグちゃんの健やかな成長を願ってのパーティー企画なの！ 今から一時間後にスタートよ。」

「まあ！」

サン子の目がキラキラと輝いたよ。

「私。お友達を呼んでいいのかしらー？」

「もちろんよ！」

サン子は、ちりんちりとベルを鳴らすと、召使のハムちゃんのタクとケンを呼んだ。二人合わせて宅建コンビなんだよ。サン子は言った。

「このリストにあるお友達全員にメッセージを送ってちょうだい。終わったらおねえさまのところのメイドハムちゃんを手伝ってあげてね。」

「かしこまりました。」

ふたりは、リストを受け取るとペこりと頭をさげ、その場を去ったよ。

「急なお話だったから、お友達百人にメールを送っておいたわ。半分くらいは来てくれるかしら？」

「そうね。五十人くらい集まればちょうどいいわねー。審査員が必要なの」

「あらあら。おねえさまだったら、何を計画していらっしやるのかしらー」

サン子は、小首をかしげたよ。

「まあ、楽しみにしてて。フッフ」

大御所ピグは、メイドハムに会場設営を指示したよ。サン子の召使たちも手伝った。かくしてパーティー会場には、三つの屋台が並んだんだ。サン子の屋敷の広間に呼ばれた友人たちが一人二人と集まってきた。そして会場内には、総勢七十人のサン子の友人が集まったんだ。大御所ピグが、マイクを握り、中央にささっと進み出た。「今日は、パーティーにようこそ！ わたくし、サン子の姉の大御所ピグでございます」

たちまち大御所ピグのまわりに人だかりができたよ。

「きゃあ、大御所ピグさんだわ！」

「いつも作品を読ませていただいています！」

「わたくし、大御所ピグさんの本を持ってきましたの。ぜひサインをお願いします！」

「ありがとうございますー」

大御所ピグは、ペこりと頭を下げた。これだけの友人たちが集まった訳は、どうやら大御所ピグのファンがいたからみたいだね！

大御所ピグは、マイクを手に更に話し始めたよ。

「今日のこのパーティーは、そこにいるジュニアピグのためにわたくしが企画したものです。シェフのおっさんず、カモーン！」

大御所ピグが叫ぶと、正面の幕がきつて落とされ三人のシェフが登場した。まずは一番左端のシェフにライトがあたったよ。

そのシェフは、青いスカーフを首に巻き、腕組みをして左肩、左足を前面に押し出して決めポーズを作っている。

「彼は、和のシェフのヘイです」

ニヤリと笑うヘイの口元でキラーンと銀歯が光ったよ。

「そして洋のシェフのダンです」

ダンにスポットライトがあたる。ダンは、赤いスカーフを巻き、腕組みをして仁王立ちになって立っていた。それは、まるでこの会場を俺の料理の味で埋め尽くしてやるぜと言いたげに見えるよ。

「最後に中華のシェフのスーです」

スーにスポットライトがあたる。スーは、黄色いスカーフを首に巻き、腕組みをして右肩を前に突き出している。とがった靴のつま先が会場の中心を指すようにモデル立ちをしているんだ。

おお！ と会場がどよめいた。

「お、おねえさま……」

あまりの粋な計らいにサン子は、感動していた。サン子の胸に抱かれたジュニアピグは、「アー」と叫んで大はしゃぎさ。

「シェフのみなさん。ここにいるジュニアピグにも大人が食べているものと同じ離乳食バージョンを作ってほしいの。クリーミーな感じだね」

シェフたちは、うなずいた。大御所ピグの課題はとても難しそうだったけど、シェフたちにはわけもないようだ。

「ジュニアピグちゃん。どれが気に入るかしらね。クリーミーな感じ……ふふ。クリーミー選手権ね」

そんな事を言う客も現れて、会場は大盛り上がりさ。シェフたちは、互いを意識しながら負けまいと料理に取り組んでいる。

ヘイは、極上のかつおだしで茶碗蒸しを作り、ダンは、魚の身をすりつぶし、パテを作った。スーは、鍋にたつぶりの中華粥を作ったよ。会場内に美味しそうな匂いがたちこめる。

「さあ、ジュニアピグちゃん。茶碗蒸しですよー」

大御所ピグが、ふうふうと冷ましながらジュニアピグに茶碗蒸し



を食べさせた。

「ハアー」

ジュニアピグは大喜びで、大御所ピグのスプーンを奪おうとしたよ。それは、もっと食べさせろって言ってるみたいだった。会場から拍手が飛ぶ。

「待つて。ジュニアピグちゃん。なんでもバランスよく食べないかね。次はパテですよー」

大御所ピグは、今度はジュニアピグにパテを食べさせたんだ。  
「ウー」

ジュニアピグは、目をまんまるに見開いて口をすぼめた。食べた事のない味だったようだ。それでもやはりジュニアピグは、手を伸ばしておかわりをせがんだよ。またもや会場から拍手が飛んだ。

「まだよー。次は、お粥ですよ。食べた事あるかしら？ でもこれはひと味違うのよー」

大御所ピグは、またふうふうとお粥を冷まし、ジュニアピグの口に持っていったよ。

「アー」

ジュニアピグは、満面の笑みになった。お粥の素晴らしさなのかジュニアピグの笑顔に対してなのか、またもや会場から拍手が起こったよ。

「よかったわね。ジュニアピグ。おねえさま。なんだかみんな気に入ったみたい」

サン子も大喜びだよ。大御所ピグは、会場の拍手の度合いで自然にナンバーワンが決まると思っていたんだ。けれど、そうじゃなかった。会場から囁きがもれる。

「甲乙つけがたいって感じだわ。みんな美味しかったんですもの」「それは、そうよね。みんな超一流のシェフたちですよ」

「ここまで一流どころが揃うと、好みの問題って言うかその時に食べたいものによるわねえ」

かくて、どの料理も素晴らしいってことで、和やかにパーティー

は終了しようとしていたよ。けれど、シェフたちは料理を作り続けているじゃないか。

「シェフのみなさん。ありがとうございます。もうパーティーは終了ですよ」

メイドハムちゃんが言いに行ったけれど、三人のシェフは言ったものさ。

「いいや、まだ決着はついていないのさ」

「そうさ。この程度じゃ、まだまだ作り足りないね」

「久しぶりに三人顔を合わせたんだ。今夜は思っさま創作に取り組もうじゃないか」

ヘイとダンとスーは、客のいなくなった会場で、ひたすら料理を作り続けたんだよ。

三人の間で祭りは、まだ終わっていないようだ。

20・やさぐれ看護師〜歩き方が間違っていた。(前書き)

この作品は、私が活動報告にアップしているお題をタイトルに書きました。お題をもとにあとからストーリーを考えています。

今回のお題は、「やさぐれ看護師」と「歩き方が間違っていた」です。

ふたつを合体しました。

## 20・やさぐれ看護師の歩き方が間違っていた。

ナースピグは、看護学校を優秀な成績で卒業してインピグ病院に勤めているよ。ナースピグは、今日もインピグ病院の花形である手術室でオペの介助をしているんだ。病院に勤めて五年が経つ。インピグ病院の手術の件数はとっても多い。なんたって、よその病院から患者さんがまわされてくる位だからね。ナースピグは、オペの介助の仕事がとても好きで、これぞ天職って思っていた。

無影灯が、かーんと光る。手術が始まった！

ナースピグは、山ほど並んだ器具の中から、部長先生ピグが手を差し出すよりも一呼吸早く、必要なものを手渡した。

「さすが、ナースピグ君」

同じ室内でナースピグの後輩が羨望のまなざしで見っていたよ。

ナースピグの看護師生活は順風満帆に見えたんだ。

けれどある時……。看護師長ピグがやってきて言ったものさ。

「ナースピグさん。院長先生がお呼びですよ」

「はい」

ナースピグは、院長室に向かい歩いていった。

院長先生は、につこりと微笑んで一枚の紙をナースピグにくれたんだ。それは、なんと辞令だったんだ。そこには、病棟勤務を命ずると書かれていたよ。

「私が、病棟勤務だなんて……」

ナースピグのショックは計り知れなかった。ナースピグだって、色んな部署を経験しなくちゃならない事はわかっていた。でも採用されてからと言うもの一生懸命仕事を覚えてきて、今が一番良いときだったのにつて、残念でならなかったんだ。

「インピグ病院は、総合病院です。色んな部署を経験して看護のスペシャリストになって欲しいのよ」

看護師長は、ナースピグの肩を叩いて言ったよ。

「それは……わかっています」

でもひとたび異動になったら、何年もいなくちゃならない。ただでさえ、病棟は手が足りないんだ。働いていたら、そんなことだってあるよね。

ナースピグはしばらく泣いていたけれど、やがて顔をあげた。

「がんばらなくちゃ……」

ナースピグは、自分なりに一生懸命頑張ったよ。けれど、病棟には、そのあわない古参ナースピグがいたんだ。けっしていじわるするわけじゃないんだけどね。

手術室の経験しかないナースピグは、わからない事だらけでとても苦労していたよ。一生懸命やっているはずなのに裏目に出てしまう。いつも何かしら叱られる。

今日も疲れてくたくたになってナースピグは寮に帰った。狭い寮の部屋にひとりしていると、いやなことを思い出して、気分がめいて仕方がない。

「そつだ。飲みに行こう」

ナースピグは、気分転換に夜の街に繰り出したよ。そしてナース仲間が行かなそうなスナックに入ると、ぐいとお酒を飲み干した。喉を通り抜ける焼ける感覚にナースピグはほっとできた。ナースピグは、自分なんか、病棟の役立たずだって思っただって、二杯三杯とお酒を飲んだ。目の前がゆらゆらとゆれて、やがて神経が麻痺してゆく。でもそれが心地よかったんだ。麻痺してしまえば心だって傷つかなくていいんだからね。

それからと言うもの、ナースピグはコンビニでお酒を買い込んでこっそり寮でも飲むようになった。ナースピグの様子に看護師長はすぐに気づいて忠告した。

「ナースピグさん。生活をあらためなさい」

「師長。お言葉ですが、帰宅してから何をしようとするの自由です」  
ナースピグは、言い放ったよ。

「大変なのは、最初のうちだけです。そのうちあなたも病棟のベテ

ランになるのよ」

「そんな日があるなんて私には思えません」

師長の気持ちは、沁みるほどにわかつていたけれど、つい反抗的になってしまふナースピグだった。これじゃあいけないってナースピグは、思ったよ。けれど、お酒を飲んで気を紛らわす習慣は止められなかったんだ。

手術室を五年の経験がナースピグの看護生活のすべてだった。

「私の道の歩き方が間違っていたんだらうか」

夜遅く、仕事帰りにコンビニにやってきたナースピグは、つぶやいた。異動の希望を訊かれた時にも残留を希望してきた。同期のナースたちは、すでに三箇所もの部署を経験している者さえいるのに。ネガティブな気持ちを振り切るようにガラスのドアを開け、カクテルの瓶に手を伸ばす。と、ナースピグより先にその瓶を奪った者がいたよ。ナースピグはびっくりして振り返った。

そこには、一人の男性が立っていた。どこかで見た顔だ。ナースピグは、食い入るようにそのピグの顔を見つめたよ。

彼は口を開いた。

「その手は、酒瓶を持ったためにあるんじゃない。メスを手渡すためにあるんだ。ねえ、ナースピグ君」

彼の言葉がヒントだった。ナースピグは、目が覚めた思いだったよ。彼は、脳外科のオペピグだったんだ。白衣を着ていなかったから、とっさにわからなかったけどね。

「独立をする事にした」

オペピグは、言った。

「え？」

「優秀なスタッフが必要なんだ。一緒に来ないかい？」

インピグ病院に未練はなかった。また手術の介助が出来る。ナースピグは、迷わず自分に差し伸べられた手にすがったんだ。

一年後、新聞をにぎわす天才脳外科医オペピグの新聞記事があっ

た。

そして、その中にナースピグもスタッフとして紹介されていたよ。

20. やさぐれ看護師の歩き方が間違っていた。(後書き)

4. 天才脳外科医オペピグ <http://ncode.syosetu.com/n2197h/35/> に続く



## 21・鍋がうまい！ ～早いのがとりえ（前書き）

この作品は、私が活動報告にアップしているお題をタイトルに書きました。お題をもとにあとからストーリーを考えています。

今回のお題は、「鍋がうまい！」と「早いのがとりえ」です。ふたつを合体しました。

## 21・鍋がうまい！　　早いのがとりえ

わる子は、料理旅館に来ていたよ。だめ子や食いしん坊ピグ、ばかピグ、ナイトピグも一緒だ。まだ学校に行っている身分なのに、とつてもぜいたくだよね。

「ようこそ。料亭大御所へ」

わる子たちの部屋におかみが挨拶にやって来た。続いて大御所ピグが現れた。

「おかみさん。よろしくお願ひします。大御所ピグさん。こんな素敵なところにお招きいただいて、ありがとうございます」

わる子たち一同は、ぺこりと頭を下げた。

「あらあら。いいのよ。それは、わる子さんたちが、街の清掃ボランティアに一生懸命に取り組んだからだわ。それだけでも感心なのに私の屋敷の前の道路まできれいにしてくださって。このプランは、私からのささやかなお礼のつもりよ。今日は、ゆっくりくつろいで行ってね」

なんと大御所ピグは、ボランティアに参加したピグ学園の生徒たちを料亭に招いたんだよ。わる子たちの部屋から庭園が見える。敷き詰められた砂利に松の木のカッコいい枝ぶり。飛び石の先には池がある。そこには、ゆったりと金色の鯉が泳いでいるよ。わる子には、池の鯉まで金持ちにみえたものさ。思わずため息が漏れたよ。

「ここにいるとリッチな気分にはたれるわね！」

「ほんとだねー」

だめちゃんも言った。

「ボク、こんな高級な料亭はじめてだよ！」

ナイトピグがきよるきよるしている。

「だめじゃん！　こつ言つところは、ゆったりと構えて座っているものよ」

だめちゃんが、ナイトピグをたしなめたよ。

「どんなお料理が来るのかなー。じゆる」

お料理が来る前から、食いしん坊ピグがよだれを拭っている。

「もう、食いしん坊ピグちゃんも。そんなお行儀がわるいの、だめじゃん！」

だめ子は、ぶつぶつ言いながらも内心はそわそわしていたんだよ。金糸の刺繍のあるふかふかの座布団は、慣れなくて落ち着かない。

大御所ピグは、余裕の表情でほ……と笑っているよ。

やがて、お料理が運ばれてきた。酢の物、煮物、焼き物。さまざまなお料理がわる子達の前に並ぶ。すぐにも味わいたいほどだけど、大御所ピグの手前、お料理に手を出すわけにはいかない。わる子たちは、おすわりが解けるのを待つ犬みたいにじっと座っていたよ。

「大体お料理も出揃ったわね。では、まずは乾杯といきましょう」  
女中ハムちゃんたちが、手回しよくみんなの前にジュースを置いていく。みんなに行き渡るのを待って、大御所ピグは、グラスをかがげて言った。

「それでは、ボランティアで手伝ってくれたみなさんに幸せが訪れますように。乾杯！」

「かんぱーい！」

わる子たちも声を揃えて言った。

「大御所ピグさんにかんぱーい！」

お調子者のばかピグが、一呼吸遅れて叫んだよ。テーブルの上にグラスを持った腕が交差する。あちこちで、カチンとグラスを合わせる音が響いた。

「さあ、めしあがれ」

「いただきます！」

一同はさっそく料理に舌鼓をうったものさ。大御所ピグはしばし会話の輪の中に入って、楽しげに言葉を交わしていたよ。途中、大きな土鍋や材料の載った大きな皿を持った女中ハムちゃんたちがやってきた。彼女らは、最後にコンロにかちりと火をつけて去って行ったよ。

「わあ、お鍋！ おいしそう！」

食いしん坊ピグは、もう料理をすべて平らげている。鍋を見つめる目がハートマークになっているよ。食いしん坊ピグの向かいに座ったわる子は言った。

「まあ、食いしん坊ピグちゃんだったら……もう食べちゃったの？」

「えへ。僕は食事が早いのがとりえなんだ」

「それ、ちつともとりえじゃないじゃん。そんなの消化に悪いよ。だめじゃん！」

だめ子は、少しずつ料理に手をつけていて今は焼き魚をつついている。そんなだめ子をけむたがって、食いしん坊ピグは、わる子に話しかけたよ。

「ねえ、わる子ちゃん。鍋もついいかな？」

「よくないよ。まだ蓋を開けちゃだめっ！」

だめちゃんが口を挟む。

「ええっ？ お腹に入ればいっしょじゃん！」

食いしん坊ピグが、不満気にだめ子を見やる。食べるものがないから手持ち無沙汰なんだ。

「食いしん坊ピグ君。ちゃんと煮立ってから材料を入れなくちゃ」  
ナイトピグは遠慮がちに言ったよ。

そこに女中ハムちゃんが追加のジュースを持ってやってきたよ。

女中ハムちゃんは、食いしん坊ピグの様子を見て言った。

「まだ鍋の蓋を開けないでください。大丈夫ですよ。もう少ししたらあの方が来ますから」

「あの方って……」

食いしん坊ピグは目を丸くした。

「あの方って言えば、大御所ピグさんの事だろう」

ナイトピグが言って、みんなはうんうんとうなずいたよ。女中ハムちゃんは、一瞬、何か言いたげに口をもごもごさせたけど、何も言わずふすまを閉めて去って行った。みんなは、黙って鍋を見守った。いつきに静かになった部屋に、庭園のししおどしが跳ね返る音

が響いてくる。どこかから尺八の音色も聞こえてきたよ。豪華な料亭の事だ。どこかの部屋で誰かが演奏しているのかもしれない。なんとも風流だ。

その時……。

突然、パアンと派手な音がしてふすまがふたつに割れた。わる子たちはぎよつとして音のする方を見やったよ。

開いたふすまの向こうに、着流しの男が立っている。低い位置で帯を結び、腕組みをして顔にはひよつとこの面をつけている。その立ち姿は、なんとも粋だったよ。わる子たちは、絶句した。

「だっ、誰ですか」

ナイトピグが引きつりながら言った。

「鍋奉行参上！」

低い声で男は言うど、ささつと中央に進み、着物の裾を整えて鍋の前に座った。そしておもむろに蓋をあけて中を覗いたんだ。鍋は、ちりちりちり……と、ちょうど良い具合に煮立っている。

「ちよつと君っ。その皿を……」

鍋奉行は、ばかピグの前に盛られた具材を示したよ。

「あ……はっ、はい」

「それに載っているにんじんとしめじを入れてくれないか」

「うん。わかったよ」

ばかピグは、菜箸を使ってひとつずつ材料を入れようとしたよ。

ただど箸使い上手じゃなくてポロリと具材がこぼれてしまったんだ。チツチツチ……と鍋奉行が舌を鳴らす。

「君。もうちよつとスムーズにね」

鍋奉行は、ばかピグの手から皿を奪うと、優雅に材料を投入してみせた。その手さばきときたら、お料理ショーを見ているみたいだったんだよ。

コトコトと鍋から、美味しそうな音が聞こえる。食いしん坊ピグが目をきらきら輝かせて鍋を見つめている。火が通つたのを確認すると、次に鍋奉行は、わる子につくねを入れるように指示したよ。

わる子は、言われるまま先ほどの鍋奉行の動きに習って、つくねを入れていく。鍋に沈む赤みを帯びたつくねは、すぐに熱で白くなつてゆく。

「うわあ〜」

食いしん坊ピグが、小鉢と箸を手を取ったよ。

「まだだ」

鍋奉行が、ぴしりと言い放つ。

「えー」

食いしん坊ピグの眉が八の字になる。

「あとは火が通りやすい野菜を入れて、豆腐を入れて仕上げるんだ」

「はい」

だめ子は素直に聞き入れて、菜箸で鍋の中のスペースを確保すると具材を投入してゆく。

「そうだ。それでいい」

鍋奉行の表情は面で見えないものの、口調は最初よりも柔らかくなっていたよ。くつくつくつ……部屋中に鍋の美味しそうな匂いが広がった。

「さあ、みんな。これで食べてもいいよ」

鍋奉行は、ささつと小鉢に盛り付けると、食いしん坊ピグから、順に差し出したよ。

「さあ、君のお待ちかねの鍋だよ」

「わあ、ありがとう！」

食いしん坊ピグは、さつそく鍋にはくついたものさ。

「おおつ、うまい！」

「おいしいわねー」

みんな、至福の表情だよ。だめ子がお行儀よく食べている横で、食いしん坊ピグがおかわりをしている。

鍋奉行は、みんなの様子を眺め回し、おもむろに立ち上がった。

「もう帰るんですか？ 作っただけじゃないですか。鍋奉行さんも

一緒に食べましょうよ」

ナイトピグは言ったけど、彼は首を振った。

「いやいや心遣いは無用」

「鍋奉行さんのお名前はなんと言うのですか？」

「ばかピグが訊く。」

「名乗るほどの者ではござらん。では、さらばっ」

鍋奉行は、着物の裾をひるがえし去って行く。

「なべぶぎようっ！」

「カムバーク！」

後ろ姿に叫ぶばかピグや食いしん坊ピグの声に振り向きもせず  
……。

大御所ピグの屋敷の厨房で片付けを終えたスーは、ほっと一息ついて丸椅子に座っていた。今日の夕食はスーの当番だったんだ。先日のパーティーを終えて、スーにまた日常が戻ってきた。あの時、競い合ったダンは、「また料理修行だよ。ははは」と言っていて、旅立ってしまった。今は、ヘイと交替で大御所ピグの屋敷の料理担当をしているよ。

「ヘイのやつ。明日の仕込みをしたいから、ここに顔を出すって言っていたんだがなあ。遅いなあ。でも厨房に鍵をかけて行っちゃ、奴が入れないし……」

ヘイがスペアキーを借りればいいだけの話なんだけど、広い屋敷をわざわざ執事ハムのところまで借りに行くのは、面倒臭いだろう。それにスーは、つんととりすました執事ハムが、ちょっと苦手だったんだよ。鍵を借りに行くとき必ず執事ハムは、言うんだ。「おや？ 仕込みですか」って。わかりきっている事じゃないか。黙って貸してくれればいいものを、いつも一言、二言返ってくるんだよ。もっとも自分は苦手でもヘイは、そうじゃないかもしれないけれど。でも、何よりも「いいよいいよ。俺、待ってるから」って、言ってしまった責任がある。どのみち今後のメニューも考えなきゃなら

ないし、する事はあるんだ。大御所ピグの屋敷では、少なくとも一ヶ月は同一のメニューがかぶらないよう、注意しなきゃならない。スーは、ノートに料理のアイディアを書き始めたよ。

その時、厨房のドアが開いた。

「やあ、スー。遅くなつてごめん」

スーが顔をあげた。なんとヘイは、着物姿だ。

「ヘイ。なんだこりやまたその格好は」

「ははは。ちよいと野暮用でさあ」

着流しのヘイは、スーから鍵を受け取った。

「じゃあ、あとは任せたぞ。ヘイ」

「ああ。スー。お疲れー」

スーは、ノートの入ったカバンを手に帰っていった。

「さあーて」

ヘイは、大きな冷蔵庫を開けるとさっそく翌日の仕込みに取り掛かる。

ヘイには、裏の顔があった。

実は、ヘイは大御所ピグの特命を受けて、鍋奉行として暗躍しているんだよ。



## 22 大御所ピグ、風邪引きで寝込む。(前書き)

この作品は、私が活動報告にアップしているお題をタイトルに書きました。お題をもとにあとからストーリーを考えています。今回のお題は、「デニッシュパンにソフトクリームをのせてみました」です。

## 22・大御所ピグ、風邪引きで寝込む。

冬が近づいてきて寒くなったためか大御所ピグは、風邪をひいてしまった。天蓋つきのベッドに横たわってうんうんうなっているよ。「大御所ピグさまがお風邪とは……。ほんとに珍しい事でございますね」

執事ハムは、大御所ピグの耳に差し入れた体温計を取り上げた。デジタルの示す数字は39度……。ピグたちの世界で言えば、ほとんど熱はないみたいだったよ。

「ああ、もうだるくって、執筆意欲が湧かないのよー。執事ハム。あなた代わりに書いてくれないかしらー」

「なんとまあご冗談を。わたしに小説を書けるわけがないではございませんか。お待ちくださいませ。ただ今、料理人のヘイにお粥を持ってこさせますから」

「またお粥なのー。毎日で飽きてしまったわ」

大御所ピグは、眉を八の字にして露骨に抗議したもののさ。

「お言葉ですが大御所ピグさま。胃にやさしいのはなんとと言ってもお粥のようなお食事でございます。料理人のヘイとスーが、気を遣って毎日違ったタイプのお粥をお作りしているではありませんか」

「私は、お粥そのものに飽きたのよー。これで三日三晩お粥が続くんですもの……」

「では、大御所ピグさまは何が食べたいのでございますか」

「執事ハム。私は、アイスが食べたいわー」

「いけません。アイスなど召し上がっては体が冷えて、風邪が悪化してしまいますよ。大御所ピグさまは、子供でございますか」

執事ハムは、大御所ピグを思いつきりたしなめたよ。

「大人だって、アイスが食べたいのよー」

寝込んでいることをいいことに大御所ピグはわがままを言った。ひたすら体を休めるために眠っていたけれど、それだと創作のアイ

ディアも湧かないんだよ。

「では、ちよつと料理人に相談してきます。お待ちくださいませ」  
執事ハムは、厨房に向けてすたすたと歩いていった。

ヘイトスーは、厨房でごはんを食べていた。大御所ピグのために用意していながら、あまつた食材はたくさんあった。大御所ピグはここのところずっとお粥ばかりなんだからね。ヘイトスーの今日のまかない飯は麦とろろご飯だったよ。

「うまいなー。この麦とろろご飯は、最高だよ。大御所ピグさまのご飯を作り終えて、こうして食事をする時間が俺には至福のときなのさ。そう思わないかい？ヘイ」

黄色い上着のスーは、にこにことして言った。

「そうともさ。ボクたちは、まかないで腕を振るっているんだからね……。ところで大御所ピグさまは、日頃から洋食のサイクルが少ないのがご不満のようだね」

ヘイは、青い着物の腕をまくって頼杖をついている。

「仕方ないさ。ダンが料理修行に出かけていないんだから。俺たちだって洋食は作るけど、さすがに専門職のダンには及ばないさ。ああ、そうだ。ヘイ」

「なんだい？」

スーは、立ち上がると冷蔵庫の奥から皿を持ってきたよ。

「見てごらん。デニツシユパンにソフトクリームをのせてみたよ」

「おお、こいつはうまさうだなあ。これは一体どうしたんだい？」

「大御所ピグさまのおやつにと用意した食材だが、風邪をひかれてしまったので出番がなくなったんだ。このデニツシユパンがそろそろ賞味期限なんだよ。どうだい？これにチョコレートソースでもメープルシロップでもかけるのさ。きつとうまいぞお」

「おお、スー。そいつぁいいメニユーを考え付いたなあ。なかなか美味そうじゃないか」

ふたりがテーブルのうえに置かれたおやつを前に話していた時だ。

いきなりバアンと厨房のドアが開いたんだ。

「そつ、それだ！」

声の主は、執事ハムだった。ハイとスーは、ぎよつとしたよ。

「げげっ……」

スーは、何か悪いことでもしてかしたように思わずハイの影に隠れてしまったんだ。執事ハムちゃんは、つかつかとテーブルに歩み寄ると、皿をひよいと持ちあげた。

「これは、大御所ピグさまにお持ちします」

ええっ！ と大きな声で言いかけたスーをハイはたしなめた。

「元々、大御所ピグさま用の食材で作られたもの。異論はございませんね？」

執事ハムがふたりを見やる。スーは、ごくりと唾を飲み込んで恨めしそうに執事ハムちゃんを見つめ返した。こっ、これは悪魔の所業に違いない。やっぱり執事ハムちゃんとは、性格的に合わないつてスーは、心の中で思ったんだ。

「ど、どうぞ……」

それでもスーは、おのれの身分をわきまえて、涙を飲んで搾り出すような声で言ったよ。

「大御所ピグさまは、アイスを食べたがっっておられるのですが、それだと体が冷えて風邪にはよくないと思うのです。しかし、このデニッシュパンとの組み合わせであれば、アイスの冷えは軽減されることでしょう」

執事ハムは、ふふんと満足げにひげを撫でて言ったよ。

「この素晴らしいメニューは、きっと大御所ピグさまの回復に一役買ってくれることでしょう。ハイさんにスーさん。礼を言いますぞ」  
執事ハムは皿を捧げ持って厨房を後にしたよ。がっくりと肩を落とすスー。至福の時に水を差されてしまったんだからね。

「元気だしなよ。スー」

「うっつ……」

スーは持っていたタオルで目頭を押さえた。

「あのソフトクリームデニッシュで大御所ピグさまが回復すれば、作った甲斐があるってものさ」

「そう、そうだよなあ……。俺さあ、さっき、ちよつとだけ八口ーワークに行こうかなんて思ったんだよ」

「そんなこと言うなよ。一緒にここで働こうよ……。ここよりいい条件のところなんて、ないと思うよ」

「うん。そう思うよ。へい……」

へいは、ぼんぼんとスーの肩を叩き、なぐさめたものさ。

「んまあ！ こ、これはなんて美味なのかしらー」

一口食べるなり、大御所ピグは感動して叫んだよ。

「それは、ようございました。大御所ピグさま」

それから間もなく大御所ピグの風邪引きはすっ飛んだ。以来、ソフトクリームをのせたデニッシュは、大御所ピグの屋敷の定番おやつになったんだ。

かくて、デニッシュパンとソフトクリームの入荷が増えた厨房では、まかない食としてソフトクリームデニッシュが、時折、へいとスーの口に入るようになったらしい。

23・金縛りに遭いたい！　く誰も見ていないだろう。（前書き）

この作品は、私が活動報告にアップしているお題をタイトルに書きました。お題をもとにあとからストーリーを考ええています。

今回のお題は、「金縛りに遭いたい！」「誰も見ていないだろう」です。

### 23・金縛りに遭いたい！　く誰も見ていないだろう。

大御所ピグのもとに執筆依頼がやってきた！

でも小説じゃなかったんだ。なんと、「星華隊」と言うバンドのライブ体験レポートだって言うじゃないか。「星華隊」は、テレビ等の露出が一切ない硬派なバンドだ。知名度は浅いが、通の間では人気が高いらしい。

大御所ピグさんには是非！　って事だったんだけど、相手を間違えているって、大御所ピグは思ったよ。

「変ねえ。どう間違って伝わったのかしらー。私は、バンドはそんなに詳しくないのに」

脇に控えていた執事ハムちゃんが言ったよ。

「大御所ピグさま。どうなされます？　お断りになられるならそうしますが……」

「いえいえ。いいのよー。わたしは、これまで執筆の依頼はほとんど断った事がないのですもの。それにライブ体験なんて、なかなか刺激的じゃないこと？」

「さすがは、大御所ピグさま！」

大御所ピグは、書斎に行くとノートパソコンを広げた。アクセスした「星華隊」のサイトは、黒い背景にかすれた白い横文字が並んでいたよ。そこには、ドラムやギターの画像ばかりが並んでいて、メンバーの略歴は伏せられていたよ。

「なるほどね。なんだかカリスマ性を感じるわー」

大御所ピグは、執事ハムを呼びつけると、「星華隊」の発売した曲を揃えさせた。デビュー一年目の彼らの曲は、アルバムが二枚だけだったから、大御所ピグはすべて覚える事ができたんだよ。

「勉強熱心な大御所ピグさまには、頭がさがります」

執事ハムは言ったよ。

「そりゃレポートを書くんですものー。当然よ」

大御所ピグは、どや顔で言ったものさ。

そしてライブの日がやってきた！

大御所ピグは、「星華隊」のイメージカラーの黒いドレスと光り輝くアクセサリーに身を包んでライブ会場に出かけたよ。オールスタンディングで百人ほどが入れるかどうかの狭い会場には、先に月間「ピグ生活」の編集ピグがいて、場所を押さえてくれていた。

「大御所ピグさん。このたびは、執筆依頼を受けてくださってありがとうございます！」

「いえいえ。いいのよー」

「フリードリンク制ですが、お飲み物は何かいいですか？」

「いまは要らないわ。水分を取っちゃうとトイレに行きたくなるんですもの。ライブの興奮で失禁しちゃったら大変！」

「なるほど。さすがは大御所ピグさん」

待ち時間の間、大御所ピグと編集ピグは色々語り合ったよ。編集ピグをもつてしても「星華隊」の詳しい情報は手に入れる事ができなかつたんだ。

やがて薄暗い会場のライトが全部消灯して、あたりは真っ暗になった。あちこちで、フライングの歓声があがる。大御所ピグが目を凝らしても中央のステージは何の変哲もない。もしかして、不意打ちで後ろから現れるのかもって、後ろに視線を送ってみても何も起らない。

「このじらしが、またたまらないんですよねえ。大御所ピグさん」

大御所ピグは、デジタルの時計に目を走らせた。

「そうね。もう開演時間を二分ほど過ぎていてよ」

それから更に少ししてステージがぱつと明るくなった。周りから奇声があがったよ。何故なら明るくなったステージには、もうもうとスモークがあがり、「星華隊」の面々がスタンバっていたんだから。

ビィィィィンと、脳髓がしびれるようなギターの弦をはじく音。



すぐに他の楽器が重なり合う。ボーカルは、ヒビキって名のピグだった。彼はアップテンポな一曲めを高らかに歌い上げたよ。

自宅で聴く曲とはぜんぜん違った生の迫力に大御所ピグは、金縛りに遭ったみたいにつきり動けなくなってしまうんだ。感激のあまり涙が溢れてきて大御所ピグの頬を濡らす。大御所ピグは、もうしゃべる事もできず、呼吸すら忘れて、夢中になってステージを見ていた。

途中で、自分はレポートを書くためにここに来ているんだとハツとなつて、隣の編集ピグに視線を送ってみた。でも編集ピグも呆けたみたいにステージを見つめているんだ。それだけ「星華隊」のステージが魅力的だつて事なんだ。仕方がないね。でも編集ピグは抜かりなかつたよ。あとから「星華隊」の取材の時間を設けてくれていたんだからね。

「ブログを書いているのかい？」

楽屋でギターの手入れをしながらメンバーのひとりが言った。

「うん。移動の合間なんかを読んだ本の読書記録をね」

話しかけられたピグはしきりに携帯をいじっている。

「お前は本が好きだもんなあ。そういうのが、作詞のヒントにもなるんだろうね……」

そこに楽屋のドアが開き、マネージャーが大御所ピグと編集ピグを伴って現れたよ。

「月間「ピグ生活」の編集さんだよ。そしてこちらが、作家の大御所ピグさん……」

紹介が終わらないうちに大御所ピグは、つかつかと携帯を手にした。ピグに歩み寄った。大御所ピグと目が合った。ピグは、ぎよつとしたように大御所ピグを見つめ返したよ。ふたりの顔の距離が縮まった。

「あなた。どこかで見たと思っていたのよー。この間、ボランティアをしてくれた……」

「はい……。ナイトピグです」

彼は泣きそうになりながら、答えたんだ。

「へえ！ あなた「星華隊」のメンバーだったの？ それはビックリだわー。この間のボランティアに来てくれた子たちは知っているのかしらー？」

「あの、この事は学校にも内緒なんです。学校でライブを見るのは禁止されているから、クラスの子は誰も見ていないだろうって思っ  
て……。ああ、それこそ学級委員のため子さんに見られたらだめー  
って絶叫される……。あの、すみません。黙っててくださいっ」  
「なるほど！ わかったわよー」

大御所ピグは、大きくうなずいた。

「私は、余計な事は言わないのよ。だけどひとつお願いがあるの」  
「な、なんですか？」

ナイトピグの顔が引きつったよ。

「あなたたちのライブ、とっても良かった。雷に打たれたような衝  
撃が走って、金縛りに遭ったように動けなくなってしまったんです  
もの。あの感動をもう一度味あわせて欲しいの。また金縛りに遭い  
たいのよー」

「はっ、はあ。大丈夫です。でも……シークレットライブで願  
いします」

「もちろんよ。あら……」

大御所ピグは、ナイトピグの落とした携帯を拾い上げた。手渡す  
拍子に画面が見えてしまったよ。

更新されたナイトピグのブログにはこう書かれてあったんだ。

「今、とてもリア重なんです。出来る限り読書日記は続けていき  
たいと思います……」

大御所ピグは、にっこりと微笑み一言言ったものさ。

「今度、私の本をプレゼントさせていたたくわー」

「はっ、はい」

ナイトピグは真っ赤になっとうなずいたんだよ。

## 24・二度寝の幸せ〜ファイナリストの冬（前書き）

この作品は、私が活動報告にアップしているお題をタイトルに書きました。お題をもとにあとからストーリーを考えています。

今回のお題は、「二度寝の幸せ」「ファイナリストの冬」です。

## 24・二度寝の幸せ〜ファイナリストの冬

朝、六時。ばか先輩は、目が覚めたよ。これから朝ごはんを食べ、支度をしなくちゃいけない。何故って七時から陸上部の早朝練習が始まるからね。眠い目をこすりながら、ばか先輩はベッドから半歩踏み出しそうとしたんだ。けれど、途端にどてつとひっくり返ってしまったよ。

「あいたたた……」

ばか先輩は体を起こそうとした。そして、またどてつとこけた。そのうちに少しずつ意識がはつきりしてきたんだ。

「そうだったー。僕はもう朝練に出なくていいんだ」

つぶやきながら、ばか先輩は包帯でぐるぐる巻きにされた自分の足に目をやったよ。

「どうもいつもの癖で、同じ時間に目が覚めてしまうよ」

ばか先輩は目覚まし時計に目をやる。アラームは、七時にセットされていたよ。

「もう一度、寝よう……」

ばか先輩は、のそのそと布団に戻って行った。ずっと陸上競技を続けてきて、こんなに朝ゆっくりできた事はなかった。ベッドにもぐりこんだばか先輩は、ひそやかな喜びを感じたよ。ケガでしばらく陸上競技が出来ないのは辛い。でもここは割り切ろう。せめて二度寝の幸せくらいかみ締めなくっちゃって思ったんだ。

つい一昨日の事だ。陸上競技場ではか先輩は、自分の走り高跳びの順番を心静かに待っていた。ぐるんぐるんと足首のストレッチを行いながらね。ばか先輩は、去年の大会の覇者だったんだよ。ピグ学園の応援席から声援が聞こえる。みんな期待してくれている。自分の周りには他校の選手は、びびっているように映ったよ。ばか先輩は、ここはぜひ優勝して二連覇を飾りたいと張り切っていたよ。

自分のため、そしてピグ学園の名にかけても。

でも悲劇がばか先輩を襲ったんだ。気合の入りすぎたばか先輩は、勢い余って着地に失敗しグラウンドに倒れ伏してしまった。

ばか先輩が目覚めると、そこは病院のベッドの上だった。時刻はもう夕方になっていて試合はとっくの昔に終わっていたんだ。心配そうに見守るばかピグと自慢ピグ。そして顧問の先生の姿もあった。ばか先輩は、なんと骨折で全治三ヶ月の診断だった。

「記録を残せる選手は君しかいなかったから、今まで頼りきりですまないね。この機会にゆっくり休んでケガを治しなさい」

先生は言ったよ。確かにばか先輩は去年の覇者だ。そして去年、他の部員は誰も入賞しなかった。それは、今年も同様だったんだよ。「ばか先輩の記録に少しでも迫れるよう僕たちこれから一生懸命練習します。そして大会で入賞したい」

ばかピグも言ったよ。ケガは、自分の勇み足が招いた事で、自分が悪いんだ。内心、とても落ち込んでいたばか先輩だったけど、みんなのやさしい言葉に心が軽くなったものさ。

かくて陸上部のみんな公認でばか先輩は、部活を休んで療養に専念する事にした。

二度寝をむさぼったばか先輩は、松葉杖で学校に行ったよ。いつもと同じように学校の授業が始まる。そして何の変哲もなく、一日が過ぎてゆく。本来ならば部活があるはずの放課後になって、ようやくばか先輩は何か欠けたような物足りなさを感じたものさ。でも療養に専念する事になっているから、まっすぐに家に帰る事にした。カバンをたすきがけにしたばか先輩は、松葉杖で玄関を出た。グラウンドでは、いろんな部活の生徒たちが練習をしている。なかには、陸上部の姿もあった。自慢ピグやばかピグが基礎練習をしている。ばか先輩は、ついついネット越しに練習風景を眺めていたものさ。そのうちに松葉杖を振り捨ててあの中に駆け出していきたい衝動に襲われた。でも今の自分は、足が言う事をきかないんだ。立ち尽く

すばか先輩は、自分のふがいなさに涙がこみ上げてきたよ。けれど松葉杖では、容易に涙を拭う事もできなくて流れる涙をそのままにしていたんだ。やはり帰宅しようとしてグラウンド横を通りかかったナイトピグがその様子をじっと見ていた。

それから二ヶ月余りが過ぎた。

放課後、すばか先輩の教室にはかピグが訪れたよ。

「やあ。すばかピグ君。どうしたんだい？」

「えへへ。すばか先輩がどうしてるかなあって思って」

「おかげさまで順調に回復している。来月には、包帯が取れる。もしたら部活に戻れるぞ。ははは」

「わあ、よかった。あの、今日はですね。これを持ってきたんです」  
すばかピグは、ごそごそとカバンの中をかき回すと、一枚のCDを取り出した。

「「星華隊」の今度のアルバムがすごくいんですよ。先輩、ぜひ聞いてみてください。じゃあ、僕は部活に行ってきます」

すばか先輩が返事をする暇もなく、すばかピグはCDを押し付けると走って行ってしまったよ。すばか先輩は首をひねったよ。すばかピグがCDを貸してくれた事なんて一度もなかったからね。

「変なやつだなあ……」

すばか先輩は、くすつと笑った。でも珍しくすばかピグが勧めてくれているんだから、きつといい曲が収録されているに違いない。

CDを家に持ち帰ると、すばか先輩は、さっそく部屋でアルバムを聴きはじめた。最初はギターのソロが際立つアップテンポな曲だ。

「星華隊」の軽快なメロディーは、すばか先輩の好みだったよ。すばかピグは、部活ができなくて腐っている自分にせめてもの楽しみをとこのCDを貸してくれたのだろう。すばか先輩は、すばかピグに心から感謝した。

だけど、それだけじゃなかった。最後のバラード調の曲が始まると、すばか先輩は、はっとしたんだ。

たとえ疲れて大地に倒れ伏す事があっても、いつか君はきつと立ち上がる

数ヶ月前陸上競技場に倒れてしまった自分がオーバーラップするようだ。それは、かつて勝利したものが今試練に耐えている、そんな歌詞だったんだよ。ばか先輩は、慌てて歌詞カードを見た。

タイトルは、「ファイナリストの冬」作詞は、ナイトとあった。たぶん「星華隊」のメンバーなのだろう。

ばか先輩は、大きくうなずくと、何度も何度もかみ締めるようにその曲を聴いたんだ。

## 25・どこから手をつけよう？プリン誘惑（前書き）

この作品は、私がブログにアップしているお題をタイトルに書きました。お題をもとにあとからストーリーを考えています。

今回のお題は、「どこから手をつけよう」と「プリン誘惑」です。更に課題である”地の文に突っ込みを入れる”が、含まれています。



## 25. どこから手をつけよう？プリンの誘惑

大御所邸の厨房はとても忙しい。

朝ごはんに始まり、間をおかずには昼ごはんの準備が始まる。そして三時のおやつに夕ご飯と一日に四回も支度が必要なんだ。そして大御所ピグの屋敷には、来客がとても多い。だからお客さんの食事を作る事もしょっちゅうなんだ。

厨房には、いつ誰がやってきてその時にどんなメニューを提供したかすべて記録してある。大御所ピグの日々のメニューを変えるのと同じようにお客さんに対しても前回やってきた時とメニューがかわらないように気をつけているんだ。

加えて来訪者の人数によって作る量だって増える。訪問客の中に子供がいれば、子供が喜ぶものを考える。ヘイヤスーのようなベテランシェフじゃなきゃ、とてもじゃないが対応できないんだよ。

バリエーションに富んだ喜んでもらえるメニューにしなきゃって、ヘイヤスーはいつも頭を悩ませているんだ。

大御所ピグの厨房は、ちょっととしたホテル並みだ。冷蔵庫などの設備も業務用のものが揃えられている。なんとピザやパイを焼くための石釜まで設置されているんだ。そして新鮮な食材が毎日のように運ばれてくる。

新しいメニューの研究のためなら、それらの食材を惜しみなく使って構わないんだ。だからヘイヤスーは、思う存分、腕を振るう事ができる。仕事はハードではあるけれど、この職場はお給料がとってもいいんだ。ヘイヤスは、今の状況にとっても満足していたよ。ヘイヤは、ここのお給料で家を建てたんだからね。

けれど悲しきかな、忙しくてその家に帰る機会も少なくなってしまうんだ。もちろん、忙しいのはスーにしても同じ事なんだ。大御所邸で料理を担当するって事は、世間的には一流ホテルで修業をするのと同格と言われている。今日もヘイヤスーは、厨房で料理に取

り組んでいるよ。

さつきからヘイは、顔をしかめながら、作業をしていた。ヘイは、ずっと足が痛いなと思っていたんだ。だから、料理をする腕にも力が入らない。そんな様子を見て、スーが言ったものさ。

「おい、ヘイ。足を引きずっているじゃないか。大丈夫かい？」

「ああ、ちよつと辛いかな。でももうすぐ支度も終わるからなんとか頑張るよ」

「間もなくダンが料理修業から帰ってくる。そしたら今よりも楽になるよ。疲れが溜まったのかもしれないな。ヘイは大御所ピグ様の料亭のプロデュースマまでしているんだろう？ いずれにしてもヘイは、働きすぎだよ」

「ダンが帰ってくるのが待ち遠しいよ。我々はメニューを考えるだけで、作るのは料理ハムちゃんたちに任せられるとしても、二人体制と三人じゃ全然違う」

「そうだよな。精神的にもだいぶ負担が減るってものさ。あのさ、ダンが来たら少し休暇を取りなよ……今日は、辛そうだから医者に行つて来るといいよ」

「ありがと。そうするよ。スー」

厨房が片付くと、ヘイとスーはいつもの日課で、戸棚から貝ひもを取り出し軽く酒を飲みながら明日の打ち合わせをしたよ。もちろん、ヘイは早々に切り上げて病院に行つたんだ。

インピグ病院では、忙しそうにナースのピグたちが立ち働いている。

受付をして小一時間、ヘイは待った。いちどドクターピグから呼ばれて簡単な問診を受けると、言われるままに検査を受けたんだ。ふたたび診察室から名前を呼ばれたヘイは、丸椅子に腰掛けてちよつぱり猫背になりながら、上目遣いに医者表情をじつとつかうたよ。ヘイは、自分が健康的な生活をしていると言う自信がなかった。ドクターピグは、検査の数字を見ながらヘイに言ったものさ。

「こりゃあ、ヘイさん。痛風ですね。ほら、この数字を見てくださいよ」

ドクターピグは、検査シートを見せてくれた。ヘイは、がーんとなったよ。

「ややや、やっぱりですか……」

「やっぱりって言うと、そう思っていたんですね？ ヘイさんは、お酒とか好きですか？」

「毎日、飲んです。仕事でストレスが溜まるので……」

「ヘイさんのお仕事は……ほう。大御所ピグさんのところのシェフですかあ。そりゃあ、料理の研究と称して美味しいものが沢山食べられるんじゃないですか？ 痛風と言えば俗に贅沢病と言いますからなあ」

「あつ……あの……」

「ヘイさんにはお薬を出しておきます。それから食事制限をしていただきますよ。あなた、気をつけないとしまいには糖尿病を併発しますよ。今、管理栄養士に連絡を取ります。帰りに栄養指導室に寄って行ってくださいね」

ドクターピグはひととおり説明すると、くるりと向きを変えカルテを書き始めた。

ヘイは、ドクターピグに示された栄養指導室にやってきた。そこには、女性の管理栄養士がいたよ。ちよつとクールな感じの美人さなんだっただ。

「ヘイさん。こんにちは。管理栄養士のため島です。よろしく」

「よ、よろしくお願いします」

ヘイは、ぺこりと頭を下げた。

「どうぞ椅子にかけてください」

栄養指導室は、診察室みたいに病院つて感じはしなくて、応接セツトやテレビなどが置かれたリラックスできる空間だった。けれど、ヘイはちつともリラックスした気持ちになんてなれなかったよ。だめ島管理栄養士は、書類を抱えてヘイの向かい側の席に座った。

「痛風のための食事は、つまるところ、健康的な食生活をする事に  
もつながりますから、これからわたしの話をしっかりと聞いてくだ  
さいね」

彼女の姿勢は毅然としたものだった。少々早口だったけど丁寧に  
指導内容をヘイに言っていて聞かせたよ。だけど、ところどころで、あ  
れもだめ、これもだめって言うんだ。

「わかりましたか？ ヘイさん」

「あつ、あの……守る事が多すぎて、どこから手をつけたらいいの  
か……」

「全部、守ってください」

だめ島管理栄養士は、ぴしりと言い放ったよ。ヘイは深い深いた  
め息をついた。

「ネガティブなのは、だめでーす」

「あつ、はい。すみません」

「ヘイさんは、シェフなので健康的な食材でいくらでも料理を工夫  
できるでしょう？ かなり恵まれていますよ。今度いらっしやる時  
には少しでも改善されていますように……。それからこれはわたし  
が栄養指導しているDVDです。貸し出しますから、参考にしてく  
ださい」

DVDのパッケージには、差し棒を持って微笑んでいるだめ島管  
理栄養士の姿があったから、要らないとは言えなかった。DVDを  
受け取ると、ヘイはがっくりと肩を落として病院を後にしたよ。

「やあやあ、ヘイにスー。ただいまっ！」

ダンが厨房に帰ってきた！ ダンは、黒いタートルにゆるくスト  
ールを巻いてチェックのパンツスタイルと、かなりファッショナブ  
ルな格好になっていたよ。

「久しぶりだなあ。ダン。この間会ったのはクリーミー選手権の時  
だったかな。すっかり垢抜けたじゃないか」

スーは嬉しそうに言ったよ。

「さつそく、料理の腕を見せてもらいたいね。なあ、スー」  
「へいもあたたかくダンを迎えたよ。」

「ははは。ありがとう。しばらく不在にしている悪かった。さてと、ふたりにお土産があるんだ」

「ダンを持ってきたカートを横に置くと、ぱかっとな蓋を開けた。へいとスーはわくわくしながら待っていたよ。」

「修業先で手に入れた地ビールさ。いろんなのがあるよ」

「おお！」

「へいとスーは、喜びの声をあげた。スーは、手にとってそれを眺めたよ。」

「おお……次々と珍しいビールが出てくるじゃないか」

「へいは、よだれが出そうになって手を伸ばしたよ。さつそく再会を祝して乾杯をしたいと思ったんだ。けれどスーは、へいの手を押さえ込むと、ビールを全部自分のほうに引き寄せるじゃないか。」

「へいに与えるビールは、俺が管理する事にする」

「ええっ！？ それは、どう言うことだい？ スー」

「ダンが目をぱちくりさせたよ。」

「ダン。実は、へいは、痛風にかかっちゃったのさ。だからさ……」  
「なるほど。ビールはプリン体が多いからなー」

「プリン体って……。は、ははは。ちよっとスー。冗談はやめてそのビールをボクに頂戴よーっ。それは、ダンからボクへの土産じゃないか」

「スーに手を差し伸べるへい。」

「だめだよ。へい」

「スーは、ビールを抱え込むようにして背を向けた。」

「美人管理栄養士のだめ島さんがだめって言ったんだろっ？」

「ダンがつかつかとスーに近づいてきて言ったよ。」

「スー。管理栄養士さんが美人なのか？」

「そうなんだよ。きりつとした知的な人でなあ……。おい、へい。彼女の栄養指導のDVDがあっただろっ？」

「ほう。美人の管理栄養士さんのDVDかあ」

ダンが弾んだ声で言う。スーは、へいにDVDを出させるとテーブルの上のパソコンにセットしたよ。画面が青くなって「だめ島管理栄養士の痛風の食生活」の白いテロップが現れた。続いて白衣を着ただめ島管理栄養士が大写しになったんだ。彼女の後ろには、ホワイトボードがある。

「ほうほう。きれいな人だなあ。おまけに説明もわかりやすいときた」

DVDはところどころ、だめつと言いながら解説してくれている。へいには聞き飽きた内容だったけれど、ダンとスーは、食い入るようにそれを見ていたよ。そして、約二十分のDVDを見終えて、スーは言ったものさ。

「やっぱりさ。自分で気をつけようと思ってても難しいのさ。仲間としては気をつけてあげないとなあ」

「そうだな。スー。これからは、へいにビールとかプリン体の多い食べ物勧めないようにしよう。これもへいのためさ」

ふたりは、うなずきあった。へいは、泣きたい気持ちだったよ。

体に悪いものは、美味しいんだ。まして背徳感を覚えながらそれを食べる美味さと言ったら……。

深夜。へいは、厨房に忍び込んだよ。冷蔵庫からビールを取り出した途端……。パチリと厨房の明かりがついた。びっくりしてへいは、振り返ったよ。

「うそそと音がすると思ったら……」

「ビールを隠れ飲みするなんざ、よくないぞ。へい」

そこには、ダンとスーがいたんだ。へいには、二人が悪魔に見えたものさ。

「夜に少しだけ飲んだじゃないか。全く禁止してはストレスが溜まるから、量を決めて少しだけ飲むようにしましょうって、だめ島さんも言ってただろう」

「あんなんじゃ、足りないよ！ 飲めばますます飲みたくなる。なんでプリン体の多い食品がだめなんだ。ボクの食べたいものはそればかりだよ」

ヘイは、力の限り叫んだ。でもダンとスーにビールを取り上げられてしまったよ。その夜。ヘイは、泣く泣く飲むのを諦めたんだ。

だめと言われると欲しくなる。プリンの誘惑には、抗えない。それからヘイは、せめて外でビールを調達しようとしれば大御所邸からの脱走を試みたよ。でもそのたびに、ダンかスーのどちらかがやってきて、ヘイの行動を阻むんだ。

かくて、いつもいつもダンとスーがヘイの食生活に注意を払っているうちに……。

三人の一緒にいる時間が増えて、絆がより深まったんだよ。

「違うよ！」

ヘイが異論を唱えた。

「三人の絆がより深まったって、そんな締め、あるかい！」

ヘイは、コントロールと＋キーを同時に押したみたいにずんずんと手前によって来るじゃないか。そして画面から飛び出しそうな勢いで言ったものさ。

「二人が、いちいちボクの食生活をチェックしてるだけじゃないかっ！ 他の締め方をしてくれよ」

言うだけ言うとヘイは去って行った。

かくて、ダンとスーのおかげでちょっとだけ、ヘイの病状はよくなっただ。

でもそれでもヘイの頭から煩惱が消えることはなかったんだよ。プリンの誘惑捨てがたし。

## 26・赤いコートの女の子／目にも鮮やか（前書き）

この作品は、私がブログにアップしているお題をタイトルに書きました。お題をもとにあとからストーリーを考えています。

今回のお題は、「赤いコートの女」と「目にも鮮やか」です。



## 26・赤いコートの女の子も目にも鮮やか

12月。街はすっかりクリスマスの装いだよ。

学校からの帰り道、だめ子はウンドさんのビルの前を通りかかった。ウンドさんのビルは三階建てで一階と二階はお店になっているんだよ。お店の入り口のショーウィンドウには赤いコートを着たマネキンが飾られている。だめ子は思わず立ち止まったよ。

洋服を引き立たせるためにマネキンのボディは真っ黒に作られていて、赤いコートとのコントラストが目にも鮮やかだ。マネキンの足元に雪を模した綿が敷き詰められている。金色の箱に赤いリボンをかけたプレゼントの飾りや小さなもみの木もマネキンの装いを引き立たせているよ。

だめ子はお洋服がとっても好きで、将来はファッション関係の仕事がしたいと思っている。だから目を射抜くような鮮やかな色彩のコートは、だめ子を夢の世界へいざなうように見えたものさ。

「あら。だめ子さんじゃないの！」

だめ子がうっとりとしょーウィンドウを眺めていると、お店の中からウンドさんが出てきた。ウンドさんはとってもステキな模様のドレスを着ていたよ。

「あつ。ウンド先生」

「だめ子さん。ここは寒いわ。中でお茶でもどうぞ」

「ありがとうございます」

ウンドさんに招かれただめ子は事務所のソファにお行儀よく腰かけた。そして運ばれてきたローズヒップティーとクッキーをいただいたんだ。以前、だめ子はウンドさんの事務所に通っていた事がある。

「お久しぶりね。だめ子さん」

「ごぶさたしています」

久しぶりに会って、ウンドさんとだめ子の話ははずんだよ。ウン

ドさんの仕事場には沢山の洋服が飾られている。だめ子はそれらに目をやったよ。

「ウンドさんが思い出したように言った。」

「そうそう。今度、ピグガールズコレクションを開くのよ。だめ子さん。良かったらモデルをやってみない？」

「えっ?!」

だめ子はびつくりさ。

「とってもいい経験になると思うわよー」

「ウンドさんは、にこにここと微笑んでいる。」

「私がモデルなんてだめですよ」

「今度コレクションで発表する服は、お店で売り出すのよ。だからモデルもだめ子さんのような普通のお嬢さんがいいのよねー」

「ほんとですか」

だめ子の目が輝いたよ。

「もちろんよ」

ウンドさんは言った。だめ子は天にもものぼる心地だったよ。

それからショーに向けて、だめ子はせっせとウンドさんのところに足を運んだんだ。レッスンが始まった。だめ子は姿勢を正してウォーキングの練習をさせられたよ。それはバレエの部の練習よりもずっと厳しかったんだ。

「ねえ。だめちゃん。今度のお休みに一緒にお買い物に行かない？」

放課後の教室でわる子が話しかけてくる。いつもならすぐに話に乗るんだけど、今は違う。

「わる子ちゃん、ごめんね。今度のお休みはだめなのよ。ウンドさんのところに行くから」

だめ子はわる子たちの遊びの誘いも一切断ったよ。

「どうしたの？ だめちゃん」

さすがにわる子が訊いてきて、だめ子はファッションショーの事を話したんだ。

「だめちゃん。すごいー!」

わる子の声に食いしん坊ピグやナイトピグがやって来た。みんなはだめ子の晴れ姿を見に来るよって言うてくれたんだ。だめ子はいいよ後には引けなくなつたよ。

にこにこだめ子にモデルを勧めてきたウンドさんだったが、シヨールのリハールは容赦なかったよ。だめ子はしばしばそんな歩き方じゃだめよって怒られた。それでもだめ子は、懸命に頑張つたんだよ。かくて、だめ子の歩き方もそれなりにさまになつてきたんだ。

そしてついにファッションシヨールの当日がやって来た！

控え室でだめ子はしっかりとメイクをしてもらつていた。お化粧をしたことがないだめ子にとってそれはとっても新鮮な事だったよ。まつげが長く目がものすごくぱつちりして、いつもと顔つきが違って見える。雑誌で見るとみたいなのモデル風の女の子が鏡の中にいたよ。控え室のカメラで次々と出ていくモデルたちをだめ子は眺めていた。他のモデルと違ってだめ子の出番は一回こっきりなんだ。

そしてだめ子の出番がやって来た。

「だめ子さんのイメージカラーは赤なのよー」

ウンドさんは言つてこのコートを勧めてくれたんだ。それはシヨールウインドーに飾られていた大人向けのコートとは違うジュニア向けのデザインされたものだったんだよ。

舞台の袖から見ると、沢山のお客さんが見えた。でもコートの赤い色がだめ子にエネルギーをくれるみたいだった。先に出て行ったモデルが戻ってくるのと入れ違いにだめ子は客席に向けて颯爽と歩いて行った。ちょっと緊張してふわふわと雲の上を歩いているみたいだったけど、厳しい練習を経てだめ子の体にはウォーキングがしみついてたよ。舞台の端までくると、だめ子はコートの身頃を両手に持つてコートがよく見えるように左右の客席を向いた。前列に並んだわる子たちの姿が見える。だめ子は充分に客席に服を見せ付

けるとくるりと後ろを向いて歩き去る。ほんの数分の出来事だった。そしてそれは一回限りの事だ。だめ子の後ろから惜しみない拍手が聞こえてきた。

そしてだめ子はウンドさんにショーで身につけた赤いコートをプレゼントされたんだよ。

## 27・大御所ピグのお正月

一月二日のことだ。大御所ピグは、メイドのピンクハムちゃんを引き連れて街に買い物に来ていた。新しい年を迎えてデパートはごった返している。あれやこれやと商品を物色するピグたち間を縫って大御所ピグは、ゆうゆうとお買い物をしていたよ。後ろを歩くピンクハムちゃんは、お菓子の入った紙袋をぶら下げている。ほかに面白い物をした品々はあとで家まで届けてもらうんだよ。

「さあ。面白い物はこれで終わりよ。ピンクハムさん、お茶でもして帰りましょうね」

「はい。大御所ピグ様」

ピンクハムは嬉しそうに言ったよ。大御所ピグの買い物の付き添いに選ばれる事は、とつてもラッキーなんだ。今みたいにお茶をご馳走してもらったり、メイドハムさんたちで食べなさいとお菓子を持たせてくれたりもするんだよ。

通りに出ると大御所ピグは肩をすくめた。空はどんよりと曇り、雪がちらついている。

大御所ピグはぱつと傘を広げたよ。交差点の角に差し掛かると、白いワゴンが停まっていてひとりのピグが街頭演説をしていたよ。

「そう言えば、新春早々、市長選挙があるのだったわねー」

大御所ピグは、立ち止まり演説に聴き入ったよ。

「やあやあ、大御所ピグさん。こんにちは」

演説を終えたピグが大御所ピグのところに挨拶にやって来た。なんとそれはインチキ堂のおやじだったんだ。インチキ堂のおやじは、インチキおやじと書かれたたすきをななめがけにしているよ。

「こんにちは。インチキ堂のおやじさんも市長選に立候補したんでしたね」

大御所ピグはにっこりと微笑んだ。

「そうなんですよ」

インチキ堂のおやじは誇らしげに言ったよ。

「まー。おやじさんは、最近ボランティアもなさってるそうですね。活躍されていますこと！」

「ははは。大御所ピグさんほどではありませんよ。では、このわたしに一票をお願いしますよ。そちらのメイドさんもぜひ」

インチキ堂のおやじは、大御所ピグとピンクハムに握手を求め、立ち去って行ったよ。

そんなインチキ堂のおやじの背中を見ながらピンクハムちゃんが言った。

「大御所ピグ様。インチキ堂のおやじさんって何気にすごい人だったんですねえ」

「そうねー。でも立候補だけなら誰でも出来るのよー」

大御所ピグは、さらりとキツイ事を言うといそいそと歩いて行っただよ。カフェの前に差し掛かると今度は対立候補の駄目ピグが街頭演説していた。頭に雪が積もってとっても寒そうだったけど、そんな雪を吹き飛ばすくらいの熱く語っているのが印象的だったよ。大御所ピグがその名前を知ったのは、つい昨日のことだった。

「大御所ピグ様。どちらが市長さんになるのでしょうかね」

「さあ。どうかしらねー」

駄目ピグは、インチキ堂のおやじさんほど、弁舌が立て板に水じゃない。その演説はカミカミの不器用なものだった。市長選挙はインチキ堂のおやじと駄目ピグの一騎打ちなんだけど、これではちょっと先は見えているかもしれないね。

どちらが市長になるかは、今の市民のいちばんの関心事だ。メイドハムちゃんたちは控え室で、大御所ピグからの差し入れのクッキーをつまみながら、市長選のテレビを見ていた。

「私、大御所ピグ様のお使いについていってインチキ堂のおやじさんに会ったのよ。なんだかんだ言ってもしゃべりが上手だし知名度も上よね」

「私は、結構駄目ピグさんも頑張ってると思うわー」

そんなふうに言うメイドハムちゃんもいたよ。テレビは、ドラマチックにインチキ堂のおやじと駄目ピグの対比を映し出している。そこにメイド部屋のインターフォンがなった。テレビモニターに大御所ピグが移っている。

「みなさん。大広間に集まってちょうだい」

「はいっ」

先ほど大御所ピグのお使いについて行ったピンクハムちゃんが返事をしたよ。

「大御所ピグ様のお呼び出しよ。さあ行きましょう」

メイドハムちゃんたちは誘い合って、大広間に向かったよ。新年の飾り付けが施された大広間には使用人たちが担当別にきちんと整列していた。その中でピンクハムちゃんを先頭とするメイドハム一行は、もっとも多勢だ。その姿たるやまるで大奥のように見える。みんなが並び終わると、執事ハムちゃんが言った。

「大御所ピグ様のお年始のごあいさつでございます」

料理人のヘイがどんと太鼓を叩く。お買い物から帰って金糸銀糸の刺繍をあしらったドレスに着替えた大御所ピグが中央に歩み出た。大御所ピグはコホンとひとつ咳をして言った。

「み・な・さん。あけましておめでとうございます」

使用人たちも声をそろえて、あけましておめでとうございますと言ったよ。

「今年も健康に留意しつつ、お勤めしてくださいね。困ったことがあつたらなんでも私に相談してちょうだい」

「はいっ」

使用人たちが元気に返事をする。

「私は今日デパートでお買い物してきました。おりしも街は市長選でとても熱かったのです。ああ今年がはじまったんだなあという印象です。さて私の今年の目標ですが……より一層執筆に励んでまいると思います。それから今年はウンドさんと共同で手帳のプロデュースも手がけて行きます。その名も「大御所手帳」で

す。このように今年を迎えた瞬間からもう翌年にむけて始動しているのです。一年後には、あちこちの本屋さんに、私の書籍だけでなく、手帳も並ぶことになるでしょう」

使用人たちの中から、おお！　と言う声があがった。

「当面の予定として、明日は妹のサン子が出てくるので、精々もてなしてやってほしいの。それから、大御所スポーツクラブ社長としてテレビ出演の予定があります。付き添いは秘書ピグさんでよろしくね」

「はいっ！」

「はい」

三人の料理人や秘書ピグから声があがる。

「では、みなさん。お疲れ様でした。お年始のお祝いを受けとっていただくさいね」

大御所ピグの手から使用人たちひとりひとりに「お疲れ様」や「ありがとう」の一言とともにお年玉が手渡されたよ。そして自宅に帰るもの、引き続き勤務を継続するものにわかれ、使用人たちは解散した。

午後からは、大御所ピグの親戚のピグたちが次々と屋敷に訪れたよ。三人の料理人たちは、大量のおせちを作り置いてお休みだ。その代わりに今日がシフト勤務のメイドハムちゃんたちが、料理人たちのレシピにもとづいて追加の献立を調理しているんだよ。

そんな風は大御所ピグの屋敷のにぎやかな一日が終わっていったよ。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2197h/>

---

わる子ちゃん

2012年1月2日09時49分発行